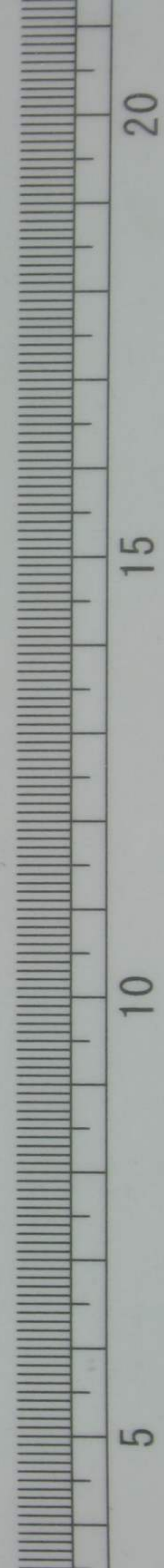


千曲川のツケス



島崎藤村著

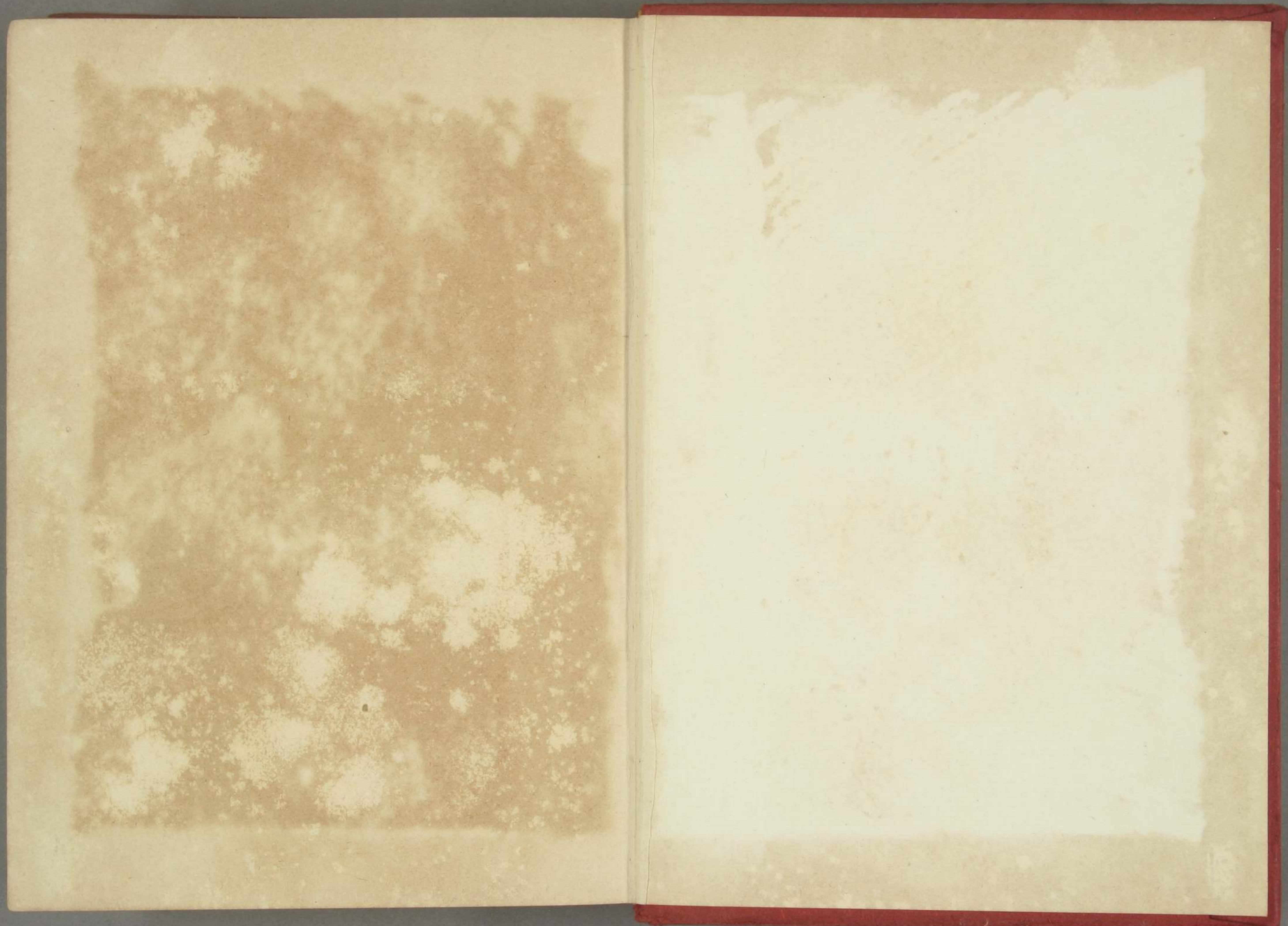


著 藤 村

千曲川のスケッチ



版房書良久左



島崎藤村著

この書を吉村樹君に呈す

千曲川のスケッチ

序

敬愛する吉村さん——樹^{しげる}さん——私は今、序にかへて君に宛てた一文を斯の書のはじめに記すにつけても、矢張呼び慣れたやうに君の親しい名を呼びたい。私は多年心掛けて君に呈したいと思つて居たその山上生活の紀念を漸く今纏めることが出来た。

樹さん、君と私との縁故も深く久しい。私は君の生れない前から君の家にまだ少年の身を托して、君が

生れてからは幼い時の君を抱き、君をわが背に乗せて歩きました。君が日本橋久松町の小學校へ通はれる頃は、私は白金の明治學院へ通つた。君と私とは殆んど兄弟のやうにして成長して來た。私が木曾の姉の家に一夏を送つた時には君をも伴つた。その時がたしか君に取つての初旅であつたと覺えて居る。私は信州の小諸で家を持つやうに成つてから、二夏ほどあの山の上で妻と共に君を迎へた。その時の君は早や中學を卒へやうとするほどの立派な青年であつ

3

た。君は一夏はお父さんを伴つて來られ、一夏は君獨りて來られた。斯の書の中にある小諸城址の附近、中棚温泉、淺間一帶の傾斜の地などは君の記憶にも親しいものがあらうと思ふ。私は序のかはりとしてこれを君に宛てるばかりでなく、斯の書の全部を君に宛て、書いた。山の上に住んだ時の私からまだ中學の制服を着けて居た頃の君へ。これが私には一番自然なことと、又たあの當時の生活の一番好い紀念に成るやうな心地がする。

『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはな
いか。』

これは私が都會の空氣の中から脱け出して、あの山
國へ行つた時の心であつた。私は信州の百姓の中へ
行つて種々なことを學んだ。田舎教師としての私は
小諸義塾で町の商人や舊士族やそれから百性の子弟
を教えるのが勤めであつたけれども、一方から言へ
ば私は學校の小使からも生徒の父兄からも學んだ。
到頭七年の長い月日をあの山の上で送つた。私の心

は詩から小説の形式を擇ぶやうに成つた。斯の書の
主なる土臺と成つたものは三四年間ばかり地方に黙
して居た時の印象である。

樹さん、君のお父さんも最早居ない人だし、私の妻
も居ない。私が山から下りて來てから今日までの月
日は君や私の生活のさまを變へた。しかし七年間の
小諸生活は私に取つて一生忘れることの出來ないも
のだ。今でも私は千曲川の川上から川下までを生々
と眼の前に見ることが出来る。あの淺間の麓の岩石

の多い傾斜のところ、身を置くやうな気がする。あの土のほひを嗅ぐやうな気がする。私がつぎくに公けにした『破戒』、『緑葉集』、それから『藤村集』と『家』の一部、最近の短篇など、私の書いたものをよく読んで居て呉れる君は何程私がああの上から深い感化を受けたかを知らるゝであらうと思ふ。斯のスケッチの中で知友神津猛君が住む山村の附近を君に紹介しなかつたのは遺憾である。私はこれまで特に若い読者のために書いたとも無かつたが、斯

の書はいくらかそんな積りで著した。寂しく地方に住む人達のためにも、斯の書がいくらかの慰めに成らばなぞとも思ふ。

大正元年冬

藤村

目次

其一

學生の家……………二

鏡砲蟲……………一〇

烏帽子山麓の牧場……………二

其二

青麥の熟する時……………二六

少年の群……………二九

麥島……………三三

古城の初夏……………三九

其三

山莊……………五六

毒消賣の女……………六九

銀馬鹿……………七〇

祭の前夜……………七一

十三日の祇園……………七五

後の祭……………八四

其四

中棚……………八八

檜の樹蔭……………九九

其五

山の温泉……………一〇一

學窓の一……………一〇八

學窓の二……………一一一

田舎牧師……………一一三

九月の田圃道……………一二四

山中生活……………一二七

山番……………一二五

其六

秋の修學旅行……………一三六

甲州街道……………一三七

山村の一夜……………一四一

高原の上……………一四六

其七

- 落葉の一……………一六〇
- 落葉の二……………一六一
- 落葉の三……………一六三
- 炬燵話……………一六六
- 小六月……………一七一
- 小春の岡邊……………一七二
- 農夫の生活……………一七九
- 收穫……………一八六
- 巡禮の歌……………一九五

其 八

- 一ぜんめし……………二〇〇
- 松林の奥……………二〇四

- 深山の燈影……………二二一
- 山の上の朝飯……………二二三

其 九

- 雪國のクリスマス……………二二〇
- 長野測候所……………二二四
- 鐵道草……………二二六
- 屠牛の一……………二二七
- 屠牛の二……………二二九
- 屠牛の三……………二三〇
- 屠牛の四……………二三四

其 十

- 千曲川に沿ふて……………二七一

○ 川船……………二七九

○ 雪の海……………二八四

愛のしるし……………二八九

山の上へ……………二八九

其十一

山に住む人々の一……………二九六

山に住む人々の二……………三〇二

山に住む人々の三……………三〇八

柳田茂十郎……………三二三

小作人の家……………三二五

其十二

○ 路傍の雑草……………三三六

○ 学生の死……………三四二

○ 暖い雨……………三四七

○ 北山の狼、其他……………三四九

御辭儀……………三五二

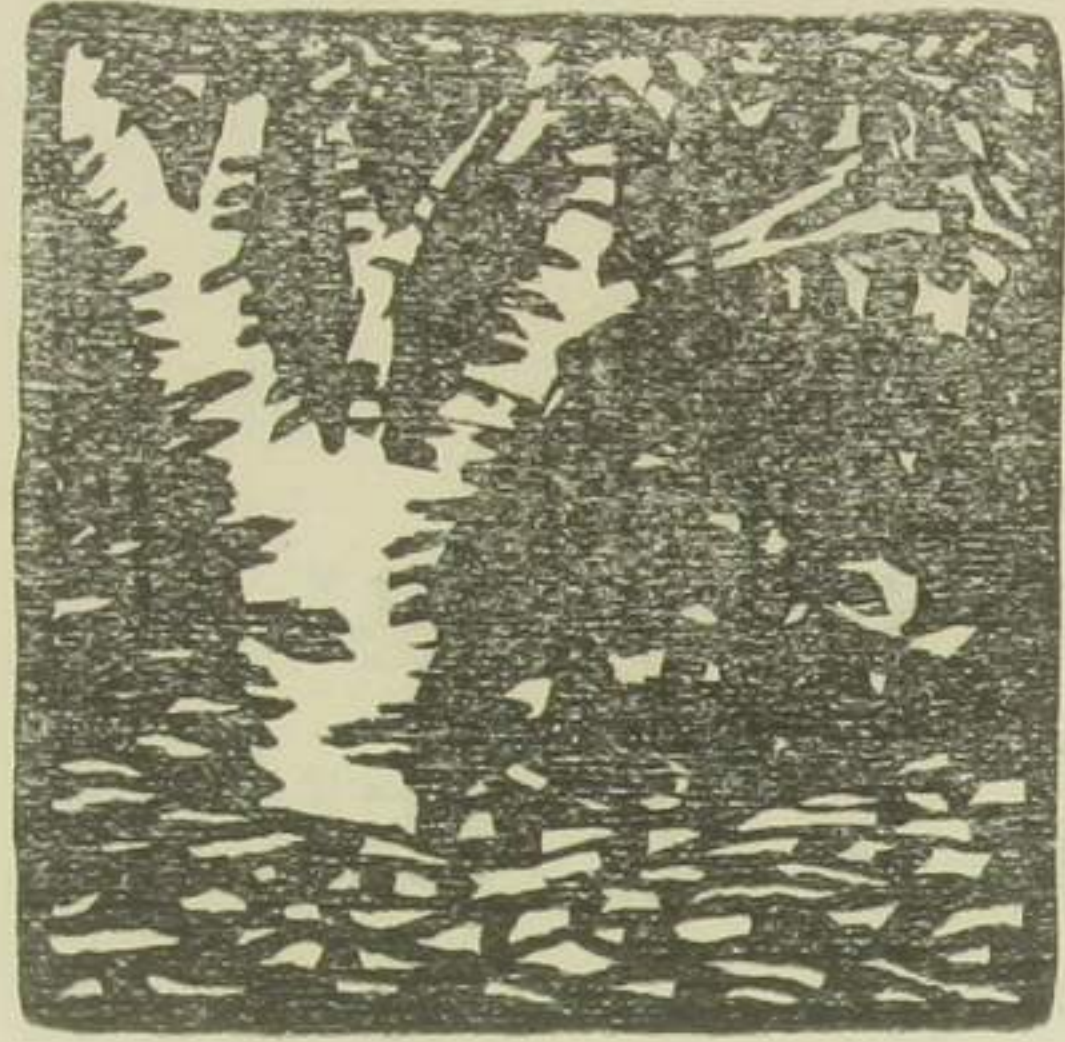
○ 春の先驅……………三五五

星……………三五七

○ 第一の花……………三五八

○ 山上の春……………三六〇

目次終



一 其

目次

卷一	一
卷二	一
卷三	一
卷四	一
卷五	一
卷六	一
卷七	一
卷八	一
卷九	一
卷十	一

學生の家

地久節には私は二三の同僚と一緒に、御牧が原の方へ山遊びに出掛けた。松林の間などを獵師のやうに歩いて、小松の多い岡の上では大分蕨を探つた。それから鶉窪といふ村へ引返して、田舎の中の田舎とでも言ふべきところで半日を送つた。

私は今、小諸の城址に近いところの學校で、君と同年位

な學生を教へて居る。君は斯ういふ山の上への春が奈何に待たれて、そして奈何に短いものであると思ふ。四月の二十日頃に成らなければ、花が咲かない。梅も櫻も李も殆んど同時に開く。城址の懐古園には二十五日に祭があるが、その頃が花の盛りだ。すると、毎年さまりのやうに風雨がやつて来て、一時にすべての花を浚つて行つて了ふ。私達の教室は八重櫻の樹で圍繞されて居て、三週間ばかり前には、丁度花束のやうに密集したやつが教室の窓に近く咲き亂れた。休みの時間に出て見ると、濃い花の影が私達の顔にまで映つた。學生等はその下

を遊び廻つて戯れた。殊に小學校から來たての若い生徒と來たら、あつちの樹に隠れたり、こつちの枝につかまつたり、まるで小鳥のやうに。どうだらう、それが最早すつかり初夏の光景に變つて了つた。一週間前私は晝の辨當を食つた後、四五人の學生と一緒に懷古園へ行つて見た。荒廢した、高い石垣の間は、新緑で埋れて居た。私の教へて居る生徒は小諸町の青年ばかりでは無い平原、小原、山浦、大久保、西原、滋野、其他小諸附近に散在する村落から、一里も二里もあるところを歩いて通つて來る。斯ういふ學生は多く農家の青年だ。學校の日課が濟む

と、彼等は各自の家路を指して、松林の間を通り鐵道の線路に添ひ、あるひは千曲川の岸に隨いて、蛙の聲などを聞きながら歸つて行く。山浦、大久保は對岸にある村々だ。牛蒡、人参などの好い野菜を出す土地だ。滋野は北佐久の領分でなく、小縣の傾斜にある農村で、その附近の村々から通つて來る學生も多い。こゝでは男女が烈しく労働する。君のやうに都會で學んで居る人は、養蠶、休みなどいふことを知るまい。外國の田舎にも、小麥の産地などでは、學校に收穫、休みといふものがあるとか。何かの本でそんなことを讀んだ

ことがあつた。私達の養蠶休みは、それに似たやうなものだらう。多忙しい時季が来ると、學生でも家の手傳ひをしなければ成らない。彼等は又、少年の時から左様いふ労働の手助けによく慣らされて居る。

Sといふ學生は小原村から通つて来る。ある日、私はSの家を訪ねることを約束した。私は小原のやうな村が好きだ。そこには生々とした樹蔭が多いから。それに、小諸からその村へ通ふ畠の間の平かな道も好きだ。

私は盛んな青麥の香を嗅ぎながら出掛けて行つた。右にも左にも麥畠がある。風が来ると、緑の波のやうに

動搖する。その間には、麥の穂の白く光るのが見える。斯ういふ田舎道を歩いて行きながら、深い谷底の方で起る蛙の聲を聞くと、妙に私は壓しつけられるやうな心地に成る。可怖しい繁殖の聲。知らない不思議な生物の世界は、活氣づいた感覺を通して、時々私達の心へ傳はつて来る。

近頃Sの家では牛乳屋を始めた。可成大きな百姓で、父も兄も土地では人望がある。斯ういふ田舎へ来ると、七人や八人の家族を見ることは別にめづらしくない。十八、十五人の大きな家族さへある。Sの家では年寄か

ら子供まで、田舎風に慇懃な家族の人達が私の心を惹いた。

君は農家を訪れたことがあるか。入口の庭が広く取つてあつて、臺所の側から直に裏口へ通り抜けられる。

家の建物の前に、幾坪かの土間のあることも、農家の特色だ。斯の家の土間は葡萄棚などに續いて、その横に牛小屋が作つてある。三頭ばかりの乳牛が飼はれて居る。

Sの兄は大きなバケツを提げて、牛小屋の方から出て来た。戸口のところには、Sが母と二人で腰を曲めて、新鮮な牛乳を罌詰にする仕度をした。暫時私は立つて眺

めて居た。

やがて私は牛小屋の前で、Sの兄から種々な話を聞いた。牛の性質によつて温順しく乳を搾らせるのもあれば、それを惜むのもある。アバレルやつ、沈着いたやつ、いろ／＼ある。牛は又、非常に鋭敏な耳を持つもので、足音で主人を判別する。斯様な話が出た後で私は斯ういふ乳牛を休養させる爲に西の入の牧場などが設けてあることを聞いた。

晩の乳を配達する用意が出来た。Sの兄は小諸を指して出掛けた。

鐵砲蟲

斯の山の上で私はよく光澤の無い茶色な髪の毛の娘に逢ふ。どうかすると、灰色に近いものもある。草葺の小屋の前や、桑島の多い石垣の側などに、左様いふ娘が立つて居るさまは、いかにも荒い土地の生活を思はせる。

『小さな御百姓なんつものは、春秋働いて、冬に成ればそれを食ふだけのものでござす。まるで鐵砲蟲——食つては抜け、食つては抜け——』
學校の小使が私に斯様なことを言つた。

烏帽子山麓の牧場

水彩畫家B君は歐米を漫遊して歸つた後、故郷の根津村に畫室を新築した。以前、私達の學校へは同じ水彩畫家のM君が教へに來て呉れて居たが、M君は澤山信州の風景を描いて、一年ばかりで東京の方へ歸つて行つた。今ではB君がその後をうけて生徒に畫學を教へて居る。B君は製作の餘暇に、毎週根津村から小諸まで通つて來る。

土曜日に、私は斯の畫家を訪ねるつもりで、小諸から田

中まで汽車に乗つて、それから一里ばかり小縣の傾斜を上つた。

根津村には私達の學校を卒業したOといふ青年が居る。Oは兵學校の試験を受けたいと言つて居るが、最早一人前の農夫として恥しからぬ位だ。私はその家へも寄つて、Oの母や姉に逢つた。Oの母は肥満した、大きな體格の婦人で、赤い艶々とした頬の色などが素樸な快感を與へる。一體千曲川の沿岸では女がよく働く、随つて氣象も強い。恐らく、これは都會の婦人ばかり見慣れた君などの想像もつかないことだらう。私は又、斯の土地

で、野蠻な感じのする女に遭遇ふともある。Oの母には其様な荒々しさが無い。何しろ斯の婦人は驚くべき強健な體格だ。Oの姉も労働に慣れた女らしい手を有つて居た。

私はB君や、B君の隣家の主人に誘はれて、根津村を見て廻つた。隣家の主人はB君が小學校時代からの友達であるといふ。パノラマのやうな風光は、斯の大傾斜から撞に望むことが出来た。遠く谷底の方に、千曲川の流れて行くのも見えた。

私達は村はづれの田圃道を通つて、ドロ柳の若葉のか

げへ出た。谷川には鬼芹などの毒草が茂つて居た。小山の裾を選んで、三人とも草の上に足を投出した。そこでB君の友達は提げて来た焼酎を取出した。斯の草の上の酒盛の前を、時々若い女の連が通つた。草苅に行く人達だ。

B君の友達は思出したやうに、

「君とこゝで鐵砲打ちに来て、半日飲んで居たつけナ」

と言ふと、B君も同じやうに洋行以前のことを思出したらしい調子で、

「もう五年前だ——」

と答へた。B君は寫生帳を取出して、灰色なドロ柳の幹風に動くそのやはらかい若葉などを寫し〜話した。一寸散歩に出るにも、斯の畫家は寫生帳を離さなかつた。翌日は私はB君と二人きりで、烏帽子が嶽の麓を指して出掛けた。私が牧場のことを尋ねたら、B君も寫生かた〜一緒に行かうと言出したので、到頭私は一晩厄介に成つた。尤も、斯の村から牧場のあるところへは、更に一里半ばかり上らなければ成らない。案内なしに、私などの行かれる場處では無かつた。

夏山——山鶴——斯ういふ言葉を聞いた丈でも、君

は私達の進んで行く山道を想像するだらう。『のつべ』と稱する土は乾いて居て灰のやう。それを踏んで雑木林の間にある一條の細道を分けて行くと、黄勝なすいし若葉のかけで、私達は旅の商人に逢つた。更に山深く進んだ。山鳩などが啼いて居た。B君は歩きながら飛驒の旅の話を始め、十一といふ鳥を聞いた時の淋しかつたことを言出した。『十一……十一……十一……』とB君は段々聲を細くして、谷を渡つて行く鳥の啼聲を真似て聞かせた。そのうちに私達はある岡の上へ出て來た。

君、白い鈴のやうに垂下つた可憐な草花の一面に咲いた初夏の光に満ちた岡の上を想像したまへ。私達は、あの香氣の高い谷の百合が斯様に生えて居る場所があらうとは思ひもよらなかつた。B君は西洋で斯の花のことを聞いて來て、北海道とか淺間山脈とかにあるとは知つて居たが、なにしろあまり澤山あるので終には採る氣もなかつた。二人とも足を投出して草の中に寝轉んだ。まるで花の臥床だ。谷の百合は一名を君影草とも言うて、『幸福の歸來』を意味するなど、花好きなB君が話した。

話の面白い美術家と一緒に、牧場へ行き着くまで、私は
 倦むことを知らなかつた。岡の上には到るところに躑
 躑の花が咲いて居た。斯の花は牛が食はない爲に、それ
 で斯う繁茂して居るといふ。
 一周すれば二里あまりもあるといふ廣々とした高原
 の一部が私達の眼にあつた。牛の群が見える。何と思
 つたか私達の方を眼掛けて突進して来る牛もある。斯
 うして放し飼にしてある牛の群の側を通るのは、慣れな
 い私には氣味悪く思はれた。私達は牧夫の住んで居る
 方へと急いだ。

番小屋は谷を下りたところにあつた。そこへ行く前
 に澤の流れに飲んで居る小牛、藪を探つて居る子供など
 に逢つた。牛が来て戸や障子を突き破るとかで、小屋の
 周囲には柵が作つてある。年をとつた牧夫が住んで居
 た。僅かばかりの瘦せた畑も斯の老爺が作るらしかつ
 た。破れた屋根の下で、牧夫は私達の爲に湯を沸かした
 り、茶を入れたりして呉れた。
 壁には鋸、鉋、鎌の類を入れた『山猫』といふものが掛け
 てあつた。斯様な山の中までよく訪ねて来て呉れたと
 いふ顔付で、牧夫は私達に牛飼の経験などを語り、斯の牧

場の管理人から月に十圓の手宛を貰つて居ることや、自分分は他の牧場から斯の西の入の澤へ移つて来たものであることなどを話した。牛は角がかゆい、それでこすりつけるやうにして、物を破壊して困るとか言つた。今は草も短く少いから、草を食ひく進むといふ話もあつた。牧夫は一寸考へて、見えなくなつた牛のことを言出した。あの山間の深い澤を、山の湯の方へ行つたかと思ふ、とも言つた。

『ナニ、あの澤は裾まで下りるなんてものぢやねえ。柳の葉でもこいて食つてら。』

斯う復た考へ直したやうに、その牛のことを言つた。間もなく私達は牧夫に伴はれて、斯の番小屋を出た。牧夫は多くの牛が待て居るといふ顔付で、手に鹽を提げて行つた。途次私達に向つて、『斯の牧場は柴草ですから、牛の爲に好いです』とか『今は木が低いから、夏はいきれていけません』とか、種々な事を言つて聞かせた。こゝへ來て見ると、人と牛との生涯が殆んど混り合つて居るかのやうである。斯の老爺は、牛が鹽を嘗めて清水を飲みさへすれば、病も癒えるといふことまで知悉して居た。月経期の牝牛の鳴聲まで聞き分ける耳を持つ

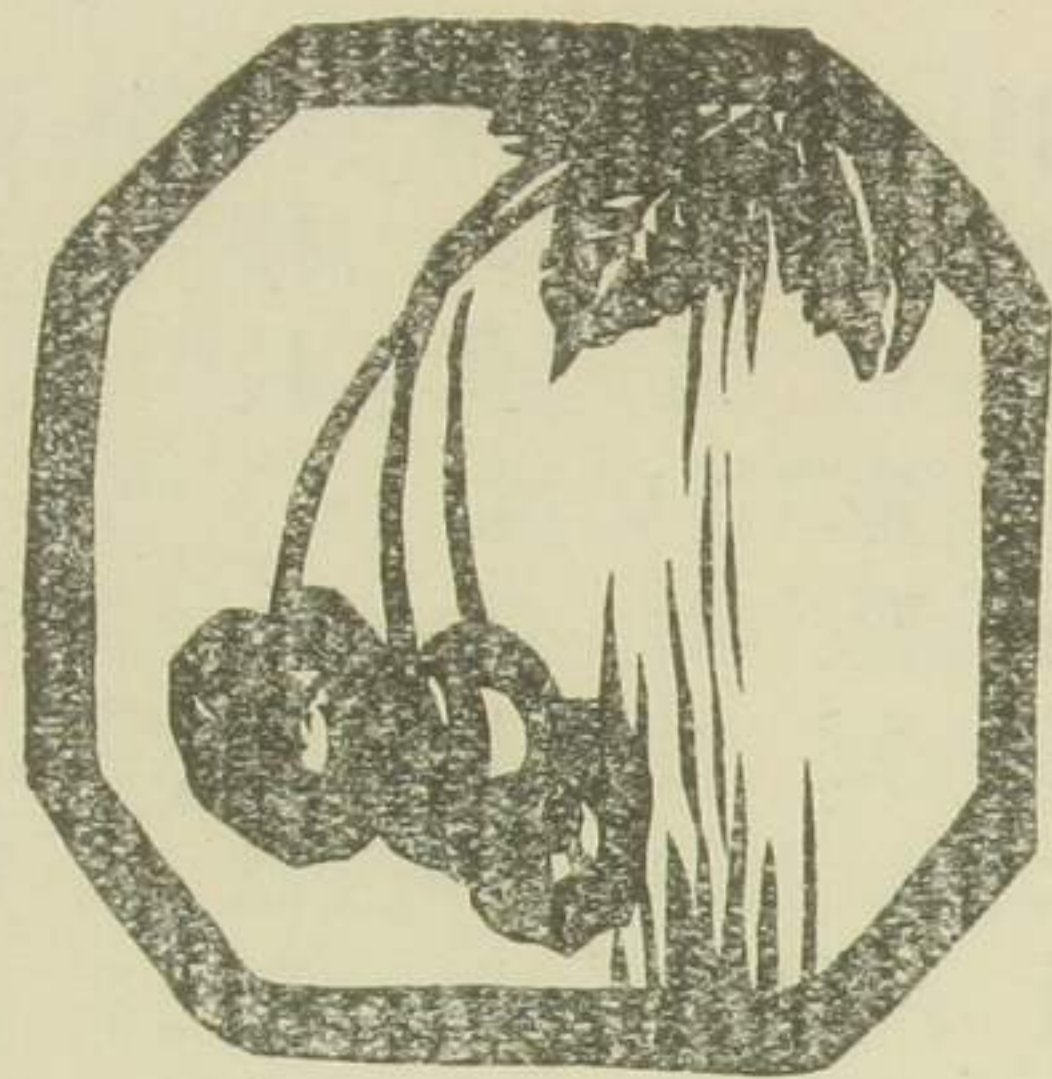
て居た。

アケビの花の紫色に咲いて居る谷を越して、復た私達は牛の群の見えるところへ出た。牧夫が近づいて鹽を興へると、黒い小牛が先づ耳を振りながらやつて来た。ついで、額の廣い、目付の愛らしい赤牛や、首の長い斑なぞがぞろぞろやつて来て、『御馳走』と言はないばかりに頭を振つたり尻尾を振つたりしながら、鹽の方へ近づいた。牧夫は私達に、牛もこゝへ来たばかりには、家を懐しがるが、二日も経てば慣れて、強い牛は強い牛と集り、弱い牛は弱い牛と組を立てるなど、話した。向ふの傾斜の

方には、臥たり起きたりして遊んで居る牛の群も見える

……

斯の牧場では月々五十錢づつで諸方の持主から牝牛を預つて居る。左様いふ牝牛が今五十頭ばかり居る。種牛は一頭置いてある。牧夫が勤めの主なるものは、牛の繁殖を監督することであつた。禮を言つて私達は斯の番人に別れた。



二 其

青麥の熟する時

學校の小使は面白い男で私に種々な話をして呉れる。斯の男は小使のかたはら、自分の家では小作を作つて居る。それは主に年老いた父と弟とがやつて居る。純小作人の家族だ。學校の日課が終つて、小使が教室々々の掃除をする頃には、頬の紅い彼の妻が子供を脊負つてやつて来て、夫の手傳ひをすることもある。學校の教師仲間の家でも、いくらか畠のあるところへは、斯の男が行つて野菜の手入をして遣る。校長の家では毎年可成な農

家ほどに野菜を作つた。燕麥なども作つた。休みの時間に成ると、私は斯の小使をつかまへては、耕作の話を聞いて見る。

私達の教員室は舊士族の屋敷跡に近くて、松林を隔て、深い谷底を流れる千曲川の音を聞くことが出来る。其部屋はある教室の階上にあたつて、一方に幹事室、一方に校長室と接して、二階の一隅を占めて居る。窓は四つある。その一方の窓からは、群立した松林、校長の家の草屋根などが見える。一方の窓からは、起伏した浅い谷、桑畠、竹藪などが見える。遠い山々の一部分も望まれる。

粗末ではあるが眺望の好い、その窓の一つに倚りながら、私は小使から六月の豆蔕の勞苦を聞いた。地を鋤くもの、豆を蔕くもの、肥料を施すもの、土をかけるもの、斯う四人でやるが、土は焼けて火のやうに成つて居る、素足で豆蔕は出来かねる、草鞋を穿いて漸くそれをやるといふ。小使は又、麥作の話をして呉れた。麥一ツカ——九十坪に、粉糠一斗の肥料を要するとか。それには大麥の殻と、刈草とを腐らして、粉糠を混せて、麥畠に撒くといふ。麥は矢張小作の年貢の中に入つて、夏の豆、蕎麥などが百姓の利得に成るとのことであつた。

南風が吹けば淺間山の雪が溶け、西風が吹けば畠の青麥が熟する。これは小使の私に話したことだ。左様言へば、なまぬるい微な西風が私達の顔を撫で、窓の外を通る時候に成つて來た。

少年の群

学校の歸路に、鐵道の踏切を越えた石垣の下で、私は少年の群に逢つた。色の黒い、二本棒の下つた、藁草履を穿いた子供等で、中には素足のまゝ、土を踏んで居るものもある。『野郎』『この野郎』と互に顔を引掻きなが

ら、相撲を取つて遊んで居た。

何處の子供も一種の俳優だ。私といふ見物がそこに立つて眺めると、彼等は一層調子づいた。是見よがしに危い石垣の上へ登るのもあれば、『怪我しるぞ』と下に居て呼ぶのもある。その中で、體軀の小な子供に何歳に成るかと聞いて見た

『おら、五歳。』とその子供が答へた。

水車小屋の向ふの方で、他の少年の群らしい聲がした。そこに遊んで居た子供の中には、それを聞きつけて、急に馳出すのもあつた。

『來ねえか、斯の野郎——ホラ、手を引かれる。』と流石に兄らしいのが、年少の子供の手を助けるやうに引いた。

『やい、米でも食へ。』

斯様なことを言つて、いきなり其處にある草を筆つて、朋輩の口の中へ捻込むのもあつた。

すると、片方も黙つては居ない。覺えて居れと言はな

いばかりに、『斯の野郎』と叫んだ。

『畜生！』一方は輕蔑した調子で。

『ナニ？ 斯の野郎』片方は石を拾つて投げつける。

『いやだ〜。』
と笑ひながら逃げて行く子供を、片方は棒を持って追馳
けた。乳呑兒を脊負つたまゝ、その後を追つて行くのも
あつた。

君、斯ういふ光景を私は學校の往還に毎日のやうに目
撃する。どうかすると、大人が子供をめぐらして、石を振上
げて、『野郎——殺して呉れるぞ、』など、戯れるのを見
ることもある。これが、君、大人と子供の間に極く無邪氣
に、笑ひながら交換される言葉である。

東京の下町の空氣の中に成長した君などに、斯の光景

を見せたら、何と言ふだらう。野蠻に相違ない。しかし、
君、その野蠻は、疲れた旅人の官能に活氣と刺戟とを與へ
るやうな性質のものだ。

麥

畠

青い野面には蒸すやうな光が満ちて居る。彼方此方
の畠側にある樹木も活々とした新葉を着けて居る。雲
雀の鳴聲に混つて、鋭いヨシキリの聲も聞える。
火山の麓にある大傾斜を耕して作つた是邊の田畠は
すべて石垣によつて支へらる。その石垣は今、雑草の

葉で飾られる時である。石垣と共に多いのは、柿の樹だ。黄勝な、透明な、柿の若葉のかけを通るのも心地が良い。小諸は斯の傾斜に添ふて、北國街道の兩側に細長く發達した町だ。本町、荒町は光岳寺を境にして左右に曲折した、主なる商家のあるところだが、その兩端に市町、興良町が續いて居る。私は本町の裏手から停車場と共に開けた相生町の道路を横ぎり、古い士族屋敷の残つた袋町を通りぬけて、田圃側の細道へ出た。そこまで行くと、荒町、興良町と續いた家々の屋根が町の全景の一部を望むやうに見られる。白壁、土壁は青葉に埋れて居た。

35

田圃側の草の上には、土だらけの足を投出して、あふのけさまに寝て居る働き勞れたらしい男があつた。青麥の穂は黄緑に熟しかけて居て、大根の花の白く咲き亂れたのも見える。私は石垣や草土手の間を通つて石塊の多い細道を歩いて行つた。そのうちに興良町に近い麥畠の中へ出て來た。

若い鷹は私の頭の上に舞つて居た。私はある草の生えた場所を選んで、土のにはひなどを嗅ぎながら、そこに寝そべつた。水蒸氣を含んだ風が吹いて來ると、麥の穂と穂が擦れ合つて、私語くやうな音をさせる。その間に

は、島に出で『サク』を切つて居る百姓の鍬の音もする：
 耳を澄ますと、谷底の方へ落ちて行く細い水の響も傳
 はつて来る。その響の中に、私は流れる砂を想像して見
 た。しばらく私はその音を聞いて居た。しかし、私は野
 鼠のやうに、獨りで左様長く草の中には居られない。乳
 色に曇りながら光る空などは、私の心を疲れさせた。自
 然は、私に取つては、どうしても長く熟視めて居られない
 やうなものだ：：：どうかすると逃げて歸りたく成るや
 うなものだ。

で、復た私は起き上つた。微温い風が、麥島を渡つて來

ると、私の髪の毛は額へ掩ひ冠さるやうに成つた。復た
 帽子を冠つて、歩き廻つた。

島の間には遊んで居る子供もあつた。手甲をはめ、淺
 黄の襟を掛け、腕をあらはにして、働いて居る女もあつた。
 草土手の上に寝かされた乳香兒が、急に眼を覺まして泣
 出すと、若い母は鍬を置いて、その兒の方へ馳けて來た。
 そして、島中で、大きな乳房の垂下つた懷をさぐらせた。
 私は無心な繪を見る心地がして、しばらくそこに立つて、
 斯の母子の方を眺めて居た。草土手の雜草を刈取つて
 それを脊負つて行く老婆もあつた。

與良町の裏手で、私は畠に出て働いて居るK君に逢つた。K君は脊の低い、快活な調子の人で、若い細君を迎へたばかりであつたが、行く／＼は新時代の小諸を形造る壯年の一人として、土地のものに望を囑されて居る。斯ういふ人が、畠を耕して居るといふことも面白く思ふ。胡麻鹽頭で、目が凹んで、鼻の隆い節々のあらはれたやうな大きな手を持つた隠居が、私達の前を挨拶して通つた。腰には角の根つけの付いた、大きな煙草入をぶらさげて居た。K君は其隠居を指して、此邊で第一の老農である、と私に言つて聞かせた。隠居は、何か思ひ付いたや

うに、私達の方を振り返つて、白い短い髯を見せた。

肥桶を擔いだ男も、畠の向を通つた。K君はその男の方をも私に指して見せて、あの桶の底には必と葱などの盗んだのが入つて居ると笑ひながら言つた。それから、私は髪の赤白髪な、眼の色も灰色を帯びた、酒好らしい赤ら顔の農夫にも逢つた。

古城の初夏

私の同僚に理學士が居る。物理、化學などを受持つて居る。

學校の日課が終つた頃、私は斯の年老いた學士の教室の側を通つた。戸口に立つて眺めると、學士も授業を済ましたところであつたが、まだ机の前に立つて何か生徒等に説明して居た。机の上には、大理石の屑、鹽酸の壘、コップ、玻璃管などが置いてあつた。蠟燭の火も燃えて居た。學士は手にしたコップをすこし傾げて見せた。炭素はその玻璃板の蓋の間から流れた。蠟燭の火は水を注ぎかけられたやうに消えた。

無邪氣な學生等は學士の机の周圍に集つて、口を開いたり、眼を圓くしたりして眺めて居た。微笑むもの、腕組

するもの、頬杖突くもの、種々雑多の様子をして居た。そのコップの中へ鳥か鼠を入れると直に死ぬと聞いて、生徒の一人がすつくと立上つた。

『先生、蟲ぢやいけませんか。』

『え、蟲は鳥などのやうに酸素を欲しがりませんからナ。』

問をかけた生徒は、つと教室を離れたかと思ふと、やがて彼の姿が窓の外の桃の樹の側にあらはれた。

『ア、蟲を取りに行つた。』

と窓の方を見る生徒もある。庭に出た青年は茂つた櫻

の枝の蔭を尋ね廻つて居たが、間もなく何か捕へて戻つて来た。それを學士にすゝめた。

『蜂ですか。』と學士は氣味悪さうに言つた。

『ア、怒つてる——螫すぞく。』

口々に言ひ騒いで居る生徒の前で、學士は身を反らし、螫されまいとする様子をした。その蜂をコップの中へ入れた時は、生徒等は意味もなく笑つた。『死んだ死んだ、』と言ふものもあれば、『弱い奴』といふものもある。蜂は眞理を證するかのやうに、コップの中でグルトグルト廻つて、身を悶へて死んだ。

『最早マイりましたかネ。』
と學士も笑つた。

其日は校長はじめ他の同僚も懷古園の方へ弓をひきに出掛けた。あの綠蔭には、同志の者が集つて十五間ばかりの矢場を造つてある。私も學士に誘はれて、學校から直に城址の方へ行くことにした。

はじめ私に逢つた時は、唯斯様な田舎へ來て隠れて居る年をとつた學者と思つた。左様親しく成らうとは思はなかつた。私達は——三人の同僚を除いては、皆な旅の鳥で、その中でも學士は幾多の辛酸を嘗

め盡して來たやうな人である。服装などに極く關はない、授業に熱心な人で、どうかすると白墨で汚れた古洋服を碌に拂はずに着て居るといふ風だから、最初のうちは町の人からも疎んせられた。服装と月給とで人間の價値を定めたがるのは、普通一般の人の帳場だ。しかし生徒の父兄達も、次第に學士の親切な正直な尊い性質を認めないわけに行かなかつた。是程何もかも外部へ露出した人を、私もあまり見たことが無い。何時の間にか私は斯の老學士と仲好に成つて自分の身内からでも聞くやうに、その制へきれないやうな嘆息や、内に憤る聲まで

も聞くやうに成つた。

私達は揃つて出掛けた。學士の口からは、時々軽い佛蘭西語などが流れて來る。それを聞く度に、私は學士の華やかな過去を思ひやつた。學士は又、そんな關はない風采の中にも、何處か往時の瀟洒なところを失はないやうな人である。その胸にはネキタイが面白く結ばれて、どうかすると見慣れない襟留などが光ることがある。それを見ると、私は子供のやうに嘔飯したくなる。

白い黄ばんだ柿の花は最早到る處に落ちて、香氣を放つて居た。學士は弓の袋や、クスネの類を入れた鞆を提

げて歩き乍ら、

「ねえ、實は斯ういふ話サ。私共の二番目の伴が、あれで子供仲間ちやナカ〜相撲が取れるんですトサ。此頃もネ、弓の弦を褒美に貰つて來ましたがネ、相撲の方の名が可笑しいんですよ。何だツて聞きましたらネ——沖の鯨。」

私は笑はずに居られなかつた。學士も笑を制へかねるといふ風で、

「兄のやつも名前が有るんですよ。貴様は何とつけたと聞きましたら、父さんが弓が御好きだから、よく當るや

うに矢當りとつけましたトサ。え、矢當りサ。子供といふものは可笑しなものですネ。」

斯ういふ阿爺さんらしい話を聞きながら古い城門の前あたりまで行くと馬に乗つた醫者が私達に挨拶して通つた。

學士は見送つて、

「あの先生も、鶏に、馬に、小鳥に、朝顔——何でもやる人ですナ。菊の頃には菊を作るし、よく何處の田舎にも一人位はあゝいふ御醫者で奇人が有るもんです。「なアに他の奴等は、ありや醫者ちやねえ、藥賣りだ、とても話せない」

なんて、エライ氣焰きえんサ。でも、面白い氣象きしやうの人で、在ざいへでも行くゆと、藥代くすりだいがなけりや、島はたけの物でも何なにでもいゝや、葱ねぎが出で來きたら提さげて來こい位ぐらゐに言いふものですか、百姓しやうなま仲間なかまには非常ひじやうに受うが好いい……』。

奇人きじんは斯この醫者いしやばかりでは無ない。舊士族きうしぞくで、閑散かんさんな日ひを送おくりかねて、千曲川ちまがはへ釣つりに行くゆ隠士いんし風ふうの人ひともあれば、姉あねと二人ふたりぎり城門じやうもんの傍かたはらに住すんで、懷古園くわいこえんの方ほうへ水みづを運はこんだり、役場やくばの手傳てづたひをしたりして居ゐる人ひともある。舊士族きうしぞくには奇人きじんが多いおほい。時世じせいが、彼等かれらを奇人きじんにして了しまつた。

もし君きみが斯このあたりあたりの士族しぞく屋敷しよの跡あとを通とほつて、荒廢くわうはいし

た土塀どべい礎いしばかり残のこつた桑島くはじまなどを見み離散りさんした多おほくの家か族ぞくの可傷いたましい歴史れきしを聞きき、振返ふりかへつて本町ほんまち、荒町あらかまちの方ほうに町人ちやうじんの繁昌はんじやうを望のぞむなら、『時とき』の歩あいた恐おそるべき足跡あしあとを思おもはずに居をられなからう。しかし他たの土地とちへ行いつて、頭角とうかくを顯あらすやうな新あたらしい人物じんぶつは、大抵たいてい教育けいよくのある士族しぞくの子孫しそんだともいふ。

今いま弓ゆみを提さげて破壊はくわいされた城址じやうしの坂道さかみちを上あつて行くゆ學士がくしも、ある藩はんの士族しぞくだ。校長かうちやうは、江戸えどの御家人ごけにんとかだ。休きう職しよくの憲兵けんべい大尉たいゐで、學校がくかうの幹事かんじと、漢學かんがくの教師けうしとを兼かねて居をる先生せんせいは、小諸藩こもろはんの人ひとだ。學士がくしなどは十九歳さいで戦争せんさうに出で

たこともあるとか。

私は斯の古城址に遊んで、君などの思ひもよらないやうな風景を望んだ。それは茂つた青葉のかけから、遠く白い山々を望む美しさだ。日本アルプスの谿々の雪は、こゝから白壁を望むやうに見える。

懐古園内の藤、木蘭、躑躅、牡丹などは一時花と花とが映り合つて盛んな香氣を發したが、今では最早濃い新緑の香に變つて了つた。千曲川は天主臺の上まで登らなければ見られない。谷の深さは、それだけでも想像されやう。海のやうな淺間一帯の大傾斜は、その黒ずんだ松の

樹の下へ行つて、一線に六月の空に横はる光景が見られる。既に君に話した烏帽子山麓の牧場、B君の住む根津村などは見えないまでも、そこから松林の向に指すことが出来る。私達の矢場を掩ふ樺、楓の緑も、その高い石垣の上から目の下に瞰下すことが出来る。

境内には見晴しの好い茶屋がある。そこに預けて置いた弓の道具を取出して、私は學士と一緒に苔蒸した石段を下りた。静かな矢場には、學校の仲間以外の顔も見えな

『そもく大弓を始めてから明日で一年に成ります。』

『一年の御稽古でも、しばらく休んで居ると、まるで當らない。なんだか申談のやうですナ。』

『こりや驚いた。尺二ですせ。しつかり御頼申しませ。』

『ボツン。』

『左様はいかない——』

斯様な話が、強弓をひく漢學の先生や、體操の教師などの間に起る。理學士は一番弱い弓をひいたが、熱心でよく當つた。

古城址といへば、全く人の住まないところのやうに君

には想像されたらう。私は残つた城門の傍にある門番と、園内の茶屋とを君に紹介した。まだその外に、鶏を養ふ人なども住んで居る。斯の人は病身で、無聊に苦むところから、私達の矢場の方へ遊びに来る。そして、私達の弓が揃つて引絞られたり、矢の羽が頬を摺つたりする後方に居て、奇警な批評を浴せかける。戯れに、『どうです。先生、もう弓も飽いたから——貴様、この矢場で、鳥でも飼へ。なんと来た日にやあ、それこそ此方のものだ……しかし斯の弓は、永代續きさうだテ。』斯様なことを言つて、混返すので、折角入れた力が抜けて、弓もひけないものが有

つた。
 小諸へ来て隠れた學士に取つて、斯の綠蔭は更に奥の方の隠れ家のやうに見えた。愛藏する鷹の羽の矢が揃つて白い的の方へ走る間、學士はすべてを忘れるやうに見えた。

急に、熱い雨が落ちて來た。雷の音も聞えた。淺間は麓まで隠れて、灰色に煙るやうに見えた。いくつかの雲の群は風に送られて、私達の頭の上を山の方へと動いた。雨は通過したかと思ふと復急に落ちて來た。「いよ／＼本物カナ。」と言つて、學士は新しく自分で張つた七寸的

を取除しに行つた。

城址の桑島には、雨に濡れながら働いて居る人々もあつた。皆なで雲行を眺めて居ると、初夏らしい日の光が遽かに青葉を通して射して來た。弓仲間は勇んで一手づゝ射はじめた。やがて復たザアと降つて來た。到頭一同は斷念して、茶屋の方へ引揚げた。
 私が學士と一緒に高い荒廢した石垣の下を歸つて行く途中、東の空に深い色の虹を見た。實に、學士はユツクリ／＼歩いた。



其三

山莊

浅間の方から落ちて来る細流は竹藪のところまで二つに別れて、一つは水車小屋のある窪い浅い谷の方へ私の家の裏を横ぎり、一つは馬場裏の町について流れて居る。その流に添ふ家々は私の家の組合だ。私は馬場裏へ移ると直ぐその組合に入れられた。一體此の小諸の町には平地といふものが無い。すこし雨でも降ると、細い川まで砂を押し流すくらゐの地勢だ。私は本町へ買物に出るにも組合の家の横手からすこし勾配のある道を上ら

ねばならぬ。

組合頭は勤勉な仕立屋の亭主だ。此の人が日頃出入する本町のある商家から、商賣も閑な頃で店の人達は東澤の別荘へ休みに行つて居る、私を誘つて仕立屋にも遊びに来ないか、とある日番頭が誘ひに来たとのことであつた。

私は君に古城の附近をすこし紹介した。町家の方の話はまだ爲なかつた。仕立屋に誘はれて商家の山莊を見に行つた時のことを話さう。

君は地方にある小さい都會へ旅したことが有るだら

う。そこで行き逢ふ人々の多くは——近在から買物に
 来た男女だとか、旅人だとかで——案外町の人の少いの
 に気が着いたことが有るだらう。田舎の神経質は斯様
 なところにも表れて居る。小諸が左様だ。裏町や、小路
 や、田圃側の細い道などを擇んで、勝手を知つた人々は多
 く往つたり來たりする。

私は仕立屋と一緒に町家の軒を並べた本町の通を一
 瞥して、丁度左様いふ田圃側の道へ出た。裏側から小諸
 の町の一部を見ると、白壁づくりの建物が土壁のものに
 混つて、堅く石垣の上に築かれて居る。中には高い三層

の窓が城郭のやうに曇日に映じて居る。その建物の感
 じは、表側から見ただ暗い質素な暖簾と對照を成して土地
 の氣實や殷富を表して居る。

麥秋だ。一年に二度づゝ黄色くなる野面が、私達の兩
 側にあつた。既に刈取られた麥畠も多かつた。半道ば
 かり歩いて行く途中で、鹽にした魚肉の薦包を提げた百
 姓とも一緒に成つた。

仕立屋は百姓を顧みて。

『もうすつかり植付が濟みましたかネ。』

『はい、漸く二三日前に。これでも昔は十日前に植付け

たものでござわすが、近頃はすつと遅く成りました。日蔭に成る田にはあまり實入も無かつたものだが、此節では一ぱいに取れますよ。」

「暖くなつた故かな。」

「はい、それもありますが、昔と違つて田の数がすつと殖えたものだから、田の水もウルミが多くなつてねえ。」

百姓は眺めく答へた。

東澤の山莊には商家の人達が集つて居た。店の方には内儀さん達と、二三の小僧とを殘して置いて、皆なこゝへ遊びに来て居るといふ。東京の下町に人となつた君

は——日本橋傳馬町の針問屋とか、浅草猿屋町の隠宅とかは、君にも私にも可懐しい名だ——恐らく私が今奈何いふ人達と一緒に成つたか、君の想像に上るであらうと思ふ。

山莊は二階建てで、池を前にして、静かな澤の入口にあつた。左に浅い谷を圍んだ松林の方は曇つて空もよく見えなかつた。快晴の日は、富士の山巔も望まれるといふ。池の邊に咲亂れた花あやめは楽しい感じを與へた。仕立屋は庭の高麗檜葉を指して見せて、特に東京から取寄せたものであると言つたが、あまり私の心を惹かなかつ

た。

私達は眺望のある二階の部屋へ案内された。田舎編の手織物を着て紺の前垂を掛けた、髪も質素に短く刈つたのが、主人であつた。此人は一切の主権を握る相續者ではないとのことであつたが、しかし堅氣な大店の主人らしく見えた。でつぶり肥つた番頭も傍へ來た。池の鯉の鹽焼で、主人は私達に酒を勧めた。階下には五六人の小僧が居て、料理方もあれば、通ひをするものもあつた。一寸したことに、質素で嚴格な大店の家風は表れて居た。番頭は、私達の前にある冷豆腐の皿にのみ花鯉節

が入つて、主人と自分のにはそれが無いのを見て、『こりや醬油ばかりしちやいけねえ。オイ、鯉節をすこしかいて來てお呉れ。』

と樓梯のところから階下を覗いて、小僧に吩咐けた。間もなく小僧はウンと大きく削つた花鯉節を二皿持つて上つて來た。

やがて番頭は階下から將棋の盤を運んだ。それを仕立屋の前に置いた。二枚落しでいかうと番頭が言つた。仕立屋は二十年以來ばつたり止めて居るが、萬更でも無いからそれぢや一つやるかなど、笑つた。主人も好き

な道と見えて、覗き込んで、仕立屋はなか／＼質が好いやうだとか、そこに好い手があるとか、しきりと加勢をしたが、そのうちに客の敗と成つた。番頭は盃を啣んで、『さあ誰でも来い』といふ顔付をした。『お貸しなさい敵打だ』と主人は飛んで出て、番頭を相手に差し始める。どうやら主人の手も悪く成りかけた。番頭はびっしやり自分の頭を叩いて、『恐れ入つたかな』と舌打した。到頭主人の敗と成つた。復た二番目が始まつた。階下では、大きな巾着を腰に着けた男の兒が、黒い洋犬と戯れて居たが、急に家の方へ歸ると駄々をコネ始めた。

小僧がもてあまして居るので、仕立屋も見兼ねて、子供の機嫌を取りに階下へ降りた。其時私も庭を歩いて見た。小手毬の花の遅いのも咲いて居た。藤棚の下へ行くと、池の中の鯉の躍るのも見えた。『斯う水があると、なかなか鯉は捕まらんものさネ』と言つて居る者も有つた。池を一廻りした頃、番頭は赤い顔をして二階から降りて来た。

『先生、勝負は奈何でしたネ。』と仕立屋が尋ねた。

『二番とも、これサ。』

番頭は鼻の先へ握り拳を重ねて、大天狗をして見せた。

そして、高い、快活な聲で笑つた。

斯ういふ人達と一緒に、どちらかと言へば陰氣な山の中で私は時を送つた。ポツ／＼雨の落ちて来た頃、私達は斯の山莊を出た。番頭は半ば酔つた調子で、『お二人で一本だ、相合傘といふやつはナカ／＼意氣なものですから、』

と番傘を出して貸して呉れた。私は仕立屋と一緒にその相合傘で歸りかけた。

『もう一本お持ちなさい、』と言つて、復た小僧が追ひかけて来た。

毒消賣の女

『毒消は宜う御座んすかねえ。』

家々の門に立つて、鋭い越後訛で呼ぶ女の聲を聞くやうに成つた。

黒い旅人らしい姿、脊中にある大きな風呂敷、日をうけて光る笠、あだかも燕が同じやうな勢揃ひで、互に群を成して時季を違へず遠いところからやつて来るやうに、彼等もはる／＼此の山の上まで旅して来る。そして鳥の群が彼方、此方の軒に別れて飛ぶやうに、彼等も亦た二人

か三人づゝに成つて思ひくゝの門を訪れる。此節私は
學校へ行く途中で、毎日のやうにその毒消賣の群に逢ふ。
彼等は血氣壯んなところまで互によく似て居る。

銀馬鹿

『何處の土地にも馬鹿の一人や二人は必ずある』とわ
る人が言つた。

貧しい町を通つて、黒い鬚の生えた飴屋に逢つた。飴
屋は高い石垣の下で唐人笛を吹いて居た。その邊は停
車場に近い裏町だ。私が學校の往還によく通るところ

だ。岩石の多い桑畠の間へ出ると、坂道の上の方から荷
車を曳いて押流れさるやうに降りて來た人があつた。
荷車には屠つた豚の股が載せてあつた。後で私は彼の
人が銀馬鹿だと聞いた。銀馬鹿は黙つてよく働く方の
馬鹿だといふ。此の人は又自分の家屋敷を他に占領さ
れてそれを知らずに働いて居るともいふ。

祭の前夜

春蠶が濟む頃は、やがて土地では祇園祭の季節を迎へ
る。此の町で養蠶をしない家は、指折るほどしか無い。

寺院の僧侶すらそれを一年の主なる収入に數へる。私
の家では一度も飼つたことが無いが、それが不思議に聞
える位だ。斯ういふ土地だから、暗い蠶棚と、襲ふやうな
臭氣と蠶の睡眠と、桑の出來不出來と、ある時は殆んど徹
夜で働いて居る男や女のことを想つて見て貰はなけれ
ば、それから後に來る祇園祭の楽しさを君に傳へること
が出来ない。

秤を腰に差して麻袋を負つたやうな人達は、諏訪、松本
あたりから此の町へ入込んで來る。旅舎は一時繭買の
群で満たされる。左様いふ手合が思ひくくの旅舎を指

して繭の收穫を運んで行く光景も、何となく町々に活氣
を添へるのである。

二十日ばかりもシメトと降り續いた天氣が、七月の
十二日に成つて漸く晴れた。霜雨の後の日光は殊にき
らめいた。長いこと煙霧に隠れて見えなかつた遠い山
々まで、桔梗色に顯はれた。此の日は町の大人から子供
まで互に新しい晴衣を用意して待つて居た日だ。

私は町の團體の暗闘に就いて多少聞いたこともある
が、そんなことをこゝで君に話さうとは思はない。たゞ、
祭以前に紛擾を重ねたと言ふだけにして置かう。一時

は祭をさせるとか、させないとかの騒ぎが傳へられて、毎年月の始めにアーチ風に作られる飾りが漸く七日目に町々の空へ掛つた。その餘波として、御輿を擔ぎ込まれるが煩さに移轉したと言はれる家すらあつた。左様いふ騒ぎの持上るといふだけでも、奈何に此の祭の町の人から待受けられて居るかい分る。多くの商人は殊に祭の賑ひを期待する。養蠶から得た報酬がすくなくも此の時には費されるのであるから。

夜に入つて、『湯立』といふ儀式があつた。此の晩は主の町の人々が提灯つけて社の方へ集る。それを見よ

うとして私も家を出た。空には星も輝いた。社頭で餠菓子を買つて居る人に逢つた。謠曲で一家を成した人物だとのことだが、最早長いこと此の田舎に隠れて居る。本町の通には紅白の提灯が往來の人の顔に映つた。その影で私は鳩屋のI紙店のKなどの手を引き合つて來るのに逢つた。いづれも近所の快活な娘達だ。

十三日の祇園

十三日には學校でも授業を休んだ。此の授業を止む休まないでは毎時論があつて、校長は大抵の場合には休

む方針を執り、幹事先生は成るべく休まない方を主張した。が、祇園の休業は毎年の例であつた。

近在の娘達は早くから来て町々の角に群がつた。戸板や樽を持出し、毛布をひろげ、その上に飲食する物を賣り、にはかざしらへの腰掛は張板で間に合はせるやうな、土地の小商人はそこにも、こゝにもあつた。日頃顔を見知つた八百屋夫婦も、本町から市町の方へ曲らうとする角のあたりに陣取つて青い顔の亭主と肥つた内儀とが互に片肌拔で、稻荷鮓を漬けたり、海苔巻を作つたりした。貧しい家の兒が新調の單衣を着て何か物を配り顔に町

を歩いて居るのも祭の日らしい。

午後、家のものはB姉妹の許へ招かれて御輿の通るのを見に行つた。Bは清少納言の『枕の草紙』などを讀みに來る人で、子供もよくその家へ遊びに行く。

光岳寺の境内にある鐘樓からは、絶えず鐘の音が町々の空へ響いて來た。此の日は、誰でも鐘樓に上つて自由に撞くことを許してあつた。三時頃から私も例の組合の家について夏の日のあつた道を上つた。そこを上りきつたところまで行くと軒毎に青簾を掛けた本町の角へ出る。斯の簾は七月の祭に殊に適はしい。

祭を見に來た人達は鄙びた繪巻物を繰展げる様に私の前を通つた。近在の男女は風俗もまぢくで紫色の唐縮緬の帯を幅廣にぐるぐると巻付けた男、大きな鬘にさした髪飾りも重さうに見える女の連れ、男の洋傘をさした娘もあれば、綿フランネルの前垂をして尻端を折つた兒もある。黒い、太い足に白足袋を穿て、裾の短い着物を着た小娘もある。一里や二里の道は何とも思はずにやつて來る人達だ。その中を、輕井澤邊りの客と見え、珍らしさらに眺めて行く西洋の婦人もあつた。町の子供はいづれも嬉しうに群集の間を飛んで歩いた。

やがて町の下の方から木の臼を轉がして來た。見物はいづれも兩側の軒下などへ逃げ込んだ。

『ヨイヨ、ヨイヨ、』

と掛聲して、重い御輿が擔がれて來た。狭い往來の真中で、時々御輿は臼の上に置かれる。血氣な連中はその周圍に取付いて、ぐるぐると廻したり、手を揚げて叫んだりする。壯んな歡呼の中に、復た御輿は擔がれて行つた。一種の調律は見物の身に流れ傳はつた。私は戻りがげに子供まで同じ足拍子で歩いて居るのを見た。此の日は町に紛擾のあつた後で、何となく人の心が穩

かでなかつた。六時頃に復た本町の角へ出て見た。「ヨ
 イヨく」といふ掛聲までシヤガレて『ギヨイギヨ、ギ
 ヨイギヨ』と物凄く聞る。人々は酒氣を帯て、今御輿が
 町の上の方へ擔がれて行つたかと思ふと急に復た下つ
 て來る。五六十人の彌次馬は狂することく叫び廻る。
 多勢の巡查や祭事掛は駈足で一緒に附いて歩いた。丁
 度夕飯時で見物は彼方是方へ散じたが、御輿の勢は反
 つて烈しく成つた。それが大きな商家の前などを擔が
 れて通る時は、見る人の手に汗を握らせた。

急に御輿は一種の運動と化した。ある家の前で、衝突

の先棒を振るものがある、兩手を揚げて制するものがあ
 る、多数の勢に驅られて見る間に御輿は傾いて行つた。
 其時家の方から飛んで出て、御輿に飛付き押し廻さうと
 するものもあつた。騒ぎに踏み敷かれて、あるものゝ顔
 から血が流れた。「御輿を下せく」と巡查が馳せ集つ
 て、烈しい論判の末、到頭輿丁の外は許さないといふこと
 に成つた。御輿の周圍は白帽白服の人で護られて、『さ
 あ、よし、持ち上げる』などといふ聲と共に、急に復た仲町
 の方角を指して擔がれて行つた。見物の中には突き飛
 ばされて、あふのけさまに倒れた大の男もあつた。

『それ早く逃げろ、子供く。』
皆な口々に罵つた。

『巡查も随分御苦勞なことですな。』

『ほんとに好い迷惑サ。』

見物は言ひ合つて居た。

暮れてから町々の提灯は美しく點つた。簾を捲上げ、
店先に毛氈などを敷き、屏風を立て廻して、人々は端近く
坐りながら涼んで居た。

御輿は市町から新町の方へ移つた。ある坂道のところ
で、雨のやうに降つた賽錢を手探りに拾ふ女の兒など

が有つた。後には、提灯を手にして往來を探すやうな青
砥の子孫も顯れるし、五十ばかりの女が闇から出て、石を
さぐつたり、土を掘んだりして見るのも有つた。さかし
い慾の世といふことを思はせた。

市町の橋は、学校の植物の教師の家に近い。私の懇意
なT君といふ醫者の家にも近い。その欄干の兩側には
黒い影が並んで、涼しい風を樂んで居るものや、人の顔を
覗くものや、胴魔聲に歌ふものや、手を引かれて斷り言ふ
女連などが有つた。

夜の九時過に、馬場裏の提灯はまだ宵の口のやうに光

つた。組合の人達は仕立屋や質屋の前あたりに集つて涼みがてら祭の噂をした。此の夜は星の姿を見ることが出来なかつた。螢は暗い流の方から迷つて来て、町中を飛んで、青い美しい光を放つた。

後の祭

翌日は朝から涼しい雨が降つた。家の周囲にある柿、李などの緑葉からは雫が滴つた。李の葉の濡れたのは殊に涼しい。

本町の通では前の日の混雑した光景と打つて變つて

家毎に祭の提灯を深く吊してある。紺暖簾の下にさげた簾も静かだ。その奥で煙草盆の灰吹を叩く音が響いて聞える位だ。往來には、娘子供が傘をさして遊び歩きのみだ。前の日に用ゐた木の白も町の片隅に轉してある。それが七月の雨に濡れて居る。

此の十四日には家々で強飯を蒸し、煮染などを祝つて遊び暮す日であるといふ。午後の四時頃に成つても、まだ空は晴れなかつた。烏帽子を冠り、古風な太刀を帯びて、芝居の『暫』にでも出て來さうな男が、神官祭事掛、子供など、一緒に、いづれも淺黄の直垂を着けて、小雨の降

る町中まちなかのしめかざり飾かざりを切きりに歩あるいた。



其 四

中棚

私達の教員室の窓から浅い谷が見える。そこは耕されて、桑などが植付けてある。

斯ういふ谷が松林の多い崖を挟んで、古城の附近に幾つとなく有る。それが千曲川の方へ落ちるに随つて餘程深いものと成つて居る。私達は城門の横手にある草地を掘返して、テニスのグラウンドを造つて居るが、その邊も矢張谷の起點の一つだ。M君が小諸に居た頃は、斯の谷間で水彩畫を作つたこともあつた。學校の體操教師

の話によると、ずっと昔恐るべき山崩れのあつた時、浅間の方から押寄せて來た水が斯ういふ變化のある地勢を造つたとか。

八月のはじめ私は斯の谷の一つを横ぎつて、中棚の方へ出掛けた。私の足はよく其方へ向いた。そこには鑛泉があるばかりでなく、家から歩いて行くには丁度頃合の距離にあつたから。

中棚の附近には豊かな耕地も多い。ある崖の上まで行くと、傾斜の中腹に小ぢんまりとした校長の別荘がある。その下に温泉場の旗が見える。林檎島が見える。

千曲川はその向を流れて居る。

午後の一時過ぎに私は田圃側の道を通つて千曲川の岸へ出た。蘆蓬それから短い楊などの多い石の間で、長野から来て居る師範校の學生と一緒に成た。A、A、Wなどいふ連中だ。斯の人達は夏休を應用して、本を讀みに私の家へ通つて居る。岸には、熱い砂を踏んで水泳にやつて来た少年も多かつた。その中には私達の學校の生徒も混つて居た。

暑くなつてから私はよく自分の生徒を連れて、ここへ泳ぎに来るが、隅田川などで泳いだことを思ふと水瀬か

らして違ふ。青く澄んだ川の水は油のやうに流れて居ても、その瀬の激しいこと、言つたら、眩暈がする位だ。川上の方を見ると、暗い岩蔭から白波を揚げて流れて来る。川下の方は又、矢のやうに早い。それが五里淵の赤い崖に突き當つて、非常な勢で落ちて行く。どうして、斯の水瀬が是處の岩から向ふの崖下まで真直に突切れるものではない。それに澄んだ水の中には、大きな岩の隠れたのがある。下手をマゴつけば押流されて了ふ。だから餘程上の方からでも泳いで行かなければ、目的とする岩に取付いて上ることが出来ない。

平野を流れる利根などい違ひ、この川の中心は岸のど
 ちらかに激しく傾いて居る。私達は、この河底の露れた
 方に居て、溝萩の花などの咲いた岩の蔭で、二時間ばかり
 を過した。熱い砂の上には這ひのめつて、甲羅を乾して
 居るものもあつた。ザンブと水の中へ飛込むものもあ
 つた。このあたりへは小娘まで遊び来て、腕まくりをし
 たり、尻を端折つたりして、足を水に浸しながら餘念なく
 遊び廻つて居た。

三つの麥藁帽子が石の間にあらはれた。師範校の連
 中だ。

『ちつたア釣れましたかネ。』と私が聞いた。

『え、すつかり釣られて了ひました。』

『どうだネ、君の方は。』

『五尾ばかり掛るには掛りましたが、皆な欺されて了ひ
 ました。』

『む、む、二時間もあるのだから、ゆつくり言譯は考へられ
 るサ……』

斯様なことを言つて、仲間の話を混返すものもあつた。
 此の連中と一緒に、私は中棚の温泉の方へ戻つて行つ
 た。沸し湯ではあるが、鑛泉に身を浸して、浴槽の中から

外部の景色を眺めるのも心地が好かつた。湯から上つても、皆の楽しみは茶でも飲みながら、書生らしい雑談に耽ることであつた。林檎島、葡萄棚などを渡つて来る涼しい風は、私達の興を助けた。

「年をとれば、甘い物なんか食ひたくなりませうか。」と一人が言出したのが始まりで、食欲の話がそれからそれと引出された。

「十八史略を賣つて菓子屋の拂ひをしたことも有るか
らナア。」

「菓子もいゝが、随分かゝるネ。」

「僕は二年ばかり辛抱した……」

「それはエライ。二年の辛抱は出来ない。僕などは一週間に三度と定めて居る。」

「ところが、君、三年目となると、奈何しても辛抱が出来なくなつたサ。」

「此頃、ある先生が——諸君は菓子屋へよく行さうだ。私は是迄左様いふ處へ一切足を入れなかつたが、一つ諸君連れてつて呉れ給へ、斯う言ふぢやないか。」

「フウン。」

「一體諸君はよく菓子を好かれるが、一回に凡そ何の位

食^たべるんですか、と先生^{せんせい}が言^いふから、左^さ様^{よう}です、まあ十^{せん}銭^{せん}か
ら二十^{にじゅう}銭^{せん}位^{ぐらゐ}食^くひますつて言^いふと、それはエラ^いい、そんな^なに
食^くつてよく胃^いを害^{がい}さないもの^{もの}だと言^いはれる。え、學^{がく}校^{がう}
へ歸^{かへ}つて來^きて、夕^{ゆふ}飯^{はん}を食^くはずに居^ゐるものも有^あります、とや
つたさ。』

『さうだがねえ、いろ／＼なのが有^あるせ、菓子^{かし}に胃^い散^{さん}をつ
けて食^くふ男^{をとこ}があるよ。』

三人^{さんにん}は何^{なに}を言^いつても氣^きが晴^はれるといふ風^{ふう}だ。中^{なか}には、
手^てを叩^{たた}いて、踊^{おど}り上^{あが}つて笑^{わら}ふものもあつた。それを聞^き
くと、私^{わたし}も噴^{ふき}飯^ださずには居^ゐられなかつた。

97

やがて、三人^{さんにん}は口^{くち}笛^{ふえ}を吹^ふき／＼一^{しよ}緒^{じゆ}に泊^{とま}つて居^ゐる旅^{りよ}舎^や
の方^{ほう}へ別^{わか}れて行^いつた。

此^この温^{おん}泉^{せん}から石^{いし}垣^{がき}についで坂^{さか}道^{みち}を上^{のぼ}ると、そこに校^{がう}長^{ちやう}
の別^{べつ}荘^{しやう}の門^{もん}がある。樓^{ろう}の名^なを水^{すい}明^{めい}樓^{ろう}としてある。此^この
建^た物^{ぶつ}はもと先生^{せんせい}の書^{しょ}齋^{さい}で、士^し族^{ぞく}屋^や敷^{しき}の方^{ほう}にあつたのを、こ
ゝへ移^{うつ}して住^すまはれるやうにしたものだ。閑^{かん}雅^がな小^{せう}樓^{ろう}
で、崖^{がけ}に倚^よつて眺^{てう}望^{ぼう}の好^いい位^ゐ置^ちに在^ある。

先生^{せんせい}は共^き立^{りつ}學^{がく}校^{がう}時^じ代^{だい}の私^{わたし}の英^{えい}語^ごの先^{せん}生^{せい}だ。あの頃^{ころ}は
先^{せん}生^{せい}も男^{をとこ}のさかりで、ア、ギングの『リッヅ、ヴァン、キン
クル』などを教^{おし}へて呉^くれたものだつた。その先^{せん}生^{せい}が今^{いま}

では斯ういふところに隠れて、花を植ゑて樂んだり鑛泉に老を養つたりするやうな、白髯の翁だ。どうかすると先生の口から先生自身がリップ、ヴァン、キントルであるかのやうな戯談を聞くこともある。でも先生の雄心は年と共に銷磨し盡すやうなものでもない。客が訪ねて行くとき、談論風發する。

水明樓へ來る度に、私は先生の好く整理した書齋を見るのを樂みにする。そればかりではない、千曲川の眺望はその樓上の欄に倚りながら恣に賞することが出来る。對岸に煙の見えるのは大久保村だ。その下に見える釣

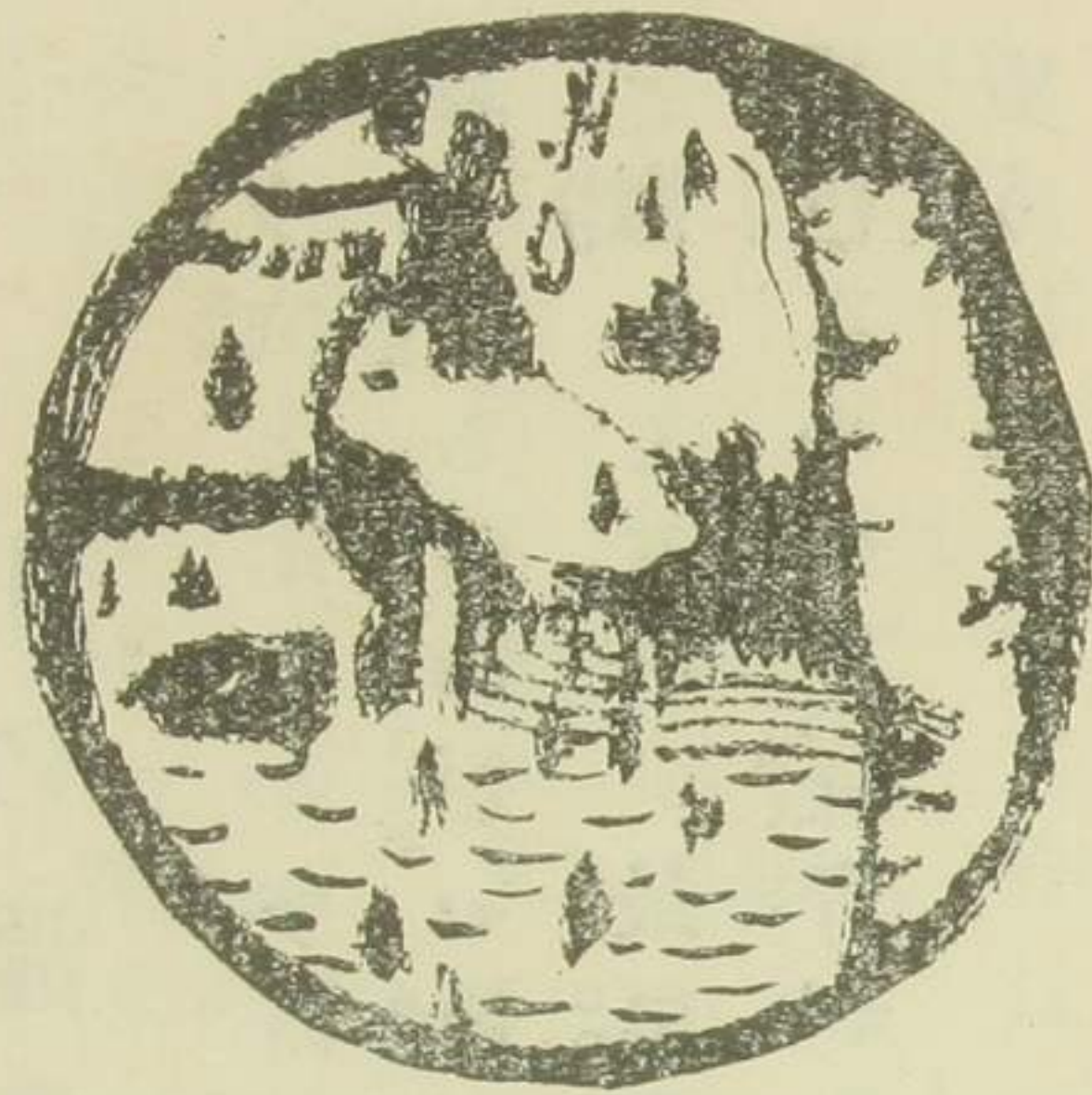
橋が戻り橋だ。川向から聞える朝々の鶏の鳴聲、每晚農村に點く灯の色、種々思ひやられる。

櫓の樹蔭

櫓の樹蔭。

そこは鹿島神社の境内だ。學校が休みに成つてからも、私はよくその樹蔭を通る。

ある日、鐵道の踏切を越えて、また綠草の間の小徑へ出た。櫓の古木には、角の短い目の愛らしい小牛が繫いであつた。しばらく私が立つて眺めて居ると、小牛は繫が



其 五

れたまゝでぐるぐると廻るうちに、地を引くほどの長い
 綱を彼方此方の櫓の幹へすつかり巻き付けて終つた。
 そして、身動きすることも出来ないやうに成つた。
 向の草の中には、赤い馬と白い馬とが繋いであつた。

山の温泉

夕立ともつかず、時雨ともつかないやうな夏から秋に移り變る時の短い雨が來た。草木にそゞ音は夕立ほど激しくない。最早初茸を箱に入れて、木の葉のついた樺色なやつや、緑青が、つたやつなどを近在の老婆達が賣りに來る。

一月ばかり前に、私は田澤湯泉といふ方へ出掛けて行つて來た。あの話を君にするのを忘れた。

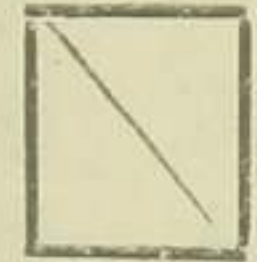
温泉地にも種々あるが、山の温泉は別種の趣がある。

上田町に近い別所温泉などは開けた方で、随つて種々の便利も具はつて居る。しかし山國らしい温泉の感じは、反つて不便な田澤、靈泉寺などに多く味はれる。あの邊にも相應な温泉宿は無くないが、なにしろ土地の者が味噌や米を携へて、勞苦を忘れに行くといふ場所だ。自炊する浴客が多い。宿では部屋だけでも貸す。それに部屋付の竈が具へてある、浴客は下駄穿のまゝ庭から直に樓梯を上つて、樓上の部屋へ通ふことも出来る。斯の土足で昇降の出来るやうに作られた建物を見ると、山深いところにある温泉宿の氣がする。鹿澤温泉(山の湯)

と来たなら、それこそ野趣やしゆに富とんで居るといふ話だ。
 半ば緑葉りよくえふに包つまれ、半ば赤あかい崖がけに成なつた山脈さんみやくに添そふて、
 千曲川ちまがはの激流げきりゆうを左ひだりに望のぞみながら、私わたしは汽車きしやで上田うへだまで乗の
 つた。上田橋うへだばし——赤あかく塗ぬつた鐵橋てつきう——あれを渡わたる時は、
 大河たいがらしい千曲川ちまがはの水みづを眼下めが下に眺ながめて行いつた。私わたしは上田うへだ
 附近ふきんの平地へいちにある幾多いくたの村落そんらくの間あひだを歩あるいて通とほつた。あ
 の邊へんはいかにも田舎道いなかみちらしい氣きのするところだ。途とちう中ちゆう
 に樹蔭こかげもある。腰掛こしかけて休やすむ粗末そまつな茶屋ちややもある。
 青木村あをきむらといふところで、いかに農夫等のうふうらが勞苦らうくするかを
 見みた。彼等かれらの背せ中に木この葉はを挿さして、それを僅わずかかの日除ひよけ

としながら、田たの草くさを取とつて働はたらいて居ゐた。私わたしなどは洋傘やうさん
 でもなければ歩あるかれない程ほどの熱あつい日ひざかりに。斯この農のう
 村そんを通とほり抜ぬけると、すこし白しろく濁にごつた川かはに隨ついて、谷深たふかく
 坂道さかみちを上のぼるやうに成なる。川かはの色いろを見みた、いけでも、湯場ゆばに
 近ちかづいたことを知しる。そのうちに、斯こ様な看板かんばんの掛かけて
 あるところへ出でた。

湯本



みやばら

升屋ますやといふは眺望てうぼうの好いい温泉宿おんせんやどだ。湯川ゆがはの流ながれる音おと
 が聞きえる樓上ろうじやうで私達わたしたちの學校がくかうの校長かうちやうの細君さいくんが十四五人じよごにんば

かりの女生徒を連れて来て居るのに逢つた。斯の娘達も私が餘暇に教へに行く方の生徒だ。

樓上から遠く淺間一帯の山々を望んだ。淺間の見えない日は心細いなど、校長の細君は話して居た。

十九夜の月の光が斯の谷間に射し入つた。人々が多く寢静まつた頃、まだ障子を明るくして、盛んに議論して居る浴客の聲も聞えた。

『身體は小さいけれど、そんな野蠻人ぢやねえ。』
理窟ッばい人達の言ひそらな言葉だ。

翌日は朝霧の籠つた谿谷に朝の光が満ちて、近い山も

遠く家々から立登る煙は霧よりも白く見えた。淺間は隠れた。山のかなたは青が、つた灰色に光つた。白い雲が山脈に添ふて起るのも望まれた。國さんといふ可憐の少年も姉嬢に附いて来て居て、温泉宿の二階で玩具の銀笛を吹いた。

そこは保福寺峠と地藏峠とに挟まれた谷間だ。二十日の月は其晩も遅くなつて上つた。水の流が枕に響いて眠られないので、一旦寝た私は起きて、斯ういふ場所の月夜の感じを味つた。高い欄に倚凭つて聞くと、さまざまの蟲の聲が水音と一緒に成つて、斯の谷間に満ちて居

た。その他暗い澤の底の方には種々な聲があつた。——
遅くなつて戸を閉める音、深夜の人の話聲、犬の啼聲、樂し
さうな農夫の唄。

四日目の朝まだ暗いうちに、私達は月明りで仕度して、
段々夜の明けて行く山道を別所の方へ越した。

學窓の一

夏休みも終つて、復た私は理學士やB君や、それから植
物の教師など、學校でよく顔を合わせるやうに成つた。
秋の授業を始める日に、まだ櫻の葉の深く重なり合つ

たのが見える教室の窓の側で、私は上級の生徒に釋迦の
話をした。

私は『釋迦譜』を選んだ。あの本の中には、王子の一
生が一篇の戯曲を讀やうに寫出してある。あの中から
私は釋迦の父王の話、王子の若い友達の話などを借りて
來て話した。青年の王子が憂愁に沈みながら、東西南北
の四つの城門から樹園の方へ出て見るといふ一節は、私
の生徒の心をも引いたらしい。一つの門を出たら、病人
に逢つた。人は病まなければ成らないかと、王子は深思
した。他の二つの門を出ると、老人に逢ひ、死者に逢つた。

人は老いなければ成らないか、人は死ななければ成らないか。斯の王子の逢着する人生の疑問がいかにも簡素に表してある。最後に出た門の外で道者に逢つた。そこで王子は心を決して、斯のLifeを解かんが爲に、あらゆるものを破り捨て、行つた。

戯曲的ではないか。少年の頭脳にも面白いやうに出て居るではないか。私は斯様な話を生徒にした後で多勢居る諸君の中には實業に志すものもあらうし、軍人に成らうといふものもあらう。しかし諸君の中にはせめて斯の青年の王子のやうに、あらゆるものを破り捨て

、坊さんのやうな生涯を送る程の意氣込もあつて欲しい、と言つて聞かせた。

私は生徒の方を見た。生徒は私の言つた意味を何と釋つたか、いづれも顔を見合せて笑つた。中には妙な顔をして、頭を擁えて居るものもあつた。

學窓の二

樹木が一年に三度づゝ新芽を吹くとは、今迄私は氣がつかなかつた。今は九月の若葉の時だ。学校の校舎の周圍には可成多くの樹木を植えてある。

大きな櫻の實の熟する頃などには、自分等の青年時代の
 ことまでも思ひ起させたが、斯うして夏休過に復た斯の
 庭へ来て見ると、何となく白ツばい林檎の葉や、紅味を含
 んだ櫻や、淡々しい青桐などが、校舎の白壁に映り合つて、
 楽しい影日向を作つて居る。楽しさうに吹く生徒の口
 笛が彼方此方に起る。テニスのコートや城門の方へ移
 してからは、櫻の葉蔭で角力を取るものも多い。
 學校の歸りに、夏から病んで居るBの家を訪ねた。そ
 の家の裏を通り抜けて石段を下りると、林檎の畠がある。
 そこにも初秋らしい日が映つて居た。

田舎牧師

朝顔の花を好んで毎年培養する理學士がある日學校
 の歸途に、新しい弟子の話を私にして聞かせた。
 弟子と言つても朝顔を培養する方の弟子だ。その人
 は町に住む牧師で、一部の子供から『日曜學校の叔父さ
 ん』と懐かしがられて居る。
 斯の叔父さんの説教最中に夕立が来た。まだ朝顔の
 弟子入をしたばかりの時だ。彼の心は毎日楽しんで居
 る畑の方へ行つた。大事な貝割葉の方へ行つた。雨に

打たれる朝顔鉢の方へ行つた。説教そこゝにして、彼は夕立の中を朝顔棚の方へ駈出した。

『いかにも田舎の牧師さんらしいぢや有りませんか。』と理學士は斯の新しい弟子の話をして笑つた。その先生はまた、火事見舞に来て、朝顔の話をして行くほど、自分でも好きな人だ。

九月の田圃道

傾斜に添ふて赤坂(小諸町の一部)の家つゞきの見えるところへ出た。

浅間の山麓にある斯の町々は眠から覺めた時だ。朝餐の煙は何となく濕つた空氣の中に登りつゝある。鶏の聲も遠近に聞える。

熟しかけた稻田の周圍には、豆も莢を垂れて居た。稲の中には既に下葉の黄色くなつたのも有つた。九月も半ば過ぎだ。稲穂は種々で、あるものは薄の穂の色に見え、あるものは全く草の色、あるものは紅毛の房を垂れたやうであるが、その中で濃い茶褐色のが糯を作つた田であることは、私にも見分けがつく。

朝日は谷々へ射して來た。

田圃道の草露は足を濡らして、かゆい。私はその間を歩き廻つて、蟋蟀の啼くのを聞いた。

此節、浅間は日によつて八回も煙を噴くことがある。「あゝ復た浅間が焼ける」と土地の人は言い合ふのが癖だ。男や女が仕事しかけた手を休めて、屋外へ出て見るとか、空を仰ぐとかする時は、きつと浅間の方に非常に大きな煙の團が望まれる。左様いふ時だけ火山の麓に住んで居るやうな心地を起させる。斯ういふところに住み慣れたものは、平素はそんなことも忘れ勝ちに暮して居る。

浅間は大きな爆發の爲に崩されたやうな山で、今いふ牙齒山が往時の噴火口の跡であつたらうとは、誰しも思ふことだ。何か山の形状に一定した面白味でもあるかと思つて来る旅人は、大概失望する。浅間ばかりでなく、蓼科山脈の方を眺めても、何の奇も無い山々ばかりだ。唯、面白いのは山の空氣だ。昨日出て見た山と、今日出て見た山とは、殆んど毎日のやうに變つて居る。

山中生活

理學士の住んで居る家のあたりは、荒町の裏手で、酢屋

のKといふ娘の家の大きな醤油藏の窓などが見える。その横について荒町の通へ出ると、畳表、鯉節、茶、雜貨などを商ふ店々の軒を並べたところに、可成大きな鍛冶屋がある。高い暗い屋根の下で、古風な髻に結つた老爺が鐵槌の音をさせて居る。

斯の昔氣質の老爺が學校の體操教師の父親さんだ。朝風の涼しい光の熱い日に、私は二人ばかり學生を連れて、その家の鍛冶場の側を裏口へ通り抜け、體操の教師と一緒に淺間の山腹を指して出掛けた。

山家と言つても、これから私達が行かうとして居ると

ころは眞實の山の中だ。深い山林の中に住む人達の居る方だ。

粟、小豆、飼馬の料にするとかいふ稗などの畠が、私達の歩るいて行く岡邊の道に連なつて居た。花の白い、莖の紅い蕎麥の畠なども到るところにあつた。秋のさかりだ。體操の教師は耕作のことに委しい人だから、諸方に光つて見える畠を私に指して見せて、あそこに大きな紫紅色の葉を垂れたのが『わたり粟』といふやつだとか、こつちの方に細い青黒い莢を垂れたのが『かられい小豆』といふ種類だとか、御蔭で私は種々なことを教えて

賞つた。斯の體操教師は稻田を眺めたばかりで、その種類を區別するほど明るかつた。

五六本松の岡に倚つて立つて居るのを望んだ。呷道祖神のあるのは其處だ。

寺窪といふところへ出た。農家が五六軒づつ、ところ／＼に散在するほどの極く邊鄙な山村だ。君に黒班山のことは未だ話さなかつたかと思ふが、矢張淺間の山ついきだ、ホラ、小諸の城跡にある天主臺——あの石垣の上の松の間から、黒班のやうに見える山林の多い高い傾斜、そこを私達は今歩いて行くところだ。あの天主臺から

黒班山の裾にあたつて、遠く點のやうな白壁を一つ望む。その白壁の見えるのも斯の山村だ。

鹽俵を負つて腰を曲め乍ら歩いて行く農夫があつた。體操の教師は呼び掛けて、

「もう漬物ですか。」と聞いた。

「今やりやすと二割方得ですよ。」

荒い氣候と戦ふ人達は今から野菜を貯えることを考へると見える。

前の／＼晩に降つた涼しい雨と、前の日の好い日光とです。こしは葦の獲物もあるだらう。斯ういふ體操教師

の後に随ついて私わたしは學生がくせいと共に松林まつばやしの方ほうへ入はいつた。斯この松林まつばやしは體操たいさう教師けうしの持山もちやまだ。松葉まつはの枯かれ落おちた中なかに僅わずかかに數本すほんの黄きしめぢと牛額うしびたひとしか得えられなかつた。それからそれから笹ささの葉はの間あひだなどを分わけて『部分木ぶぶんぎの林はやし』と稱とへる方ほうに進すすみ入いつた。

私達わたしたちは可成かなり深い松林まつばやしの中なかへ來きた。若い男女だんぢよの一家族かぞくと見みえるのが青松葉あまつばの枝えだを下おろしたり、それを束たばねたりして働はたらいて居ゐるのに逢あつた。女をんなの方ほうは二十前後はたちせんごの若い妻つまらしい人ひとだが垢染あかじみた手拭てぬぐひを冠かぶり襦袢じゆばん肌はだ抜き尻端折しりはしをりといふ風ふうで前垂まえだれを下さげて、藁草履わらざうりを穿はいて居ゐた。赤あかい荒あらく

れた髪かみ粗野そやな日に焼やけた顔かほは男をとことも女をんなともつかないやうな感かんじがした。どう見みても、ミレエの百姓しやうやくの中なかに出でて來きさうな人物じんぶつだ。

その弟おとうとらしいのが三四人さんにん、どれもこれも黒くろい垢あかのついた顔かほをして、髪かみはまるで蓬よもぎのやうに見みえた。でも健すこかな、無む心しんな聲こゑで、子供こどもらしい唄うたを歌うたつた。

母ははらしい人ひとも林はやしの奥おくから歩あるいて來きた。一同どうし仕事を休やすめて、私達わたしたちの方ほうをめづらしさうに眺ながめて居ゐた。

斯この人達ひとたちの働はたらくあたりから岡おかついきに上あつて行ゆくと斯かう平坦たひらな松林まつばやしの中なかへ出でた。刈草かりくさを負しょつた男をとこが林はやしの間あひだ

の細道を歸つて行つた。日は泄れて、濕つた草の上に映つて居た。深い林の中の空氣は、水中を行く魚かなんどのやうに其草刈男を見せた。

がらりと音をさせて、柴を積んだ車も通つた。その音は寂しい林の中に響き渡つた。

熊笹、柴などを分けて、私達は藁を探し歩いたが、其日は獲物は少なかつた。枯葉を鎌で掻除けて見ると稀にあるのは紅藁といふ食はれないのか、腐敗した初藁位のものだつた。終には探し疲れて、左様くは腰も言ふことを聞かなく成つた。軽い腰籠を提げたまゝ、南瓜の花の

咲いた畠のあるところへ出て行つた。山番の小屋が見えた。

山番

番小屋の立つて居る處は尾の石と言つて、黒班山の直ぐ裾にあたる。

三峯神社とした盜賊除の御札を貼付けた馬小屋や、萩などを刈つて乾してある母屋の前に立つて、日の映つた土壁の色などを見た時は、私は餘程人里から離れた氣がした。

鋭い眼付の赤犬が飛んで来た。しきりと私達を怪むやうに吠えた。斯の犬は番人に飼はれて、種々な役に立つと見えた。

番小屋の主人が出て来て私達を迎へて呉れた頃は、赤犬も頭を撫でさせるほどに成つた。主人は鬚も剃らずに林の監督をやつて居るやうな人であつた。細君は襟掛で、斯の山の中に出て来た南瓜などを切りながら働いて居た。

四人の子供も庭へ出て来た。一番年長のは最早十四五になる。狭い帯をべた藁草履などを穿いた、しかし髪

の毛の黒い娘だ。年少の子供は私達の方を見て、何となくキマリの悪さうな羞を帯びた顔付をして居た。その側には、トサカの美しい、白い雄鶏が一羽と、灰色な雌鶏が三羽ばかりあそんで居たが、やがてこれも裏の林の中へ隠れて了つた。

小屋は二つに分れて、一方の畳を敷いたところは座敷ではあるが、實際平素は寢室と言つた方が當つて居るだらう。家族が食事したり、茶を飲んだり、客を迎へたりする爐邊の板敷には薄縁を敷いて、耕作の道具、食器の類はすべてその邊に置き並べてある。何一つ飾りの無い、煤

けた壁に、石板畫の彩色したのや、木版刷の模様をついた
 曆などが貼付けてあるのを見ると、そんな疎末な板畫で
 も何程か斯の山の中に住む人達の眼を悦ばすであらう
 と思はれた。暮の賣出しの時に、近在から町へ買物に來
 る連中がよく斯の板畫を欲しがるとも、無理は無いと思
 ふ。

私達は草鞋掛のまゝ、爐邊で足を休めた。細君が辣蕪
 の鹽漬にしたのと、茶を出して勧めて呉れた。渴いた私
 達の口には小屋で飲んだ茶がウマかつた。冬は斯の爐
 に焚火を絶したことが無いと、主人が言つた。こゝまで

上ると餘程氣候も違ふ。

一緒に行つた學生は、小屋の裏の方まで見に廻つて、柿
 は植えても澁が上らないことや、梅もあるが味が苦いこ
 とや、桃だけは斯の邊の地味にも適することなど種々な
 話を主人から聞いて來た。

やがて晝飯時だ。

庭の栗の樹の蔭で、私達は小屋で分けて貰つた藪を焼
 いた。主人は薄縁を三枚ばかり持つて來て、樹の下へ敷
 いて呉れた。そこで晝飯が始まつた。細君は別に鶏と
 茄子の露、南瓜の煮付を馳走振に勧めて呉れた。いづれ

も大鍋にウンとあつた。私達は各自手盛でやつた。學生は握飯、パンなどを取出す。體操の教師はまた好きな酒を用意して來ることを忘れなかつた。

斯の山の中で林檎を試植したら、地梨の蟲が上つて花の蜜を吸ふ爲に、實らずに了つた。これは細君が私達の食事する側へ來ての話だつた。赤犬は廻つて來て、生徒が投げてやる鳥の骨をシヤブつた。

食後に私達は主人に案内されて、黒い土の色の畠の方まで見て廻つた。主人の話によると、松林の向ふには三千坪ほどの桑畠もあり、畠はその三倍もあつて大凡一萬

坪の廣い地面だけあるが、自分の代となつてからは家族も少し、手も届きかねて、荒れたまゝに成つて居るところも有るとのことだ。

私達が訪ねて來たことは、餘程主人の心を悦ばせたらしい。主人はむつとりとした鬚のある顔に、似合はず種々な話をした。蕎麥は十俵の收穫があるとか、試植した银杏、杉、竹などは大半枯れ消えたとか、栗も十三俵ほど播いて見たが、十四度も山火事に逢ふうちに残つたのは既に五六間の高さに成つてよく實りはするけれども、樹の数は焼けて少いとか話した。

落葉松の畠も見えた。その苗は草のやうに嫩かで、日をうけて美しくかゝやいて居た。畠の周囲には地梨も多い。黄に熟したやつは草の中に隠れて居ても、直ぐと私達の眼についた。尤も、あの實は私達にはめづらしくも無かつたが。

主人は又、山火事の恐しいことや、火に追はれて死んだ人のことを話した。これから一里ばかり上つたところに、炭焼小屋があつて、今は柵の木炭を焼いて居るといふ話もした。

斯の山番のある尾の石は、高峰と稱へる場所の一部と

か。尾の石から菱野の湯までは十町ばかりで、毎日入湯に通ふことも出来るといふ。菱野と聞いて私は以前家へ子守に来て居た娘のことを思出した。あの田舎娘の村は菱野だから。

土地案内を知つた體操教師の御蔭で、めづらしいところを見た。斯うした山の中は、めつたに私などの來られる場所では無い。一度私は歴史の教師と連立つてこゝよりもつと高い位置にある番小屋に泊つたことも有る。彼處はまだ開墾したばかりで、こゝほど林が深くなかつた。

別れを告げて尾の石を離れる前に、もう一度私達は番
 小屋の見える方を振り返つた。白樺などの混つた木立の
 中に、小屋へ通ふ細い坂道、岡の上の樹木、それから小屋の
 屋根などが見えた。

白樺の幹は何處の林にあつても眼につくやのだが、あ
 の山櫻を丸くしたやうな葉の中には最早美しく黄ばん
 だのも混つて居た。



其 六

秋の修學旅行

十月のはじめ私は植物の教師T君と一緒に學生を引連れて千曲川の上流を指して出掛けた。秋の日和で楽しい旅を續けることが出来た。斯の修學旅行には、八つが嶽の裾から甲州へ下り、甲府へ出、それから諏訪へ廻つて、そこで私達を待受けて居た理學士、水彩畫家B君、其他の同僚とも一緒に成つて、和田の方から小諸へ戻つて來た。斯の旅には殆んど一週間を費した。私達は藝科八つが嶽の長い山脈について、あの周圍を大きく一廻りしたのだ。

その中でも、千曲川の上流から野邊山が原へかけては一度私が遊びに行つたことのあるところだ。其時は近所の仕立屋の亭主と一緒にだつた。斯の旅で私は以前の記憶を新しくした。その話を君にしやうと思ふ。

甲州街道

小諸から岩村田町へ出ると、あれから南に續く甲州街道は割合に平坦な、廣々とした谷を貫いて居る。黄ばんだ、秋らしい南佐久の領分が私達の眼前に展けて來る。

千曲川は斯の田島の多い谷間を流れて居る。

一體犀川に合する迄の千曲川は、殆んど船の影を見ない。唯流れるまゝに任せてある。この一事だけで、君はあの川の性質と光景とを想像することが出来やう。

私は佐久小縣の高い傾斜から主に谷底の方に下瞰した千曲川をのみ君に語つて居た。今私達が歩いて行く地勢は、それと趣を異にした河域だ。白田野澤の町々を通つて、私達は直ぐ河の流に近いところへ出た。

馬流といふところまで岸に添ふて溯ると河の勢も確かに一變して見える。その邊には、川上から押流されて

来た恐しく大きな石が埋まつて居る。その間を流れる千曲川は大河といふよりも寧ろ大きな谿流に近い。斯の谿流に面した休茶屋には甲州屋としたところもあつて、そこまで行くと何となく甲州に近づいた氣がする。山を越して入込んで来るといふ甲州商人の往來するのも見られる。

馬流の近くで、學生のTが私達の一行に加はつた。Tの家は宮司で、街道からすこし離れた幽邃な松原湖の畔にある。Tは私達を待受けて居たのだ。

白楊、蘆、楓、漆、樺、檜などの類が私達の歩いて行く河岸に

生おひ茂しげつて居ゐた。兩岸りやうがんには、南牧みなまき、北牧きたまき、相木あひぎなどの村々むらを數かずへることが出で來きた。水みづに近ちかく設まけた小ちいさな水車すゐしや小屋こやも到いたるところに見みられた。八やつが嶽たけの山やまつゞきにある赤々あかとした大崩壞だいほうくわいの跡あと、金峰きんぶつ、國師こくし、甲武信かうぶしん、三國さんごくの山々やま、その高たかく聳そびえた頂いたゞき、それから名なも知しられない山々やまの遠とほく近ちかく重かさなり合あつた姿すがたが、私達わたしたちの眺望てうぼうの中うちに入はいつた。

日ひが傾かたむいて來きた。次第しだいに私達わたしたちは谷深たふかく入はいつたことを感かんじた。

時々とき私わたしはT君くんと二人ふたりで立止たちどまつて、川上かはかみから川下かはしもの方ほうへ流ながれて行ゆく水みづを見送みおくつた。その方角ほうかくには、夕日ゆふひが山やまから

山やまへ反射はんしゃして、深ふかい秋あきらしい空くう氣きの中うちに遠とほく炭燒すみやきの烟けむりの立たち登のぼるのを見みえた。

斯この谷たにの盡つきたところところに海うみの口村くちむらがある。何なんとなく川かはの音ねも耳みみについついて來きた。暮くれてから私達わたしたちはその村むらへ入はいつた。

山村さんそんの一夜いちや

斯この山國やまくにの話はなしの中うちに、私わたしは斯様ここんなことを書かいたことが有あつた。

『清佛戦争しんぶつせんそうの後のち、佛蘭西兵ふらんすへいの用もちひた軍馬ぐんばは吾陸軍省わがりくぐんしやうの手て

で買取られて、海を越して渡つて來ました。其中の十
 三頭が種馬として信州へ移されたのです。氣象雄健
 なアルゼリイ種の馬匹が南佐久の奥へ入りましたの
 は、是時のことで。今日一口に雜種と稱へて居るのは、
 專にこのアルゼリイ種を指したものです。其後亞米
 利加産の淺間號といふ名高い種馬も入込みました。
 それから次第に馬匹の改良が始まる、野邊山が原の馬
 市は一年増に盛んに成る、其噂さが某の宮殿下の御耳
 まで届くやうに成りました。殿下は陸軍騎兵附の大
 佐で、かくれもない馬好きですから、御寵愛のフアラリイ

141
 スと云亞刺比亞産を種馬として南佐久へ御貸付にな
 りますと、さあ人氣が立つたの立たないのぢや有りま
 せん。フアラリイの血を分けた當歲が三十四頭と
 いふ呼聲に成りました。殿下の御喜悅は何程でした
 らう。到頭野邊山が原へ行啓を仰せ出されたのです。
 『以前私が仕立屋に誘はれて、一夜を斯の八つが嶽の麓
 の村で送つたのは、丁度その行啓のあるといふ時だつた。
 静かな山村の夜——河水の氾濫を避けて斯の高原の
 裾へ移住したといふ家々——風雪を防ぐ爲の木曾路な
 どに見られるやうな石を載せた板屋根——岡の上にも

あり谷の底にもある灯一鄙びた旅舎の二階から、薄明る
い星の光と夜の空氣とを通して、私は曾遊の地をもう一
度見ることが出来た。

こゝは一頭や二頭の馬を飼はない家は無い程の産馬
地だ。馬が土地の人の主なる財産だ。娘が一人で馬に
乗つて、暗い夜道を平氣で通る程の、荒い質朴な人達が住
むところだ。

風呂桶が下水の溜の上に設けてあるといふことは一
いかに斯の邊の人達が骨の折れる生活を營むとはい
へ——又、それほど生活を簡易にする必要があるとはい

へ——来て見る度に私を驚かす。こゝから更に千曲川
の上流に當つて、川上の八ヶ村といふがある。その邊は
信州の中でも最も不便な、白米は唯病人に頂かせるほど
の、貧しい、荒れた山奥の一つであるといふ。

私達が着いたと聞いて、仕立屋の親類に成る人が提灯
つけて旅舎へ訪ねて來た。こゝから小諸へ出て、長いこ
と私達の校長の家に奉公して居た娘があつた。

その娘も今では養子して、子供まであるとか。斯うい
ふ山村に運關して、下女奉公する人達の一生なども何と
なく私の心を引いた。

君はまだ『ハリコシ』などといふ物を食つたことがあるまい。恐らく名前も聞いたことがあるまい。熱い灰の中で焼いて蕎麥餅だ。草鞋穿で焚火に温りながら、その『ハリコシ』を食ひく話すといふが、此の邊での爐邊の楽しい光景なのだ。

高原の上

翌朝私達は野邊山が原へ上つた。私の胸には種々な記憶が浮び揚つて來た。ファラリスの駒三十四頭、牝馬二百四十頭、牡馬まで合せて三百餘頭の馬匹が列をつ

くつて通過したのも、斯の原へ通ふ道だつた。馬市の立つといふあたりに作られた御假屋、紫と白との幕、あちこちに巢をかけた商人、四千人餘の群集、そんなものがゴチャ／＼胸に浮んで來た。あの時は私は仕立屋と連立つて、秋の日のあつた原の一部を歩き廻つたが、今でも私の眼について居るのは長野の方から知事に隨いて來た背の高い参事官だ。白いしなやかな手を振つて、柔かな靴音をさせる紳士だつた。それで居て動作には敏捷なところもあつた。丁度あの頃私はトルストイの『アンナ、カレニナ』を讀んで居たから、私は自分で想像した

グロンスキイの型をその參事官に當嵌て見たりなどした。あの紳士が肩に掛けた雙眼鏡を取出して、八つが嶽の方に見える牧場を遠く望んで居た様子は——失禮ながら——私の思ふグロンスキイそのまゝだつた。

あの時の混雜に比べると、今度は原の上も寂しい。最早霜が來るらしい雜草の葉のあるひは黄に、あるひは焦茶色に成つたのを踏んで、ポツン——と立つて居る白樺の幹に朝日の映るさまなどを眺め乍ら私達は板橋村といふ方へ進んで行つた。斯の高原の廣さは五里四方もある、荒涼とした原の中には、蕎麥などを蒔いたところも

あつて、それを耕す人達がところ／＼に僅かな村落を形造つて居る。板橋村はその一番取付にある村だ。

以前私は斯の邊のことを、斯様な風に話の中に書いた。『晴れて行く高原の霧の眺めは、どんなに美しいものでせう。すこし裾の見えた八つが嶽が次第に険しい山骨を顯はして來て、終に紅色の光を帯びた巔まで見られる頃は、影が山から山へ映して居りました。甲州に跨る山脈の色は幾度變つたか知れませんが、今、紫が、つた黄。今、灰が、つた黄。急に日があつて、夫婦の行く道を照し始める。見上げれば、ちぎれ／＼の綿の

やうな雲も浮んで、いつの間にか青空に成りました。
わゝ朝です。

男山、金峯山、女山、甲武信嶽などの山々も残りなく顯れ
ました。遠く其間を流れるのが千曲川の源かすかに
見えるのが川上の村落です。千曲川は朝日をうけて
白く光りました。」

夫婦とあるは、私はその話の中に書かうとした人物だ。
一時は私も斯うした文體を好んで書いたものだ。

「筒袖の半天に、股引、草鞋穿で、頬冠りした農夫は、幾群か
夫婦の側を通る。鋤を肩に掛けた男もあり、肥桶を擔

いで腰を捻つて行く男もあり、爺の煙草入を腰にぶら
さげながら随いて行く兒もありました。氣候、雑草、荒
廢、瘠土などを相手に、秋の一日の烈しい労働が今は最
早始まるのでした。

既に働いて居る農夫もありました。黒々とした『ノ
ツペイ』の畠の側を進んでまゐりますと、一人の荒く
れ男が汗霏に成つて、傍目をふらずに畠を打つて居り
ました。大きな鋤を打込んで、身を横にして仆れるば
かりに土の塊を起す。氣の遠くなるやうな黒土の臭
氣は紛として、鼻を衝くのでした……板橋村を離れて、

旅人の群にも逢ひました。

高原の秋は今です。見渡せば木立もところどころ。枝といふ枝は南向に生延びて、冬季に吹く風の勁さも思ひやられる。白樺は多く落葉して高く空に突立ち、細葉の楊樹は踞るやうに低く隠れて居る。秋の光を送る風が騒しく吹渡ると、草は黄な波を打つて動き靡いて、柏の葉もうらがへりました。

こゝかしこに見える大石には秋の日があたつて、寂しい思をさせるのでした。

『ありしをで』の葉を垂れ、弘法菜の花をもつのは爰で

す。

『かしばみ』の實の落ちこぼれるのも爰です。

爰には又野の鳥も住み隠れました。笹の葉蔭に巣をつくる雲雀は、老いて春先ほどの勢も無い。鶉は人の通る物音に驚いて、時々草の中から飛立つ。見れば不恰好な短い羽をひろげて、舞揚らうとしてやがて、バツタリ落ちるやうに草の中へ引隠れるのでした。外の樹木の黄に枯々とした中に、まだ緑勝な蔭をといめたところも有る。それは水の流を旅人に教へるので。そこには雑木が生茂つて泉に添ふて枝を垂れ

て、深く根を浸して居るのです。

今は村々の農夫も秋の労働に追はれて、この高原に馬を放すものも少い。八つが嶽山脈の南の裾に住む山梨の農夫ばかりは、冬季の秣に乏しいので、遠く爰まで馬を引いて来て、草を刈集めて居りました……』
これは主に舊道から見た光景だ。趣の深いのも舊道だ。

以前私は新道の方をも取つて、歸り路に原の中を通つたこともある。其時は農夫の男女が秣を満載した馬を引いて山梨の方へ歸つて行くのに逢つた。彼等は辨當

を食ひながら歩いて居た。聞いて見ると往復十六里の道を歩いて、其間に秣を刈集めなければ成らない。朝暗いうちに山梨を出ても、休んで辨當を食つて居る暇が無いといふ。馬を引いて歩き乍らの辨當——實に忙しい生活の光景だと思つた。

斯様な話を私は同行のY君にしながら、舊道を取つて歩いて行つた。三軒家といふ小さな村を離れてからは人家を見ない。

この高原が牧場に適するのは秣が多いからとのことだ。今は馬匹を見ることも少いが、丘陵の起伏した間に

は、遊び廻つて居る馬の群も遠く見える。

白樺の下葉は最早落ちて居た。枯葉や草のそよぐ音

殊に檜の葉の鳴る音を聞くと、風の寒い、日の熱い高

原の上を旅することを思はせる。

『まぐそ鷹』といふが入つが嶽の方の空に飛んで居るのも見た。私達はところ／＼にある茶色な檜の立木をも見て通つた。それが遠い灰色の雲などを背景にして立つさまは、何となく茫漠とした感じを興へる。原にある一筋の細い道の傍には、紫色に咲いた花もあつた。T君に聞くと、それは松虫草とか言つた。斯の邊は古い戦

場の跡でもあつて、往昔海の口の城主が甲州の武士と戦つて、戦死したと言傳へられる場所もある。

甲州境に近いところで、私達は人の背ほどの高さの木梨を見つけた。葉は落ち盡して、小さな赤い實が残つて居た。草を踏んで行つてその實を探つて見ると、まだ濫い。中には霜に打たれて、口へ入れると溶けるやうな味のするもあつた。間もなく私達は甲州の方に向いた八つが嶽の側面が望まれるところへ出た。私達は樹木の少ない大傾斜、深い谷々などを眼の下にして立つた。

『富士！』



其 七

と學生は互に呼びかはして、そこから高い峻しい坂道を
甲州の方へ下りた。

落葉の一

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武蔵野へ来る冬、淺々とした感じの好い都會の霜、左様いふものを見慣れて居る君に、斯の山の上の霜をお目に掛けたい。この桑畠へ三度か四度もあの霜が来て見給へ、桑の葉は忽ち縮み上つて焼け焦げたやうに成る、畠の土はポロ／＼に爛れて了ふ……見ても可恐しい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへ行くと、雪の方はまだしも感じが柔かい。降り積る

雪はむしろ平和な感じを抱かせる。

十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が面白いやうに地へ下るのを見た。肉の厚い柿の葉は霜のために焼け損はれたり、縮れたりはしないが、朝日があつて来て霜のゆるむ頃には、重さに堪えないで脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫然と眺めて居た位だ。そして、其朝は殊に烈しい霜の来たことを思つた。

落葉の二

十一月に入つて急に寒さを増した。天長節の朝、起出して見ると、一面に霜が来て居て、桑島も野菜島も家々の屋根も皆な白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋れる許りであつた。すこしも風は無い。それで居て一葉二葉づゝ静かに地へ下る。屋根の上の方で鳴く雀も、いつもよりは高くいさましさに聞えた。空はドンヨリとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手元の焚火に凍えた両手をかざしたく成つた。足袋を穿いた爪先も寒くしみて、いかに可恐しい冬の近よつて来ることを感じた。斯の山の

上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、殆んど五ヶ月の冬を過さねば成らぬ。その長い冬籠りの用意をせねば成らぬ。

落葉の三

木枯が吹いて来た。

十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押寄せて来るやうな音に驚かされて、眼が覺めた。空を通る風の音だ。時々それが沈まつたかと思ふと、急に復た吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。殊に南向の障子には

バラ／＼と木の葉のあたる音がして其間には千曲川の
河音も平素から見るとずつと近く聞えた。

障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞込んで來
る。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏
の流のところ立つ柳などは烈風に吹かれて髪を振ふ
やうに見えた。枯々とした桑畠に茶褐色に残つた霜葉
なども左右に吹き靡いて居た。

其日私は學校の往と還とに停車場前の通を横ぎつて、
眞綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭を
冠つて兩手を袖に隠した女だの、行き過ぎるのに遇つ

た。往來の人々は、いづれも鼻汁をすゝつたり、眼側を紅
くしたり、あるひは涙を流したりして、顔色は白ッぽく、頬、
耳、鼻の先だけは赤く成つて、身を縮め頭をかゝめて、寒さ
うに歩いて居た。風を背後にした人は飛ぶやうで、風に
向つて行く人は又力を出して物を押すやうに見えた。
土も、岩も、人の皮膚の色も私の眼には灰色に見えた。
日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木枯が野山
を吹きまくる光景は凄まじく、烈しく、又勇ましくもあつ
た。樹木といふ樹木の枝は焼み、幹も動搖し、柳竹の類は
草のやうに靡いた。柿の實で梢に残つたのは吹き落さ

れた。梅李、櫻、樺、銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこへに聚つた落葉が風に吹かれては舞ひ揚つた。急に山々の景色は淋しく、明るく成つた。

炬燵話

私は君に山上の冬を待受けることの奈様に恐るべきかを話した。しかしその長い寒い冬の季節が又、信濃に於ける最も趣の多い最も楽しい時であることををも告げなければ成らぬ。

それには先づ自分の身體のことを話さう。左様だ。

斯の山國へ移り住んだ當時、土地慣れない私は風邪を引き易くて困つた。斯様なことで、凌いで行かれるかと思ふ位だつた。實際、人間の器官は生活に必要な程度に應じて發達すると言はれるが、丁度私の身體にもそれに適したことが起つて來た。次第に私は烈しい氣候の刺激に抵抗し得るやうに成つた。東京に居た頃から見ると、私は自分の皮膚が殊に丈夫に成つたことを感ずる。私の肺は極く冷たい山の空氣を呼吸するに堪えられる。のみならず私は春先迄枯葉の落ちないあの柵林を鳴らす寒い風の音を聞いたり、眞白に霜の來た葱島を眺めたり

して、屋の外を歩き廻る度に、斯ういふ地方に住むものでなければ知らないやうな、一種刺すやうな快感を覺えるやうに成つた。

草木までも、こゝに成長するものは、柔い氣候の中にあつたものは違つて見える。多くの常盤樹の緑がこゝでは重く黒ずんで見えるのも、自然の消息を語つて居る。試みに君が武藏野邊の緑を見た眼で、こゝの礫地に繁茂する赤松の林などを望んだなら、色彩の相違だけにも驚くであらう。

ある朝私は深い霧の中を學校の方へ出掛けたことが

有つた。五六町先は見えないほどの道を歩いて行くと、これから野面へ働きに行かうとする農夫、番小屋の側にシヨンポリ立つて居る線路番人、霧に濡りながら貨物の車を押す中牛馬の男などに逢つた。そして私は——自身それを感じずるやうに——斯の人達の手などが眞紅に腫れるほどの寒い朝でも、皆な見かけほど氣候に臆しては居ないといふことを知つた。

『奈何です、一枚着やうぢや有りませんか——』
 斯様なことを言つて、皆な歩き廻る。それでも温熱が
 取れるといふ風だ。

それから私は學校の連中と一緒に成つたが、朝霧は次第に晴れて行つた。そこいらは明るく成つて來た。淺間の山の裾もすこし顯れて來た。早く行く雲などが眼に入る。ところどころに濃い青空が見えて來る。そのうちに西の方は晴れて、ポツと日が映つて來る。淺間が全く見えるやうに成ると、でも冬らしく成つたといふ氣がする。最早あの山の巔には白髮のやうな雪が望まれる。斯様な風にして、冬が來る。激しい氣候を相手に働くものに取つて、一年中の楽しい休息の時が來る。信州名物の炬燵の上には、茶盆だの、漬物鉢だの、煙草盆だの、どう

かすると酒の道具まで置かれて、その周圍で炬燵話といふやつが始まる。

小六月

氣候は繰返す。溫暖な平野の地方ではそれほど際立つて感じないやうなことを、こゝでは切に感ずる。寒い日があるかと思ふと、また莫迦に暖い日がある。それから復た一層寒い日が來る。いくら山の上でも、一息に冬の底へ沈んでは了はない。秋から冬に成る頃の小春日和は、斯の地方での最も忘れ難い最も心地の好い時の一

つである。俗に『小六月』とはその楽しさを言ひ顯した言葉だ。で、私はいくらか斯の話を引戻して、もう一度十一月の上旬に立返つて、左様いふ日あたりの中で農夫等が野に出て働いて居る方へ君の想像を誘はう。

小春の岡邊

風のすくない、雲の無い、温暖な日に屋外へ出て見ると、日光は眩しいほどギラ／＼輝いて、静かに眺めることも出来ない位だが、それで居ながら日蔭へ寄れば矢張寒い——蔭は寒く、光はなつかしい——斯の暖かさと寒さ

との混じ合つたのが、楽しい小春日和だ。

左様いふ日のある午後、私は小諸の町裏にある赤阪の田圃中へ出た。その邊は勾配のついた岡ついで、田と田の境は例の石垣に成つて居る。私は枯々とした草土手に身を持たせ掛けて、眺め入つた。

手廻しの好い農夫は既に收穫を終つた頃だ。近いところの田には、高い土手のやうに稲を積み重ね、穂をこき落した藁はその邊に置き並べてあつた。二人の丸鬘に結つた女が一人の農夫を相手にして立ち働いて居た。男は雇はれたものと見え、烏打帽に青い筒袖といふ小作

人らしい風體で、女の機嫌を取りと、糶の俵を造つて居た。そのあたりの田の面には、斯の一家族の外に、野に出て働いて居るものも見えなかつた。

古い釜形帽を冠つて、黄菊一株提げた男が、その田圃道を通りかゝつた。

『まあ、一服お吸ひ。』

と呼び留められて、釜形帽と鳥打帽と一緒に、石垣に寄りながら煙草を燻し始めた。女二人は話しくゝ働いた。

『金さん、お目はどうです——それは結構——あゝ、あゝ、さうとも——』など、女の語る聲が聞えた。私は屋外

に日を送ることの多い人達の生活を思つて、聞くともなしに耳を傾けた。振返つて見ると、一方の畦の上には、菅笠下駄、辨當の包らしい物などが置いてあつて、そこで男の燻す煙草の煙が日の光に青く見えた。

『さいなら、それぢやお静かに。』

と一方の釜形帽はやがて別れて行つた。

鳥打帽は鍬を執つて田の土をすこしナラし始めた。

女二人が錯々と糶を振つたり、稻こきしたりして居るに引替へ、斯の雇はれた男の方は、はかしく仕事もしないといふ風で、すこし働いたかと思ふと、直に鍬を杖にし

て、是方を眺めてはボンヤリと立つて居た。

岡邊は光の海であつた。黒ずんだ土、不規則な石垣、枯々な桑の枝、畦の草、田の面に乾した新しい葉、それから遠くの方に見える森の梢まで、小春の光の充ち溢れて居ないところは無かつた。

私の眼界にはよく働く男が二人までも入つて來た。

一人は近くにある田の中で、大きな鍬に力を入れて、土を起し始めた。今一人はいかにも背の高い、痩せた、年若な農夫だ。高い石垣の上の方で、枯草の茶色に見えるところに半身を顯して、モミを打ち始めた。遠くて、その男の

姿が隠れる時でも、上つたり下つたりする槌だけは見えた。そして、その槌の音が遠い砧の音のやうに聞えた。

午後の三時過迄、其日私は赤坂裏の田圃道を歩き廻つた。

そのうちに、畠側の柿や雑木に雀の群のかしましいほど鳴き騒いで居るところへ出た。刈取られた田の面には、最早青い麥の芽が二寸ほども延びて居た。

急に私の背後から下駄の音がして來たかと思ふと、ぱつたり立止つて、向ふの石垣の上の方に向ひて呼び掛け、る子供の聲がした。見ると、茶色に成つた桑畠を隔て、

親子二人が收穫を急いで居た。子供はお茶の入つたことを知らせに來たのだ。信州人ほど茶好きな人達も少なからうと思ふが、その子供が復た馳出して行つた後でも、親子は時を惜むといふ風で、母の方は稻穂をこき落すに餘念なく、子息はその粃を叩く方に廻つてすこしも手を休めなかつた。遠く離れては居たが、手拭を冠つた母の身を延べつ縮めつするさまも、子息のシャツ一枚に成つて後ろ向に働いて居るさまも、よく見えた。

子供に彼様なことを言はれると、私も咽喉が乾いて來た。

家へ歸つて濃い熱い茶に有付きたいと思ひ乍ら、元來た道を引返さうとした。斜めに射して來た日光は黄を帯びて、何となく遠近の眺望が改まつた。岡の向ふの方には數十羽の雀が飛び集つたかと思ふと、やがてまたパツト散り隠れた。

農夫の生活

君は何程私が農夫の生活に興味を持つかといふことに氣付いたであらう。私の話の中には、幾度か農家を訪ねたり、農夫に話し掛けたり、彼等の働く光景を眺めたり

して、多くの時を送つたことが出て来る。それほど私は飽きない心地で居る。そして、もつとく彼等をよく知りたいたいと思つて居る。見たところ、Openで、質素で、簡単に、半ば野外にさらけ出されたやうなのが、彼等の生活だ。しかし、彼等に近づけば、近くほど、隠れた、複雑な生活を営んで居ることを思ふ。同じやうな服装を着け、同じやうな農具を携へ、同じやうな耕作に従つて居る農夫等。譬へば、彼等の生活は、極く地味な灰色だ。その灰色に幾通りあるか知れない。私は学校の暇々に、自分でも鋤を執つて、すこしばかりの野菜を作つて見て居るが、どうして

も未だ彼等の心には入れない。斯うは言ふものゝ、百姓の好きな私は、奈何かいふ機会を作つて、彼等に近づくことを樂みとする。赤い茅萱の霜枯れた草土手に腰掛け、棧俵を尻に敷き、田へ兩足を投出しながら、ある日、私は小作する人達の側に居た。その一人は学校の小使の辰さんで、一人は彼の父、一人は彼の弟だ。辰さん親子は、麥畠の『サク』を掛け起して居たが、私の方へ来ては、休み々々種々な話をした。雨、風、日光、鳥、蟲、雜草、土、氣候、左様いふものは、無くて叶はぬものであり、乍ら、又百姓が敵として戦はねば成らないも

のでもある。そんなことから斯の邊の百姓が苦むといふ種々な雑草の話が出た。水澤瀉、えご、夜這蔓、山牛房、つる草、蓬、蛇莓、わけびの蔓、かくもんど(天王草)其他田の草取る時の邪魔ものは私なぞの記憶しきれないほど有る。辰さんは田の中から一塊の土を取つて来て、青い毛のやうな草の根が隠れて居ることを私に示した。それは『ひやうく草』とか言つた。斯の人達は又、その中から種々な薬草を見分けることを知つて居た。『大抵の御百姓に、斯の稻は何だなんて聞いても、名を知らないのが多い位に、澤山いろくくと御座います。』

話好きな辰さんの父親は、女穂、男穂のことから、淺間の裾で砂地だから稻も良いのは作れないこと、小麥畠へ來る鳥、稻田を荒すといふ蟲類の話などを私にして聞かせた。『地獄蒔』と言つて、同じ麥の種を蒔くにも、農夫は地勢に應じたことを考へるといふ話もした。小諸は東西の風をうけるから、南北に向つて『ウネ』を造ると、日あたりも好し、又風の爲に穂の擦れ落ちる憂が無い、自分等は絶えず其様なことを工夫して居るとも話した。『しかし上州の人に見せたものなら、斯様なことでよく麥が取れるッて、消魂られます。』

斯う言つて、隠居は笑つた。

『斯の阿爺さんも、ちつたア御百姓の御話が出来ますから、御二人で御話しなすつて下さい。』

と辰さんは言ひ置いて、麥藁帽の古いのを冠りながら復た畠へ出た。辰さんの弟も股引を膝までまくし上げ、素足を顯して、兄と一緒に土を起し始めた。二人は腰に差した鎌を取出して、時々鍬に附着する土を搔取つて、それから復た腰を曲めて錯々とやつた。

『淺間が焼けますナ。』
と皆な言ひ合つた。

私は堀起される土の香を嗅ぎ、弱つた蟲の聲を聞きながら、隠居から身上話を聞かされた。斯の人は六十三歳に成つて、まだ耕作を休まずに居るといふ。十四の時から炙占の道樂を覚え、三十時代には十年も人力車を引いて、自分が小諸の車夫の初だといふこと、それから同居する夫婦の噂などをして、鐵道に親を引つぶされてから其男も次第に零落したことを話した。

『お百姓などは、能の無いものゝ爲るこんです……』
と隠居は自ら嘲るやうに言つた。

其時、髪は白い、背の高い、勇健な體格を具へた老農夫が、

同じ年格好な仲間と並んで、いづれも土の喰ひ入つた大
きな手に鋤を携へながら私達の側を挨拶して通つた。
肥し桶を肩に掛けて、威勢よく向ふの畠道を急ぐ壯年も
有つた。

收穫

ある日、復た私は光岳寺の横手を通り抜けて、小諸の東
側にあたる岡の上に行つて見た。

午後の四時頃だつた。私が出た岡の上は可成眺望の好
いところで、大きな波濤のやうな傾斜の下の方に小諸町

の一部が瞰下される位置にある。私の周囲には既に刈
乾した田だの未だ刈取らない田だのが連なり續いて、そ
の中である二家族のみが残つて收穫を急いで居た。
雪の來ない中に早くと耕作に従事する人達の何かに
つけて心忙しさが思はれる。私の眼前には胡麻鹽頭の
父と十四五ばかりに成る子とが互に長い槌を振上げて
籾を打つた。その音がトン／＼と地に響いて、白い土埃
が立ち上つた。母は手拭を冠り、手甲を着けて、稲の穂を
こいては前にある箕の中へ落して居た。その傍には、父
子の叩いた籾を篩にすくひ入れて、腰を曲め乍ら働いて

居る、黒い日に焼けた顔付の女もあつた。それから赤い
 襷掛に紺足袋穿といふ風俗で、糶の入つた箕を頭の上に
 載せ、風に向つてすこしづゝ振ひ落とすと、その度に糶と塵
 埃との混り合つた黄な煙を送る女もあつた。

日が短いから、皆な話もしないで、塵埃だらけに成つて
 働いた。岡の向ふには、稲田や桑島を隔てゝ、夫婦して笠
 を冠つて働いて居るのがあつた。殊にその女房が箕を高
 く差揚げ風を立てゝ居るのが見える。風は身に染みて、
 冷々として來た。私の眼前に働いて居た男の子は、稲村
 に預けて置いた袖なし半天を着た。母も上着の塵埃を

拂つて着た。何となく私も身體がゾクゾクして來たか
 ら、尻端折を下して、着物の上から自分の膝を摩擦しながら、
 皆なの爲ることを見て居た。

鍬を肩に掛けて、岡づたひに家の方へ歸つて行く頬冠
 りの男もあつた。鎌を二挺持ち、乳呑兒を背中に乗せて、
 『おつかれ』と言ひつゝ、通過ぎる女もあつた。

眼前の父子が打つ槌の音はトン／＼と忙しく成つた。
 『フン』『ヨウ』の掛聲も幽かに泄れて來た。そのうち
 に、父はへなく／＼した俵を取出した。腰を延ばして塵埃
 の中を眺める女もあつた。田の中には黄な糶の山を成

した。
 其時は最早暮色が薄く迫つた。小諸の町ついでと、彼方の山々の間にある谷には、白い夕靄が立ち籠めた。向ふの岡の道を歸つて行く農夫も見えた。
 私はもうすこし辛棒して、と思つて見て居ると、父の農夫が糶をつめた俵に繩を掛けて、それを負ひながら家を指して運んで行く様子だ。今は三人の女が主に成つて働いた。岡邊も暮れかゝつて来て、野面に居て働くものも無くなる。向ふの田の中に居る夫婦者の姿もよく見えぬ程に成つた。

光岳寺の暮鐘が響き渡つた。淺間も次第に暮れ、紫色に夕映した山々は何時しか暗い鉛色と成つて、唯白い煙のみが暗紫色の空に望まれた。急に野面がパツと明るく成つたかと思ふと、復た響き渡る鐘の音を聞いた。私の側には、青々とした菜を負つて歸つて行く子供もあり、男とも女とも後姿の分らないやうなのが足速に岡の道を下つて行くもあり、左様かと思ふと、上着のまゝ細帯も締めないで、まるで帯とけひるげのやうに見える荒くれな女が野獸のやうに走つて行くのもあつた。
 南の空には青光りのある星一つあらはれた。すこし

離れて、また一つあらはれた。斯の二つの星の姿が紫色な暮の空にちら／＼と光りを見せた。西の空はと見ると、山の端は黄色に光り、急に焦茶色と變り、沈んだ日の反射も最後の輝きを野面に投げた。働いて居る三人の女の頬冠り、曲めた腰、皆な一時に光つた。男の子の鼻の先まで光つた。最早稲田も灰色、野も暗い灰色に包まれ、八幡の杜のこんもりとした櫛の梢も暗い茶褐色に隠れて了つた。

町の彼方にはナラ／＼燈火が點き始めた。岡つゞきの山の裾にも點いた。

父の農夫は引返して来て復た一俵負つて行つた。三人の女や男の子は急ぎ働いた。

『暗くなつて、いけねえナア。』と母の子をいたはる聲がした。

『箒探しな——箒——』

と復た母に言はれて、子はうろ／＼と田の中を探し歩いた。

やがて母は箒で糶を掃き寄せ、莖を揚げて取り集めなとする。女達が是方に向いた顔もハッキリとは分らないほどで、冠つて居る手拭の色と顔とが同じほどの暗さ

に見えた。

向ふの田に居る夫婦者も、まだ働くと見えて、灰色な稲田の中に暗く動くさまが、それとなく分る。

汽笛が寂しく響いて聞えた。風は遽然私の身にしみて來た。

『待ちろ〜』

母の聲がする。男の子はその側で、姉らしい女と共に、粃を打つた。彼方の岡の道を歸る人も暗く見えた。『おつかれでござす』と挨拶そこ〜に急いで通過ぎるものもあつた。そのうちに、三人の女の働くさまもよくは

見えない位に成つて、冠つた手拭のみが仄かに白く残つた。振り上ぐる槌までも暗かつた。

『藁をまつめる。』

といふ聲もその中で聞える。

私が斯の岡を離れやうとした頃、三人の女はまだ残つて働いて居た。私が振返つて彼等を見た時は、暗い影の動くとしか見えなかつた。全く暮れ果てた。

巡禮の歌

乳呑兒を負つた女の巡禮が私の家の門に立つた。

寒空には初冬らしい雲が望まれた。一目見たばかりで、皆な氷だといふことが思はれる。氷線の群合とも言ひたい。白い冷い、透明な尖端は針のやうだ。斯の雲が出る頃に成ると、一日は一日より寒氣を増して行く。斯うして山の上に来て居る自分等のことを思ふと、灰色の脚絆に古足袋を穿いた、旅篋のした女の乞食姿にも、心を引かれる。巡禮は鈴を振つて、哀れげな聲で御詠歌を歌つた。私は家のものと一緒に、その女らしい調子を聞いた後で、五厘銅貨一つ握らせながら、『お前さんは何處ですネ。』と尋ねた。

『伊勢でござります。』

『随分遠方だネ。』

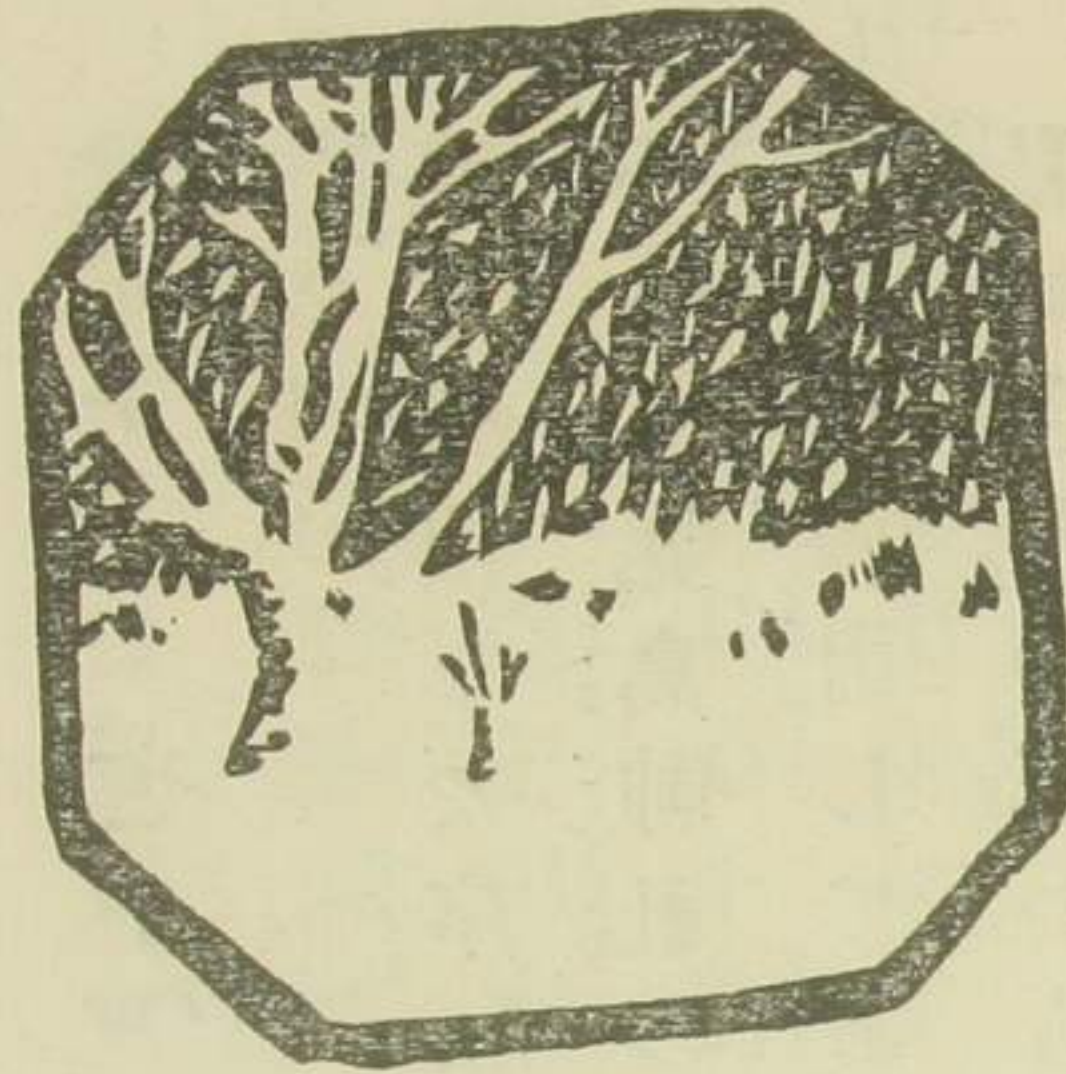
『わしらの方は皆な斯うして流しますでござります。』

『何處の方から来たんだネ。』

『越後路から長野の方へ出まして、諸方を廻つて参りました。これから寒くなりますで、暖い方へ参りますでござりますわい。』

私は家のものに吩咐けて、斯の女に柿を呉れた。女はそれを風呂敷包にして、家のものにまで禮を言つて、寒さうに震へながら出て行つた。

夏の頃から見ると、日は餘程南よりに沈むやうに成つた。吾家の門に出て初冬の落日を望む度に、私はあの『浮雲似故丘』といふ古い詩の句を思出す。近くにある枯々な樹木の梢は、遠い蓼科の山々よりも高いところに見える。近所の家々の家根の間からそれを眺めると、丁度日は森の中に沈んで行くやうに見える。



其 八

一ぜんめし

私は外出した序に時々立寄つて焚火にあてゝ貰ふ家がある。鹿島神社の横手に、一ぜんめし御休處揚羽屋とした看板の出してあるのがそれだ。

私が自分の家から斯の一ぜんめし屋まで行く間には大分知つた顔に逢ふ。馬場裏の往來に近く南向の日あたるの好い障子のところに男や女の弟子を相手にして、石蒲菖萬年青などの青い葉に眼を樂ませながら錯々と着物を造へる仕立屋が居る。すこし行くと、カステラや

羊羹を店頭に並べて賣る菓子屋の夫婦が居る。千曲川の方から投網をさげてよく歸つて來る髪の長い賣卜者が居る。馬場裏を出はづれて、三の門といふ古い城門のみに残つた大手の通へ出ると、紺暖簾を軒先に掛けた染物屋の人達が居る。それを右に見て鹿島神社の方へ行けば、按摩を渡世にする頭を圓めた盲人が居る。駒鳥だの璃瑠だの其他小鳥が籠の中で囀つて居る間から、人の好ささうな顔を出す鳥屋の隠居が居る。その先に一ぜんめしの揚羽屋がある。

揚羽屋では豆腐を造るから、服装に關はず働く内儀さ

んがよく荷を擔いで、襦袢の袖で顔の汗を拭きく町を
 賣つて歩く。朝晩の空に徹る聲を聞くと、ア、豆腐屋の
 内儀さんだと直に分る。自分の家でも斯の女から油揚
 だの雁もどきだのを買ふ。近頃は子息も大きく成つて、
 母親さんの代りに荷を擔いで来て、ハチハイでも奴でも
 トン／＼とやるやうに成つた。

揚羽屋には、うどんもある。尤も乾うどんのうでたの
 だ。一體に此邊では麵類を賞美する。私はある農家で
 一週に一度づゝ上等の晚餐に麵類を用ふるといふ家を
 知つて居る。蕎麥はもとより名物だ。酒盛の後の蕎麥

振舞と言へば本式の馳走に成つて居る。それから、『お
 煮掛』と稱へて、手製のうどんに野菜を入れて煮たのも、
 常食に用ひられる。揚羽屋へ寄つて、大鍋のかけてある
 爐邊に腰掛けて、煙の目にしみるやうな盛んな焚火にあ
 たつて居ると、私はよく人々が土足のまゝでそこに集り
 ながら好物のうでだしうどんに温熱を取るのを見かけ
 る。『お豆腐のたさたては奈何でござはす。』など、言つて、
 内儀さんが大井に熱い豆腐の露を盛つて出す。亭主も
 手拭を腰にブラサゲて出て来て、自分の子息が子供相撲
 に弓を取つた自慢話などを始める。

そこは下層の労働者、馬方、近在の小百姓などが酒を温めて貰ふところだ。斯ういふ暗い屋根の下も、煤けた壁も、汚れた人々の顔も、それほど私には苦に成らなく成つた。私は往來に繋いである馬の鳴聲などを聞きながら、そこで凍えた身體を温める。荒くれた人達の話や笑聲に耳を傾ける。次第に心易くなつて見れば、亭主が一せんにめしの看板を張替へたからと言つて、それを書くことなどまで頼まれたりする。

松林の奥

夷講の翌日、同僚の歴史科の教師W君に誘はれて、山あるきに出掛けた。W君は東京の學校出で、若い元氣の好い、書生肌の人だから、山野を跋涉するには面白い道連だ。小諸の町はづれに近い、興良町のある家の門で、『養いて貰ふのだから、お米を一升も持つておいでなんしよ。柿も持つておいでなんすか——。』斯う言つて呉れる言葉を聞捨て、私達は頭陀袋に米を入れ、毛布を肩に掛け、股引尻端折といふ面白い風をして、洋傘を杖につき、それに牛肉を提げて出掛けた。出發は約束の時より一時間ばかり遅れた。八幡の杜

を離れたのが午後の四時半だつた。日の暮れないうちに、と、岡ついきの細道を辿つて、浅間の方をさして上つた。ある松林に行き着く頃は、夕月が銀色に光つて来て、既に暮色の迫るのを感じた。西の山々のかなたには、日も隠れた。私達は後方を振り返り／＼して急いで行つた。静かな松林の中にある一筋の細道——それを分けて上ると、浅間の山々が暗い紫色に見えるばかり、松葉の落ち敷いた土を踏んで行つても足音もしなかつた。林中を泄れて射し入る残りの光が私達の眼に映つた。西の空には僅かに黄色が残つて居た。鳥の聲一つ聞えな

かつた。

そのうちに、一つの松林を通越して、また他の松林の中へ入つた。其時は、西の空は全く暗かつた。月の光はほんもりとした木立の間から射し入つて、林に満ちた夕靄は煙るやうであつた。細長い幹と幹との並び立つさまは、斯の夕靄の灰色な中にも見えた。遠い方は暗く、木立も黒く、何となく深く静かに物寂しい。宵の月は半輪で、冴えては居たが、光は薄かつた。私達が辿つて行く道は松かげに成つて暗かつた。けれども一筋黒く眼にあつて、松葉の散り敷いたところは殊に區

別べつすることが出来た。そこまで行くゆくと、最早もはや人里ひとさとは遠とほく、小諸こもろの方は隠かくれて見みえなかつた。時々私達わたしたちは林はやしの中なかにたゝずんで、何なんの物音ものおととも知しれない極ごくく幽かすかな響ひびきに耳みみを立てたり、暗くらい奥おくの方ほうを窺うかがふやうにして眺ながめ入いつたりした。先まきに進すすんで行くゆくW君くんの姿すがたも薄暗うすくらく此方こちらを向むいてもよく顔かほが分わからない程ほどの光ひかりを辿たどつて、猶なほ奥深おくふかく進すすんだ。すべての物ものは暗くらい夜よるの色いろに包つまれた。それが靄もやの中なかに沈しづみ入いつて方ちかのない月つきの光ひかりに、朦朧もうろうと影かげのやうに見みえた。ある時ときは、芝しばの上うへに腰掛こしかけて、肩かたに掛かけた物ものを卸おろし、足あしを投な出して、しばらく休やすんで行いつた。私わたしは既すでに非ひ常じょうな疲勞ひらうを

覺おぼえた。といふは、腹はら具合ぐあひが悪わるくて、飯めしを一度ど食くはなかつたから。でW君くんと一緒に休やすむ時ときには、そこへ倒たはれるやうに身みを投なげた。臆おそて復またた洋傘やうさんに力ちからを入れて、起たち上あつた。いくつか松林まつばやしを越こえて、廣々ひろくとしたところへ出でた。私達わたし二人ふたりの影かげは地ちに映うつつて見みえた。月つきの光ひかりは明あるくなつたり暗くらくなつたりした。そのうちに私達わたしは大おほきな黒くろいものを見みつけた。七ななひろ石いしだ。
『もう餘程よほど來きましたかねえ。どうも非ひ常じょうに疲つかれた。足あしが前まきへ出でなくなつた。』
『私わたしも夜道よみちはしましたが、斯様こんなに弱よわつたことはありませ

ん。

『こゝで一つ休まらうぢやありませんか。』

『弱いナア。あゝあゝ。』

斯う言合つて、勇氣を鼓して進まうとする、疲れた足の指先は石に躓いて痛い。復たぐつたりと倒れるやうに、草の上へ横に成つて休んだ。そこは淺間の中腹に、大傾斜のところ、あたりは茫漠とした荒れた原のやうに見えた。越えて來た松林は暗い雲のやうで、ところどころに黒い影のやうな大石が夜色に包まれて眼に入るばかりだ。月の光も薄く、斯の山の端に満ちた。空の彼

方には青い星の光が三つばかり冴えて見えた。灰白い夜の雲も望まれた。

深山の燈影

赤々と障子に映る燈火を見た時の私達の喜びは譬へやうもなかつた。私達は漸くのこと、清水の山小屋に辿り着いた。

小屋の番人はまだ月明りの中で何か取片付けて働いて居る様子であつた。私達は小屋へ入つて、疲れた足を洗ひ、脚絆のまゝで爐邊に寛いだ。W君は毛布を身に纏

ひながら、

『本家の小母さんが、お竹さんにどうか明日は大根洗ひに降りて来て下さいって——それにKさんの結納が来ましたから、小母さんも見せたいからって。それは立派なのが出来ましたよ。』

お竹さんは番人の細君のことで、本家の小母さんとは小諸を出がけに私達にすこしは多く米を持って行けと注意して呉れた人だ。W君は斯の人達と懇意で話し方も忸々しい。

米を入れた頭陀袋、牛肉の新聞紙包、それから一かけの

半襟などが、土産がはりにそこへ取出された。

番人は小屋へ入りがけに。

『肉には葱が宜しうござせうナア。』
 『肉には葱が宜しうござせうナア。』
 と言ふと、W君も笑つて。

『あゝ葱は結構。』

『序に、芋があつたナア——左様だ、芋も入れるか。』と番人は屋外へ出て行つて、葱芋の貯へたのを持って来た。やがて爐邊へドツカと座り、ふすく煙る雑木を大火箸であらけ、ぱつと燃え付いたところへ櫟の枝を折りくべた。火勢が盛んに成ると、皆な顔も赤々と見えた。

番人はまだ年も若く、前の年の四月にこゝへ引移つて、五月に細君を迎へたといふ。火に映る顔は健かに輝き、眼は小さいけれど正直な働き好きな性質を表して居た。話をしては大きく口を開いて、頭を振り、舌の見える程に笑ふのが癖のやうだ。その笑ひ方はすこし無作法ではあるが、包み隠しの無いところは嫌味の無い面白い若者だ。直に懇意に成れさうな人だ。細君はまた評判の働きの者で、顔色の赤い、髪が厚く黒い、どこかにまだ娘らしいところの残つた、若く肥つた女だ。まことに似合つた好い若夫婦だ。

215

部屋の方は暗いランプに照らされて居て、爐邊のみ明るく見えた。小屋の庭の隅には竈が置いてあつて、そこから煙が登り始めた。飯をたく音も聞えて來た。細君はザク／＼と葱を切りながら、

『私は幼少い時から寂しいところに育ちやしたが、斯の山へ來て慣れる迄には、眞實に寂しい思をいたしやした。』

斯う山住の話をして聞かせる。亭主も私達が訪ねて來たことを嬉しさに、その年作つたといふ葱の出來などを話し聞かせて夫婦して夕飯の仕度をして呉れた。爐には馬に食はせるとかの馬鈴薯を煮る大鍋が掛けて

あつたが、それが小鍋に取替えられた。細君が芋を入れ、ば、亭主はその上へ蓋を載せる。私達は『手鍋提げても』といふ俗謡にあるやうな生活を眼のあたり見たり。小猫は肉の香を嗅ぎつけて新聞紙包の傍へ鼻を押しつけ、亭主に叱られた。やがて私達の後を廻つて遠慮なくW君の膝に上つた。『野郎』と復た亭主に叱られて爐邊に縮み、寒さうに火を眺めて目を細くした。

『私は斯の猫といふ奴が大嫌ひですが、本家でもつて無理に貰つて呉れつて、連れて來やした。』

と亭主は言つて、色の黒い野鼠が斯の小屋へ來ていた

ずらすることなど、山の中らしい話をして笑つた。

『すこし煙たくなつて來たナア。開けるか。』とW君は起上つて、細目に小屋の障子を開けた。しばらく屋外を眺めて立つて居た。

『あゝ、好い月だ、冴え〜として。』

と言ひながら斯の同僚が座に戻る頃は鍋から白い泡を吹いて、湯氣も立のぼつた。

『さア、もういゝよ。』

『肉を入れて下さい。』

『どれ入れるかな。一寸待てよ、芋を見て――』

亭主は貝匙で芋を一つ掬つた。それを鍋蓋の上に載せて、いくつかに割つて見た。芋は肉を入れても可い程に煮えた。そこで新聞紙包が解かれ、竹の皮が開かれた。赤々とした牛の肉のすこし白い脂肪も混つたのを、亭主は箸で鍋の中に入れた。

『どうも甘さうな匂ひがする。斯様な御土産なら毎日でも頂きたい。』と亭主がW君に言つた。

細君は戸棚から、膳茶椀、塗箸などを取出し、飯は直に釜から盛つて出した。

『どうしやすか、斯の爐邊の方がめづらしくて好うごは

せう。』

と細君に言はれて、私達は焚火を眺め、夕飯を始めた。其時は餘程空腹を感じて居た。

『さア、肉も煮えやした。』と細君は給仕しながら款待顔に言つた。

『お竹さん、勘定して下さい、澤山頂きますから。』とW君も心易い調子で、『うまい、斯の葱はうまい。熱熱。フウ。』

『どうも寒い時は肉に限りますナア。』と亭主は一緒にやつた。

三杯ほど肉の汁をかへて、私も盛んな食欲を満たした。私達二人は帯をゆるめるやら、洋服のズボンをゆるめるやらした。

『さア、おかへなすつて——山へ来て御飯がまずいなんて仰る方はありませんよ。』

と細君が言ふうち、つとW君の前にあつた茶碗を引きたくつた。W君はあわて、奪ひ返さうとするやうに手を延ばしたが、間に合はなかつた。細君はまた一ぱい飯を盛つて勧めた。

W君は笑ひながら頭を抱えた。『ひどい——』——ひど

くやられた。』

『えッ、やられた？』と亭主も笑つた。

『その位はいけやせう。』

『どうして、もう澤山頂いて、實際入りませぬ。』とW君は溜息吐いた後で、『ナ、それぢや、やるか。どうも一ぱい食つた——え、香の物でやれ。』

楽しい笑聲の中に、私は夕飯を済ました。『お前も御馳走に成れ。』といふ亭主の蔭で、細君も飯を始めた。戸棚の中に入れられた小猫は、物欲しさうに鳴いた。山の中のこと、亭主は牛肉を包んだ新聞紙をもめづらしさう

に展げて、讀んだ。W君はあまり詰込み過ぎたかして、毛布を冠つたまゝ、暫時あをのけに倒れて居た。

炭焼、兎狩の話などが夫婦の口からかはるゝ話された。やがて細君も膳を片付け、馬の飲料にとフスマを入れた。大鍋を爐に掛けながら、ある夜この山の中で夫の留守に風が吹いて新築の家の倒れたこと、もし斯の小屋の方へ倒れて來たら其時は馬を引出さうと用意したに、彼方に倒れて、可恐しい思をしたことを話した。めつたに外へ泊とたことの無い夫が其晩に限つて本家で泊つた、とも話した。

新築の家といふは小屋に近く建て、あつた。私達はその家の方へ案内されて、そこで一晩泊めて貰つた。漸く普請が出来たばかりだとか、戸のかはりに唐紙を押つけ、その透間から月の光も泄れた。私達は毛布にくるまり、燈火も消し、疲れて話もせず、眠つた。

山の上の朝飯

翌朝の三時頃から、同じ家の内に泊つて居た土方は最早起き出す様子だ。斯の人達の話聲は、前の晩遅くまで聞えて居た。雉子の鳴聲を聞いて、私達も朝早く床を離

れた。

私達は重なり疊なつた山々を眼の下に望むやうな場
 處へ来て居た。谷底はまだ明けきらない。遠い八ヶ嶽
 は灰色に包まれ、その上に紅い雲が棚引いた。次第に山
 の端も輝いて、紅い雲が淡黄に變る頃は、夜前眞黒であつ
 た落葉松の林も見えて來た。

亭主と連立つて、私達は小屋の周圍にある玉菜島、葱島、
 菊島などの間を見て廻つた。大根乾した下の箱の中か
 ら、家鴨が二羽ばかり這出した。そして喜ばしさに羽
 ばたきして、そこいらにこぼれたものを拾つては、首を縮

めたり、黄色い口嘴を振つたり、ひよろくと歩き廻つた
 りした。

亭主は私達を馬小屋の前に連れて行つた。赤い馬が
 首を出して、鼻をブルブル言はせた。冬季のことだから
 毛も長く延び、背は高く、目は優しく、肥大な骨格の馬だ。
 亭主は例のフスマに芋葱のうでたのを混ぜ、ツタを加へ
 て搔廻し、それを大桶に入れて、馬小屋の鍵に掛けて遣つ
 た。馬はあまへて、朝飯欲しさらな顔付をした。

『廻つて來い。』

と亭主が言ふと、馬は主人の言葉を聞分けて、ぐるりと

一度小屋の内を廻つた。

『もう一度——』

と復た亭主が馬の鼻面を押しやつた。それから斯の可憐な動物は桶の中へ首を差込むことを許された。馬がゴト／＼させて食ふ傍で、亭主は一斗五升の白水が一汲に盡されることを話して、私達を驚かした。

山上の雲は漸く白く成つて行つた。谷底も明けて行つた。光の觸れるところは灰色に望まれた。

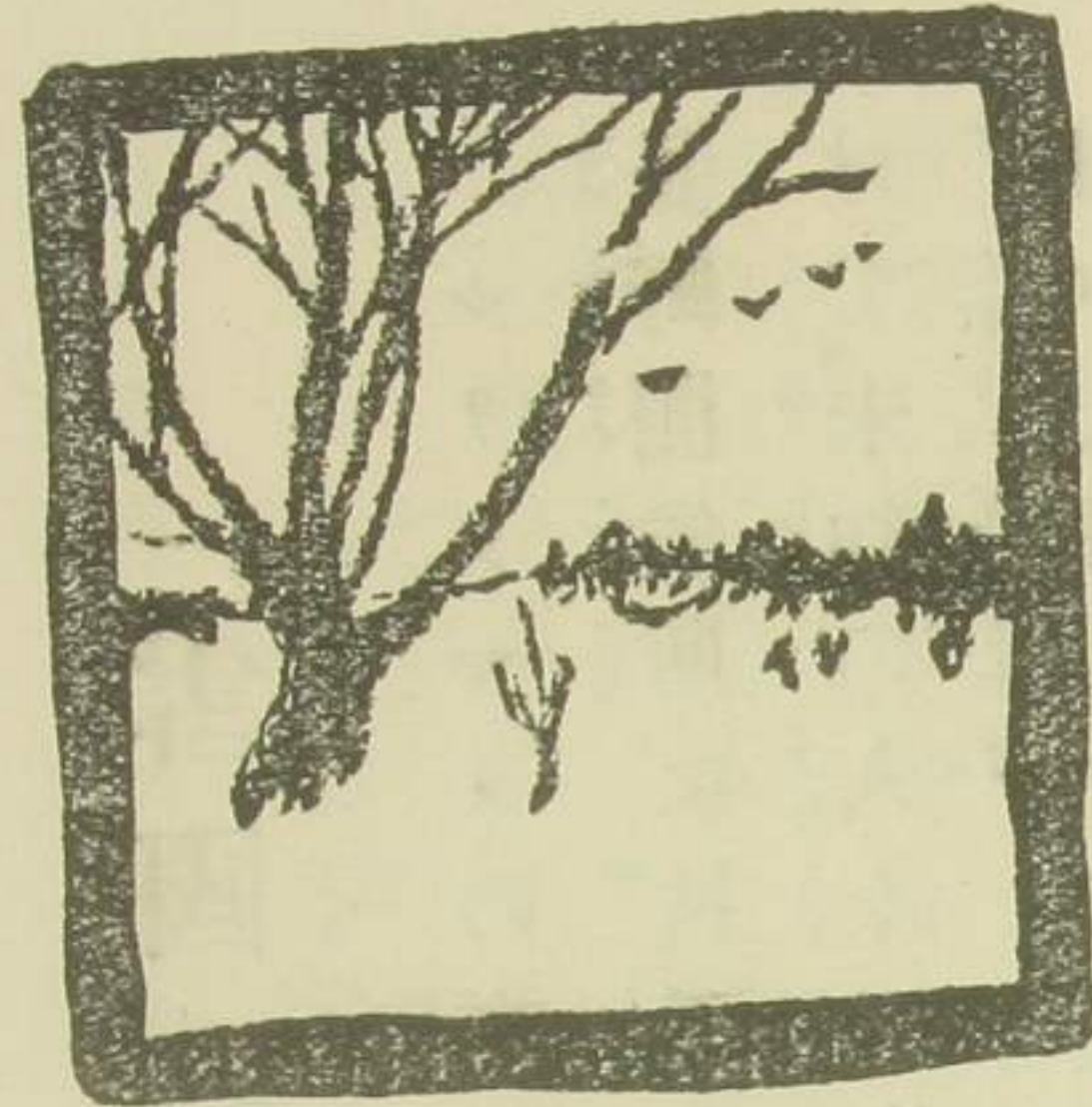
細君が膳の仕度の出来たことを知らせに來た。めづらしいところで、私達は朝の食事をした。亭主は食べ了

つた茶椀に湯を注ぎ、それを汁椀にわけて飲み盡し、やがて箱膳の中から布巾を取出して、茶椀も箸も自分で拭いて納めた。

もう一度私達は亭主と一緒に小屋を出て、朝日に光る山々を見上げ、見下した。亭主は望遠鏡まで取出して來て、あそこに見えるのが澁の澤、その手前の窪みが靈泉寺の澤、と一々指して見せた。八つが嶽、蓼科の裾、御牧が原、

一て一望の中にあつた。

層を成して深い谷底の方へ落ちた斷崖の間には、桔梗、山邊、横取、多計志、八重原などの村々を數へることが出來



其 九

る。白壁も遠く見える。千曲川も白く光つて見える。
 十二月に入ると山の雉は島へ下りて来る、どうかする
 と人の足許より飛び立つことがある。兎も雪の中の麥
 を喰ひに寄る。斯うした話が私達にはめづらしい。

雪國のクリスマス

クリスマス夜の翌日を私は長野の方で送つた。長野測候所に技手を勤むる人から私は招きの手紙を受けて、未知の人々に逢ふために、小諸を發ち、汽車の窓から田中上田坂本などの驛々を通り過ぎて、長野まで行つた。そこにある測候所を見たいと思つたのが斯の小さな旅の目的の一つであつた。私はそれも果した。

雪國のクリスマス——雪國の測候所——と言つた丈でも、すでに何物か君の想像を動かすものがあるであら

う。しかし私はその話を君にする前に、いかに斯の國が野も山も雪のため埋もれて行つたかを話したいと思ふ。

毎年十一月の二十日前後には初雪を見る。ある朝私は小諸の住居で眼が覺めると、思ひがけない大雪が來て居た。鹽のやうに細かい雪の降り積のが、斯ういふ土地の特色だ。あまりに周圍の光景が白々として居た爲か、私の眼にはいくらか青みを帯びて見える位だつた。朝通ひの人達が下駄の齒につく雪になやみ乍ら往來を辿るさまは、恰かも暗夜を行く人に異ならない。赤い毛布

で頭を包んだ草鞋穿の小學生徒の群町家の軒下にシヨ
ンポリと佇立む鶏、それから停車場のほとりに貨物を満
載した車の上にも雪の積つたさまなどを見るとき、降つ
た降つたと左様思ふ。私は懐古園の松に掛つた雪が時
々崩れ落ちる度に、濛々とした白い烟を揚げるのを見た。
谷底にある竹の林が皆な草のやうに臥て了つたのをも
見た。

岩村田通ひの馬車が斯の雪の中を出る。馬丁の吹き
鳴らす喇叭の音が起る。薄い塵を掛けた馬の身はピッ
シヨリと濡て、粗く亂れた鬘からは雫が滴る。ザクザク

と音のする雪の路を、馬車の輪が滑り始める。白く降り
埋んだ道路の中には、人の往來の跡だけ一筋赤く土の色
になつて、うね／＼と印したさまが眺られる。家ごと
に出て雪をかく人達の混雑したさまも、斯ういふ土地でな
ければ見られない光景だ。
薄い霧か霧か、来て雪のあとの町々を立ち罩めた。
その日の黄昏時のことだ。晴れたナと思ひながら門口
に出て見ると、ばら／＼と冷いのが襟にかゝる。ヤア降
つてるのかと、思はず髪に觸ると、霧のやうに見えたのは
矢張細かい雪だといふことが知れる。二度ばかり搔取

つた路も、また薄白くなつて、夜に入れば、時々家の外で下駄の雪を落す音が、ハタ／＼と聞える。自分の家へ客でも訪れるのかと思ふと、それが往來の人々であるには驚かされる。

雪明りで、暗いなかにも道は辿ることが出来る。町を通ふ人々の提灯の光が、夜の雪に映つて、花やかに明るく見えるなども Picturesque だ。

君、私は斯の國に於ける雪の第一日のあらましを君に語つた。斯の雪が残らず溶けては了はないことを、君に思つて見て貰ひたい。殊に寒い日蔭庭だとか、北側の屋

根だとかには、何時までも消え残つて、降り積つた上へと復た積るので、その雪の凍つたのが春までも持越すことを思つて見て貰ひたい。

しかし、これだけで未だ私が斯ういふ雪國に居るといふ感じを君に傳へるには、不充分だ。その雪の來た翌日になつて見ると、屋根に残つたは一尺ほどで、軒先には細い氷柱も垂下り、庭の林檎も倒れ臥して居た。鶏の聲まで遠く聞えて、何となくすべてが引被せられたやうに成つた。雪の翌日には、きまりで北の障子が明るくなる。灰色の空を通して日が照し始めると雪は光を含んでギ

ラ／＼輝く。見るもまぶしい。軒から垂れる雫の音は、
 日が一／＼單調な、退屈な、佗しく静かな思をさせる。
 更に小諸町裏の田圃側へ出て見ると、淺々と萌え出た
 麥などは皆な白く埋もれて、岡つゞきの起き伏すさまは、
 さながら雪の波の押し寄せて来るやうである。流石に
 田と田を區別する低い石垣には、大小の石の面も顯はれ、
 黄ばんだ草の葉の垂れたのが見られぬでもない。遠い
 森、枯々な梢、一帯の人家、すべて柔かに深い鉛色を帯びて
 見える。斯の鉛色——もしくはすこし紫色を帯びたの
 が、これからの色彩の基調かとも言たい。朦朧として、い

かにもおぼつかないやうな名狀し難い世界の方へ、人の
 心を連れて行くやうな色調だ。
 翌々日に私はまた鶴澤といふ方の谷間へ出たことが
 あつた。日光が恐しく烈しい勢で私に迫つて來た。四
 面皆な雪の反射は殆んど堪へられなかつた。私は眼を
 開いてハッキリ物を見ることも出来なかつた。まぶし
 いところは通り過ぎて私はほと／＼痛いやうな日光の
 反射と熱とを感じた。そこはだら／＼と次第下りに谷
 の方へ落ちて居る地勢で、高低の差別なく田畠もしくは
 桑畠に成て居る。一段一段と刻んでは落ちて居る地層

の側面は、焦茶色の枯草に掩はれ、ところどころ赤黝い土の
 あらばれた場所もある。その赤土の大波の上は枯々な
 桑畠で、ウネなりに白い雪が積つて、日光の輝きを受けて
 居た。其大波を越えて、蓼科の山脈が望まれ、遙かに日本
 アルプスの遠い山々も見えた。其日は私は千曲川の凄
 まじい音を立て、流れるのを聞いた。

斯様な風にして、溶けたと思ふ雪が復た積り、顯れた道
 路の土は復た隠れ、十二月に入つて曇つた空が續いて、日
 の光も次第に遠く薄く射すやうに成れば、周圍は半ば凍
 りつめた世界である。高い山々は雪嵐に包まれて、全體

の姿を顯す日も稀だ。小諸の停車場に架けた筈からは
 水が溢れて、それが太い氷の柱のやうに成る。小諸は降
 らない日でも、越後の方から上つて來る汽車の屋根の白
 いのを見ると、ア彼方は降つてるナと思ふこともある。
 冬至近くに成れば、雲ともつかぬ水蒸氣の群が細線の集
 合の如く寒い空に懸り、その蕭條とした趣は日没などに
 殊に私の心を引く。其頃には、軒の氷柱も次第に長くな
 つて、尺餘に及ぶものもある。草葺の屋根を傳ふ濁つた雫
 が凍るのだから、茶色の長い劔を見るやうだ。積りに積
 る庭の雪は、やがて縁側より高い。その間から顔を出す

石南木などをみると、葉は寒さうにべたりと垂れ、強い蕾だけは大きく堅く附着いて居る。冬籠りする土の中の蟲同様に、寒氣の強い晩などは、私達の身體も縮こまつて了ふ………

斯ういふ寒さと凍つた空氣とを衝いて、私は未知の人々に逢ふ樂みを想像しながら、クリスマスのあるといふ日の暮方に長野へ入つた。例の測候所の技手の家を訪ねると、主人はまだ若い人で、炬燵にあたりながらの氣象學の話や、文學上の精しい引證談などが、私の心を樂ませた。ラスキンが『近代畫家』の中にある雲の研究の話

なども出た。ラスキンが雲を三層に分けた頃から思ふと、九層の分類にまで及んだ近時の雲形の研究は進んだものだ、斯う主人が話して居るところへ、ある婦人の客も訪ねて來た。

私が主人から紹介されたその若い婦人は、牧師の夫人で、主人が親しい友達であるといふ。快活な聲で笑ふ人だつた。その晩歌ふクリスマススの唱歌で、その夫人の手に成つたものも有るとのことだつた。やがて降誕祭を祝ふ時刻も近いたので、私達は連立つて技手の家を出た。私が案内されて行つた會堂風の建物、丁度坂に成つ

た町の中途にあつた。そこへ行くまでに私は雪の残つた暗い町々を通つた。時々私は技手と一緒に、凍つた往來に足を留めて、後部の方に起る女連の笑聲を聞くこともあつた。その高い楽しい笑聲が、寒い冬の空気に響いた時は、一層雪國の祭の夜らしい思をさせた。後に成つて私は、若い牧師夫人が二度ほど滑つて轉んだことを知つた。

赤々とした燈火は會堂の窓を泄れて居た。そこに集つて居た多勢の子供と共に、私は田舎らしいクリスマスマスの晩を送つた。

長野測候所

翌朝私は親切な技手に伴はれて、長野測候所のある岡の上に登つた。

途次技手は私を顧みて、ある小説の中に、榛名の朝の飛雲の赤色なるを記したところが有つたと記憶するが、飛雲は低い處を行くのだから、赤くなるといふことは奈何など、話した。流石専門家だけあつて話すことがすべて精しかつた。

測候所は建物としては小さいが、眺望の好い位置にあ

る。そこは東京の氣象臺へ宛て、日毎の報告を造る場所に過ぎないと言ふけれども、萬般の設備は始めての私にはめづらしく思はれた。雲形や氣温の表を製作しつゝ、日を送る人々の生活なども、私の心を引いた。やがて私は技手の後に隨いて、狭い樓階を昇り、觀測臺の上へ出た。朝の長野の町の一部がそこから見渡される。向ふに連なる山の裾には、冬らしい靄が立ち罩めて、その間の空虚なところだけ後景が明かに透けて見えた。風力を計る器械の側で、技手は私に、暴風雨の前の雲——例へば廣濶な海岸の地方で望まれるやうなは、その全

形を斯の信濃の地方で望み難いことを話して呉れた。その理由としては、山が高く、氣壓の衝突から雲はちぎれ、に成るといふ説明をも加へて呉れた。「雲の多いのは冬ですが、しかし單調ですね。變化の多いと言つたら、矢張夏でせう。夏は——雲の量に於いては——冬の次でせうかな。雲の妙味から言へば、私は春から夏へかけてだらうと思ひますが……」斯う技手は言つて、それから私達の頭の上に群り集る幾層かの雲を眺めて居たが、思ひ付いたやうに、『あの雲は何と御覽ですか。』

と私に指して尋ねた。

私も旅の心を慰める爲に、すこしばかり雲の日記などを
をつけて見て居るが、斯う的確に専門家から問を出され
 た時は、一寸返事に困つた。

鐵道草

鐵道が今では中仙道なり、北國街道なりだ。斯の千曲
 川の沿岸に及ぼす激烈な影響には、驚かれるものがある。
 それは靜かな農民の生活までも變へつゝある。
 鐵道は自然界にまで革命を持來した。その一例を言

へば、此邊で鐵道草と呼んで居る雜草の種子は鐵道の開
 設と共に侵入し來つたものであるといふ。野にも畠に
 も、今ではあの猛烈な雜草の蔓延しないところは無い。
 そして土質を荒したり、固有の草地を制服したりしつゝ
 ある。

屠牛の一

上田の町はづれに屠牛場のあることは聞いて居たが
 それを見る機會もなしに過ぎた。丁度上田から牛肉を
 賣りに來る男があつて、その男が案内しやうと言つて吳

れた。

正月の元日だ。新年早々屠牛を見に行くとは、随分物數寄な話だとは思つたが、しかし私の遊意は勃々として制へ難いものがあつた。朝早く私は上田をさして小諸の住居を出た。

小諸停車場には汽車を待つ客も少い。驛夫等は集つて歌留多の遊びなぞして居た。田中まで行くと、いくらか客を加へたが、その田舎らしい小さな驛は平素より更に閑静で、停車場の内、で女子供の羽子をつくさまも、汽車の窓から見えた。

249

初春とは言ひながら、寒い黄ばんだ朝日が車窓の硝子に射し入つた。窓の外は、枯々な木立もさびしく、野にゐる人の影もなく、ひっそりとして雪の白く残つた谷々、石垣の間の桑、茶色な櫟の枯葉などが、私の眼に映つた。車中にも數へるほどしか乗客がない。隅のところには、古い帽子を冠り、古い外套を身に纏ひ、赤い毛布を敷いて、まだ十二月らしい顔付しながら、さびしうに居眠りする鐵道員もあつた。斯うした汽車の中で、日を送つて居る人達のこととも思ひやられた。(この山の上の單調な鐵道生活に堪へ得るものは、實際は越後人ばかりである)

か。
 上田町に着いた。上田は小諸の堅實にひきかへ敏捷を以て聞えた土地だ。この一般の氣風といふものも畢竟地勢の然らしめるところで、小諸のやうな砂地の傾斜に石垣を築いて其上に骨の折れる生活を営む人達は、勢ひ質素に成らざるを得ない。寒い氣候と瘦せた土地とは自然に勤勉な人達を作り出した。こゝの畠からは上州のやうな豊富な野菜は受取れない。堅い地大根の澤庵を噛み、朝晩味噌汁に甘んじて働くのは小諸である。十年も昔に流行つたやうな紋付羽織を祝儀不祝儀に着

251
 用して、それを恥ともせず、否むしる粗服を誇りとするが小諸の旦那衆である。けれども私は小諸の質素も一種の形式主義に落ちて居るのを認める。私は他所で着て来たやわらか物を脱いでそれを綿服に着更へながら小諸に入る若い謀反人のあることを知つて居る。要するに、表面は空しく見せて其實豊かに、表面は無愛想でも其實親切を貴ぶのが小諸だ。これが生活上の形式主義を産む所以であらうと思ふ。上田へ来て見ると、都會としての規模の大小はさて置き、又實際の殷富の程度は兎に角、小諸ほど陰氣で重々しくない。小諸の商人は買ひた

か御買ひなさいといふ無愛想な顔付をして居て、それで割合に良い品を安く賣る。上田ではそれほどノンキにして居られない事情があると思ふ。絶えず周圍に心を配つて、舊い城下の繁昌を維持しなければ成らないのが上田の位置だ。店々の飾りつけを見ても、競つて顧客の注意を引やうに快く出来て居る。鹽鯉節、太物、其他上田で小賣する商品の中には、小諸から供給する荷物も少くないといふ。

思はず私は山の上にある都會の比較を始めた。其日は牛のつぶし初めとかで、屠牛場の取締をするといふ肉

屋を訪ねると、例の籠を肩に掛けて小諸まで賣りに来る男が私を待つて居て呉れた。私は肉屋の亭主にも逢つた。斯の人は口数は少いが、何となく言葉に重味があつて、牛のことには明るい人物だつた。

肉屋の若者等は空車をガラ／＼言はせて町はづれの道を引いて行つた。私達もその後を随いて、細い流を渡り、太郎山の裾へ出た。新しい建物の前に、鋭い眼付の犬が五六匹も群がつて居た。そこが屠牛場だつた。

黒く塗つた門を入ると、十人ばかりの屠手が居た。その中でも重立つた頭は年の頃五十あまり、萬事に老練な

物の言振りをする男で、肥つた頬に愛嬌を見せ乍ら、肉屋の亭主に新年の挨拶などをした。検査室にも待合室にも松が飾つてあつて、繫留場では赤い牝牛が一頭と、黒牛が二頭繫いであつた。中央の庭には一頭の豚を入れた大きな箱も置いてあつた。この庭は低い黒塗の板塀を境にして、屠場に續いて居る。

屠牛の二

黒い外套に鳥打帽を冠つた獣醫が入つて來た。人々

は互に新年の挨拶を取換した。屠手の群はいづれも白い被服を着け、素足に冷飯草履といふ寒さうな風體で、それ／＼仕度を始める。庭の隅にかいんで鋭い出刃庖丁を磨ぐのもある。肉屋の亭主は板塀に立て掛けてあつた大鉞を取つて私に示した。薪割を見るやうな道具だ。一方に五六寸ほどの尖つた鐵管が附けてある。その柄には乾いた牛の血が附着して居た。屠殺に用ゐるのださうだ。肉屋の亭主は沈着いた調子で、以前には太い釘の形状したのをを用ゐたが、斯の管状の方が丈夫で、打撃に力が入ることなどを私に説明した。

南部産の黒い牝牛が、やがて中央の庭へ引出されることに成つた。その鼻息も白く見えた。繋いであつた他の二頭は遽かに騒ぎ始めた。屠手の一人は赤い牝牛の傍へ寄り、鼻面を押へながら『ドウ、ドウ』と言つて制する。その側には雑種の牝牛が首を左右に振り、繋がれたまゝ柱を一廻りして、しきりに逃れやう／＼として居る。殆んど本能的に、最後の抵抗を試みんとするがごとくに見えた。

死地に牽かれて行く牝牛はむしろ冷静で、目には紫色のうるみを帯びて居た。皆な立つて眺めて居る中で獸

醫は彼方此方と牛の周圍を廻つて歩きながら、皮をつまみ、咽喉を押へ、角を叩きなどして、最後に尾を持ち上げ見た。

検査が済んだ。屠手は多勢寄つて群つて、聲を勵ましたり、叱つたりして、ヒツとそこに動かない牛を無理やり屠場の方へ引き入れた。屠場は板敷で、丁度浴場の広い流し場のやうに造られてゐる。牛の油断を見すまして、屠手の一人は細引を前後の脚の間に投げた。それをぐツと引絞めると、牛は中心を保てない姿勢に成つて、重い體軀を横倒しに板の間の上へ倒れた。その前額のあ

たりを目がけて、例の大鉞の鋭い尖つた鐵管を骨も砕けよとばかりに打ち込むものがあつた。牛は目を廻し、足をバタ／＼させて、鼻息も白く、幽かな呻き聲を残して置いて氣息も絶えんとした。

斯の南部牛のまだ氣息の残つたのを取繞いて、屠手のあるものは尻尾を引き、あるものは細引を引張り、あるものは出刃でもつて咽喉のあたりを切つた。そのうちに多勢して倒れた牛の上に乗つて、茶色な腹の邊と言はず、脊と言はず、とん／＼踏みつけると、赤黒い血が切られた咽喉のところから流れ出した。砕けた前額の骨の間へ

は棒を深く差込んで抉り廻すものもあつた。氣息のあるうちは、牛は身を悶へて、呻いたり、足をヒク／＼させたりして苦んだが、血が流れ出した頃には全く氣息も絶えた。

黒い大きな牛の倒れた姿が——前後の脚は一本づゝ屠場の柱にく／＼りつけられたまゝで、私達の眼前に横たはつて居た。屠手の一人はその茶色な腹部の皮を縦に裂いて、見る間に脚の皮を剥き始めた。また一人は、例の大鉞を振つて、牛の頭を二つ三つ打つうちに、白い尖つた角がポロリと板の間へ落ちた。斯の南部牛の黒い毛皮

から、白い脂肪に包まれた中身が顯はれて來たのは、間もなくであつた。

赤い牝牛が屠場へ引かれて來た。

屠牛の三

赤い牝牛に續いて、黒い雜種の牡も、型の如くに瞬く間に倒された。廣い屠場には三頭の牛の體が横たはつた。ふと板塀の外に豚の鳴き騒ぐ聲が起つた。庭へ出て見ると、白い肥つた脚の短い豚が死物狂ひに成つて、哀しく可笑しげな聲を揚げ乍ら、庭中逃げ廻つて居た。子供ま

で集つて來た。追ふものもあれば、逃げるものもあつた。肉屋の亭主が手早く細引を投げ掛けると、數人その上に馬乗りに乗つて脚を締めた。豚はそのまゝ屠場へ引摺られて行つた。

『牛は宜う御座んすが、豚は喧しくつて不可ません。危いことなどは有りませんが、騒ぐもんですから——』
斯ういふ肉屋の亭主に隨いて、復た私は屠場へ入つて見た。豚は五人掛りで押へられながらも、鼻を動かしたり、哀しげに呻つて鳴いたりした。牛の場合とは違つて、大鉞などが用ひられるでも無かつた。屠手はいきなり

出刃を揮つて生きて居る豚の咽喉を突いた。これに私はすくなからず面喰つて、眺めて居ると豚は一層聲を揚げて鳴いた。牛の冷靜とは大違ひだ。豚の咽喉からは赤い血が流れて出た。その毛皮が白いだけ、餘計に血の色が私の眼に映つた。三人ばかりの屠手がその上に乗つてドシム踏み付けるかと思ひ見るうちに忽ち豚の氣息は絶えた。

年をとつた屠手の頭は彼方此方と屠場の中を廻つて指圖し乍ら歩いて居た。その手も握つて居る出刃も、牛と豚の血に眞紅く染まつて見えた。最初に屠られた南

部牛は、三人掛りで毛皮も殆んど剥ぎ取られた。すこし離れて斯の光景を眺めると、生々とした毛皮からは白い氣の立つのが見える。一方には竹箒で板の間の血を掃く男がある。蹲踞んで出刃を磨くものもある。寒い日の光は注連を飾つた軒先から射し入つて、太い柱やそこに並んで倒れて居る牛や、白い被服を着けた屠手等の肩などを照らして居た。

そのうちに、ある屠手の出刃が南部牛の白い腹部のあたりに加へられた。卵色の膜に包まれた臟腑がべろべろと溢れ出た。屠手の中には牛の爪先を關節のところ

から切り放して、土間へ投出すのもあり、胴の中程へ出入を入れて肉を裂くものもあつた。牛の體からは膏が流れて、それが血のにはひに混つて、屠場に満ちた。

屠牛の四

私は赤い牝牛が『引割』といふ方法に掛けられるのを見た。それは鋸で腰骨を切開いて、骨と骨の間に横木を入れ、後部の脚に綱を繋いで逆さに滑車で釣し上げるのだ。屠手は三人掛りでその綱を引いた。

『そら、巻くせ。』

『あゝまだ尻尾を切らなくちや。』

屠手の頭は手づからその尻尾を切り放つた。

『さあ、車々』と言ふものもあれば、『ホラ、よいせ』と掛聲するものもあつて、牝牛の體は柱と柱の間に高く逆さに掛つた。脊髓の中央から真二つにそれを鋸で引割るのだ。ザク／＼と、まるで氷でも引くやうに。

『どうも切れなくて不可。』

『鋸が切れないのか、手が切れないのか。』

と頭は頭らしいことを言つて、笑ひ眺めて居た。

巡査が入つて來た。子供等はおづ／＼と屠場を覗い

て居た。犬もボンヤリ眺めて居た。巡查は逢ふ人毎に『御目出度う』と言つた儘、火のある小屋の方へ行つた。斯のどちやとくした屠場の中を獣醫は見つて廻つて、『オイ正月に成つたら御装束をもつと綺麗にしよや。』古びた白の被服を着けた屠手は獣醫の方を見た。

『ハイ。』

『醤油で煮染めたやうな物ぢや困るナ。』

南部牛は既に四つの大きな肉の塊に成つて、その一つツゝの股が屠場の奥の方に釣された。屠手の頭はブリキの箱を持つて来て、大きな丸い黒印をベタとと牛の

股に捺して歩いた。

不思議にも、屠られた牛の傷ましい姿は、次第に見慣れた『牛肉』といふ感じに變つて行つた。豚も最早一時前まで鳴き騒いだ豚の形體はなくて、紅味のある豚肉に成つて行つた。南部牛の頭蓋骨は赤い血に染みたまゝで、片隅に投出してあつたが、屠手が海綿でその血を洗ひ落した。肉と別々にされた骨の主なる部分は、薪でも切るやうに、例の大鉞で四つほどに切断せられた。屠手の頭も血にまみれた両手を洗つて腰の煙草入を取出し、一服やりながら皆なの働くさまを眺めた。

『このダンベラは、どうかして其方へ片付けろ。』

と獸醫は屠手に言付けて、大きな風呂敷包を見るやうな臓腑を片付けさせたが、その邊の柱の下には赤い牝牛の尻尾、皮、小さな二つの角などが残して居た。

肉屋の若い者はガラ〜と箱車を庭の内へ引き込んだ。箱にはアンペラを敷いて、牛の骨を投入された。

『十貫六百——八貫二百——』

なぞと読み上げる聲が屠場の奥に起つた。屠手は二人掛りで大きな秤を釣して、南部牛や雑種や赤い牝牛の肉の目方を計る。肉屋の亭主は手張を取出し一々それを

鉛筆で書留めた。

肉と膏と生血のほひは屠場に満ち〜て居た。板の間の片隅には手桶に足を差入れて、牛の血を洗ひ落して居る人々もある。牝牛の全部は早や車に積まれて門の外へ運び去られた。

『三貫八百——』

それは最後に計つた豚の片股を読み上げる聲だつた。肉屋の亭主に言はせると、牛は殆んど廢る部分が無い。頭蓋骨は肥料に賣る。臓腑と角とは屠手の利に成る。斯様な話を聞きながら、間もなく私は亭主と連立つて屠



其 十

牛場の門を出た、枯々な桑島の間には、喜び騒ぐ犬の聲々と共に、牛豚の肉を満載した車の音が高く響き渡つた。

千曲川に沿ふて

これまで私が君に話したことで、君は淺間山脈と蓼科山脈との間に展開する大きな深い谷の光景を略想像することが出来たらうと思ふ。私は君の心を淺間の山腹へ連れて行つて、あそこから見渡した千曲川の話もしたし、ずつと上流の方へ誘つて行つてそこにある山々、村々の話もした。暇さへあれば私は千曲川沿岸の地方を探るのを楽しみとした。私は岩村田から香坂へ抜け、内山峠を越して上州の方へも下りて見たし、依田川といふ千曲

273

川の支流に随いて和田峠から諏訪の方へも出て見たし、靈泉寺の温泉から梅木峠を旅して別所温泉の方へ廻つたこともある。田澤温泉のことは君にも話した。君は私と共に千曲川の上流にある主なる部分を見たといふものだ。私は更に下流の方へ——越後に近い方まで君の心を誘つて行かう。

輕井澤の方角から雪の高原を越して次第に小諸へ降りて来た汽車、それに私が乗つたのは一月の十三日だ。斯の汽車が通つて来た碓氷の隧道には——一寸あの峠の關門とも言ふべきところに——巨大な氷柱の群立す

るさまを想像して見たまへ。其から寒帯の地方と氣候を同じくするといふ輕井澤附近の落葉松林に俗に『ナゴ』と稱へるものが氷の花のやうに附着するさまを想像して見たまへ。

汽車が小諸を離れる時、プラットホームの上に立つ驛夫等の呼吸も白く見えた。窓の硝子越に眺めると田野菜島、桑島、皆な雪に掩はれて、谷の下の方を暗い藍色な千曲川の水が流れて行つた。村落のあるところには人家の屋根も白く、土壁は暗く、肥桶をかついで麥島の方へ通ふ農夫等も寒さうであつた。田中の驛を通り過ぎる頃、

淺間、黒斑、烏帽子等の一帶の山脈の方を望むと空は一面に灰色で、連続した山々に接した部分だけ朦朧と白く見えた。Unseen Whiteness——そんな言葉より外にあの深い空を形容して見やうが無かつた。窓側に遠く近く見渡される麥島のサクの窪みへは雪が積つて、それがウネ／＼と並行した白い線を描いた中に、枯々な雑木などがポツ／＼と立つのも見えた。

雪國の鬱陶しさよ。汽車は犀川を渡つた。あの水を合せてから、千曲川は一層大河の趣を加へるが、其日は犀川附近の廣い稲田も、岸にある低い楊も、白い土質の崖も、

柿の樹の多い村落も、すべて雪に掩はれて見えな。その沈んだ眺望は唯の白さでなくて、紫がかつた灰色を帯びたものだった。遠い山々は重く暗い空に隠れて、かすかに姿をあらはして見せた。斯の一面の雪景色の中で、僅かに單調を破るものは、ところ／＼に見える暗い杜と、低く舞ふ餓えた鳥の群とのみだ。行手には灰色な雪雲も垂下つて來た。次第に私は薄暗い雪國の底の方へ入つて行く氣がした。ある驛を離れる頃には雪も降つて來た。

斯の旅は私獨りでなく小諸から二人の連があつた。

いづれも私の家に近いところの娘達で、I、Kといふ連中だ。この二人は小諸の小學を卒へて、師範校の講習を受ける爲に飯山まで行くといふ。汽車の窓から親達の住む方を眺めて、眼を泣きはらして來る程の年頃で、知らない土地へ二人ぎり出掛くとは餘程の奮發だ。でもまだ眞實に娘々したところのある人達で、互に肘で突付き合つたり、黄ばんだ齒をあらはして快活に笑つたり、背後から友達を抱いて車中の退屈を慰めたりなどする。Naiveな、可憐な、見て居ても噴飯したくなるやうな連中だ。御蔭で私も紛れて行つた。Iの方は私の家の大屋さんの

娘だ。

豊野で汽車を下りた。そのあたりは耕地の續いた野で、附近には名高い小布施の栗林もある。其日は四阿白根の山々も隠れてよく見えなかつた。雪の道を踏んで行くうちに、路傍に梨や柿の枯枝の見える、ある村の坂のところへ掛つた。そこは水内の平野を見渡すやうな位置にある。私が一度その坂の上に立つた時は秋で、豊饒な稲田は黄色い海を見るやうだつた。向の方には千曲川の光つて流れて行くのを望んだこともあつた。遠く好い樺の杜を見て置いたが、黄緑な髪の毛のやうな梢からコ

ンモリと暗い幹の方まで、あの樹木の全景は忘られずにある。雪の中を私達は蟹澤まで歩いた。そこまで行くと、始めて千曲川に舟を見る。

川 船

降つたり休んだりした雪は、やがて雲に變つて來た。あの肅々降りそゞ音を聞き乍ら、私達は飯山行の便船が出るのを待つて居た。男は真綿帽子を冠り、藁靴を穿き、女は紺色染の真綿を龜の甲のやうに背中に負つて家の内でも手拭を冠る。それが斯の邊で眼につく風俗だ。

休茶屋を出て川の岸近く立つて眺めると上高井の山脈、
 菅平の高原、高社山、其の他の山々は遠く隠れ、對岸の蘆荻
 も枯れ、潜み洲の形した河心の砂の盛上つたのも雪に埋
 もれて居た。奥深く、果てもなく白々と續いた方から、暗
 い千曲川の水が油のやうに流れて来る。これが小諸附
 近の斷崖を突いて白波を揚げつゝ流れ下る同じ水かと思
 思ふと、何となく大河の勢に變つて見える。上流の方に
 は、高い釣橋が多いが、ここへ来ると舟橋も見られる。
 そのうちに乗客が集つて來た。私達は雪の積つた崖
 に添ふて乗場の方へ降りた。屋根の低い川船で、人々は

いづれも膝を突合せて乗つた。水に響く艦の音、屋根の
 上を歩きながらの船頭の話聲、そんなものがノンキな感
 じを與へる。船の窓から眺めて居ると、雪とも霰ともつ
 かないのが水の上に落ちる。光線は波に銀色の反射を
 與へた。
 斯うして蟹澤を離れて行つた。上今井といふところ
 で、船を待つ二三の客が岸に立つて居た。船頭はツヤブ
 水の中へ入つて行つて男や女の客を負つて來た。
 砂の上を離れる舟底の音がしたかと思ふと、又た艦の音
 が起つた。その音は千曲川の靜かな水に響いてあだか

も牛の鳴聲の如く聞える。舟が鳴くやうにも。それを聞いて居ると、何とでも此方の思つた様に聞えて、同行のIの苗字を思出せばそのやうに、Kの苗字を思出せば又そのやうに響いて来る。無邪氣の娘達は楽しさうに聞き入つた。兩岸は白い雪に包まれた中にも、ところどころに村々の人家、雑木林、森などを望み、雪仕度して岸の上を行く人の影をも望んだ。その岸の上を以前私が歩いた時は、豆粟などの畠の熟する頃で、あの莢や穂が路傍に垂下つて居た。左様、左様、私はあの時、斯の岸の下の方に低い楊の澤山蹲踞つて居るのを瞰下して、秋の日にナラ

する雑木の霜葉のかけからそれを眺めた時は、丁度羊の群でも見るやうな気がした。川船は今、その下を通るのだ。どうかすると、水に近い楊の枯枝が船の屋根に觸れて、それを潜り抜けて行く時にはパラ／＼音がした。船の中は割合に暖かだつた。同じ雪國でも高原地に比べると氣候の相違を感じる。それだけ雪は深い。午後の日ざしの加減で、對岸の山々が紫が、つた灰色の影を水に映して見せる。私は船窓を開けて、つぶやくやうな波の音を聞いた。舷にあたる水を眺めたりして行つた。斯の川船は白いペンキで塗つて、赤い二本の筋をあ

らはしてある。
ある舟橋に差掛つた。船は無作法にその下を潜り抜けて行つた。

黒岩山を背景にして、廣々として千曲川の河原に續いた町の眺めが私達の眼前に展けた。雪の中には鶏の鳴聲も聞える。人家の煙も立ちこめて居る。それが舊い飯山の城下だ。

雪の海

一晩に四尺も降り積るといふのが、これから越後へか

けての雪の量だ。飯山へ来て見ると、全く雪に埋もれた町だ。あるひは雪の中から掘出された町と言つた方が適當かも知れぬ。

斯の掘出されたといふ感じを強く與へるものは町の往來に高く築き上げてある雪の山だ。屋根から下す多量な雪を、人々が集つて積み上げ、するうちに、やがて人家の軒よりも高く成る。それが往來の真中に白壁の如く續いて居る。家々の軒先には『ガング』といふものを渡して、その下を用事ありげな人達が往來して居る。屋内の暗さも大凡想像されやう。それに高い葭簾で家

をかこふといふことが、一層屋内を暗くする。私は娘達を
 残して置いて、獨りで町へ出て見た。ナラ／＼雪の中
 で燈火の點く頃だつた。私は天の一方に、薄暗い灰色な
 空が紅色を帯びるのを望んだ。丁度遠いところの火事
 が曇つた空に映するやうに。それが落日の反射だつた。
 雪煙も斯の邊でなければ見られないものだ。實に陰
 鬱な頭の上から何か引冠せられて居るやうな氣のする
 ところだ。土地の人が信心深いといふのも、偶然では無
 いと思ふ。この町だけに二十何ヶ處の寺院がある。同
 じ信州の中でも、こゝは一寸上方へでも行つたやうな氣

が起る。言葉遣ひからして高原の地方とは違ふ。
 暗くなるまで私は雪の町を見て廻つた。荷車の代り
 に櫓が用ひられ、雪の上を馬が挽いて通るのもめづらし
 かつた。蒲で編んだ箕帽子を冠り、色目鏡を掛け、蒲脚絆
 を着け、爪掛を掛け、それに毛布だの、シヨウルだので身を
 包んだ雪装束の人達が私の側を通つた。
 復た雲が降つて來た。千曲川の岸へ出て見ると、そこ
 は川船の着いたところで對岸へ通ふウネ／＼と長い舟
 橋の上には人の足跡だけ一筋茶色に雪の上に印された
 のが望まれた。時には雪鞋穿いた男にも逢つたが、往來

の人の影は稀だつた。高社風原中の澤其他信越の境に聳ゆる山々は唯僅かに山層のかたちを見せ、遠い村落も雪の中に沈んだ。千曲川の水は寂しく音もなく流れて居た。

しかし試みにサク／＼と音のする雪を踏んで、船橋の上まで行つて見ると、下を流れる水勢は矢のやうに早い。そこから河原を望んだ時は一面の雪の海だつた——左様だ、白い海だ。その白さは唯の白さでなく、寂寞とした底の知れないやうな白さだつた。見て居るうちに、全身顫えて来るやうな白さだつた。

愛のしるし

飯山で手拭が愛のしるしに用ひられるといふ話を聞いた。縁を切るといふ場合には手拭を裂くといふ。だから斯の邊の近在の女は皆な手拭を大切に、落して置くことを嫌ふとか。

これは縁起が好いとか、悪いとかいふ類の話に近い。でも優しい風俗だ。

山の上へ

『水内は古代には一面の水澤であつたらう——その證據には飯山あたりの町は砂石の上に出來て居る。土を掘つて見ると、それがよく分る。』

種々の土地の話聞き、同行した娘達を残して置いて翌朝私は飯山を發つた。舟橋を渡つて、對岸から町の方に城山などを望み、それから岸の上の桑畠の雪に埋れた中を櫓で走らせた。この櫓は人力車の輪を取除して、それに『いたや』の堅い木片で造つた櫓を代用したやうなものだ。梶棒と後押棒とあつて人夫が二人掛りで引いたり押ししたりする。低い櫓の構造だから梶棒を高く揚

げると、乗つた客はいくらか尻餅ついた形になる。とは言へ、斯の乗りにくい櫓が私の旅の心を喜ばせた。私は子供のやうな物めづらしさを以て人夫達の烈しい呼吸を聞いた。凍つた雪の上を疾走して行つた時は、どうかすると私は桑畠の中へ櫓諸共ブチマケラレさうな氣がした。

『ホウ——ヨウ——』といふ掛聲と共に、雪の上を滑る櫓の音、人夫達がサク／＼雪を踏んで行く音まで私の耳に快感を起させた。川船で通つて來た岸の雪景色は私の前に靜かに廻轉した。

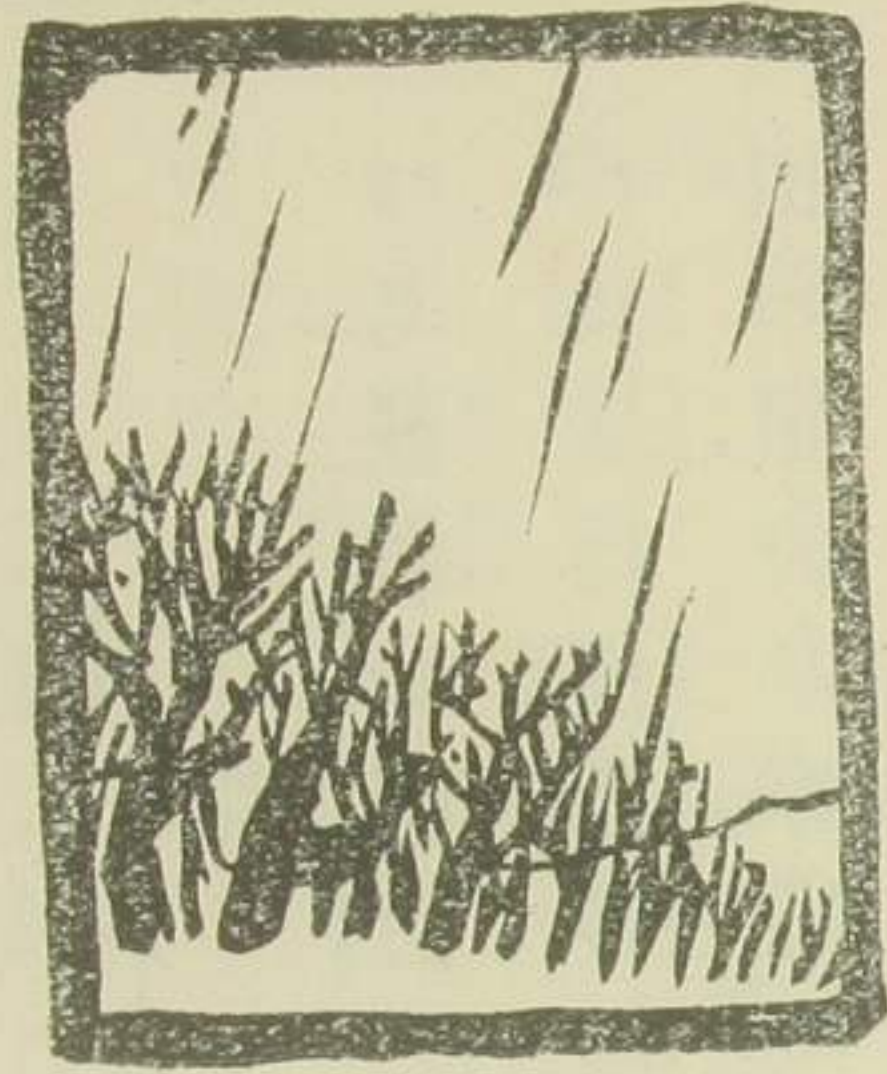
中野近くで櫓を降りた。道路に雪のある間は足も暖かであつたが、そのうちに黄ばんだ泥をこねて行くやうな道に成つて、冷く、足の指も萎れた。親切な飯山の宿で、爪掛を貰つて、それを私は草鞋の先に掛けて穿て來た。

一月十四日のことで村々では『ものづくり』といふものを祝つた。『みづくさ』といふ木の赤い條に、米の粉をまゐめて繭の形をつくる。それを神棚に飾りつける。

養蠶の前祝だといふ。

歸りには、日光の爲に眼もまぶしく、雪の反射で惱まされた。其日は千曲川の水も黄緑に濁つて見えた。

豊野から復た汽車で山の上の方へ戻つて行つた時は次第に寒さの加はることを感じた。けれども私は薄暗い陰氣な雪の中からいくらか明るい空の方へ出て來たやうな氣がして、ホツと息を吐いた。



其 十 一

山に住む人々の一

以前私が飯山からの歸りがけに——雪の道を橋で歸つたとは反對の側にある新道に添ふて——黄ばんだ稲田の續いた静間平を通り、ある村はづれの休茶屋に腰掛けたことが有つた。その時私は善光寺の方へでも行く『お寺さんか』と聞かれて意外の間に失笑した事が有つた。同行の畫家B君は外國仕込の洋服を着、ポケットに寫生帳を入れて居たが戯れに『お寺さん』に成り濟まして一寸休茶屋の内儀をまごつかせた。私が笑へば笑ふ

297

程餘計に内儀は私達を『お寺さん』にして、了つて、假令内幕は世俗の人と同じやうでも、それも各自の身に具つたものであることなどを、半ば羨み、半ば調戲ふやうな調子で言つた。斯の内儀の話は、飯山から長野あたりへかけての『お寺さん』の生活の一面を語るものだ。

私は飯山行の話の中で、土地の人の信心深いことや、あの山間の小都會に二十何ヶ所の寺院のあることや、左様いふ舊態の保存されて居るところは一寸上方へでも行つたやうな氣のする事を君に言つて置いた。斯の古めかしい空氣は、激しく變り行く『時』の潮流の中で、何時ま

で突き壊されずに續くものだらうか。兎に角、長い冬季を雪の中に過すやうな氣候や地勢と相待つて、一般の人の心に宗教的なところのあるのは事實のやうだ。これは千曲川の下流に行つて特に左様感ぜられる。

長野では私も善光寺の大きな建物と、あの内で行はれるドラマチックな儀式とを見ればかりだし、それに眺望の好い往生寺の境内を歩いて見た位のもので、實際奈何いふ人があるのか、精しくは知らない。飯山の方では私は何となく高い心を持つた一人の老僧に逢つて見た。連添ふ老婦人もなか／＼のエラ者だ。斯の人達は古い

大きな寺院を経営し、年をとつても猶活動を忘れないで居るといふ風だ。その寺では、丁度檀家に法事があるとやらで、御晝像といふものを箱に入れ、鄭重な風呂敷包にして借りて行く男などを見かけた。一寸したことだが、古風に感じた。

君は印度に於ける佛蹟探検の事實を聞いたとがあるか。その運動に参加した僧侶の一人は、斯の老僧の息子さんで、娘の婿にあたる學士も矢張一行の中に加はつた人だ。學士は當時英國留學中であつたが、病弱な體軀を提げて一行に加はり、印度内地及び錫蘭に於ける阿育王

の遺跡などを探り、更に英國の方へ引返して行く途中で客死した。此學士の記念の繪葉書が澤山飯山の寺に遺つて居たが、熱帯地方の旅の苦みを書きつけてあつたのなどは殊に、私の心を引いた。老僧の子息さんは兵役に服して居るとかで、その人には私は逢つて見なかつた。舊い朽ちかゝつたやうな寺院の空氣の中から、兎に角斯ういふ新人物が生れて居る。そして左様いふ人達の背後には、親であり又た舅姑である老僧夫婦のやうな人達があつて、幾十年となく宗教的な生活を送つて來たことが想像される。

しかし飯山地方に古めかしい宗教的の臭氣が残つて居て、二十何ヶ所の寺院が假令維持の方法に苦みながらも舊態を保存して居るといふことは、偶然でない。私は其老僧から飯山の古い城主の中には若くて政治的生涯を離れ、僧侶の服を纏ひ、一生佛教の傳道に身を委ねた人のあつたことを聞いた。又白隱、惠端、其他すぐれた宗教家がそこに深い歴史的の因縁を遺して居ることも聞いた。

斯ういふことは高原の地方にはあまり無いことだ。

第一左様いふ土地柄で無いし、左様いふ歴史の背景も無

いし法の残燈を高く掲げて居るやうな老僧のやうな人も見當らない。私は小諸邊で幾人かの僧侶に逢つて見たが、實際社會の人達に逢つて居ると殆んど變りが無いやうに思つた。養蠶時が來れば、寺の本堂の側に蠶の棚が釣られる。僧侶も勞働して、長い冬籠の貯へを造らなければ成らない。

山に住む人々の二

學問の普及といふことは斯の國の誇りとするもの、一つだ。多くの兒童を收容する大校舎の建築物を斯う

した山間に望む景色は、一寸他の地方に見られない。左様いふ建物は何かの折に公會堂の役に立てられる。小諸でも町費の大部分を傾けて、他の町に劣らない程の大校舎を建築した。その高い玻璃窓は町の額のところに光つて見える。

斯ういふ土地だから、良い教育家に成らうと思ふ青年の多いのも不思議は無い。種々な家の事情からして遠く行かれないやうな學問好きな青年は多く國に居て身を立てることを考へる。毎年長野の師範學校で募集する生徒の數に比べて、それに應じやうとする青年の數は可

なり多い。私達の學校にも、その準備の爲に一二年在學する生徒がよくある。

一體に斯の山國では學者を尊重する氣風がある。小學校の教師でも、他の地方に比べると、比較的好的報酬を受けて居る。又、社會上の位置から言つても割合に尊敬を拂はれて居る。その點は都會の教育家などの比でない。新聞記者までも『先生』として立てられる。長野あたりから新聞記者を聘して講演を聞くなどはこゝらでは珍しくない。何か一藝に長じたものと見れば、左様な人から新智識を吸集しやうとする。小諸邊のこと

言つて見ても、名士先生を歓迎する會は實に多い。あだかも昔の御關所のやうに、左様な人達の素通りを許さないといふ形だ。

御蔭で私もこゝへ來てから種々な先生方の話を拜聽することが出來た。故福澤諭吉氏も一度こゝを通られて、何か土産話を置いて行かれたとか。その事は私は後で學校の校長から聞いた。朝鮮亡命の客でよく足を留めた人もある。旅の書家などが困つて來れば、相應に旅費を持たせて立たせるといふ風だ。概して軍人も新聞記者も、教育家も、美術家も、皆な同じやうに迎へらるゝ傾

きがある。

斯うした熱心な何もかも同じやうに受け入れやうとする傾きは、一方に於いて一種重苦しい空気を形造つて居る。強ひて言へば、地方的單調……その爲には全く氣質を異にする人でも、同じやうな話しか出来ないやうなところがある。

それから佐久あたりには殊に消極的な勇氣に富んで居る人を見かける。こゝには極くノンキな人も居るが又非常に理窟っぽい人も居る。

何故斯う信州人は理窟っぽいだらう、とはよく聞く話だ

が、一體に人の心が激しいからだと思ふ。柳の葉が北風に鳴るやうに、一寸したことに直に激し顔へるやうな人がある。それにつけて思出すことは、私が小諸へ来たばかりの時、青年會を起さうといふ話が町の有志者の間にあつた。一同光岳寺の廣間に集つた時は、盛んな議論が起つた。私達の學校のI先生などは、若い人達を相手に薄暗くなるまでも火花を散らしたものだ。皆な草臥れて、規則だけは出来たが、到頭その青年會はお流れに成つて了つたことが有つた。

一方に、極く静かな心を持つた人と言へば、私達の學校で

植物科を受持つて居るT君などが其一人であらう。ほんとはとに學者らしい、そして静かな心だ。奈何な場合でも、私はT君の顔色の變つたのを見たことが無い。小諸からすこし離れた西原といふ村から出た人だ。T君の顔を見ると私は學校中で誰に逢ふよりも安心する。

山に住む人々の三

警察と鐵道に従事する人達は他郷からの移住者が多い。町の平和を監督する署長さんと言へば、大抵他の地方の人だ。このの巡查の中にはでも土地から出て奉職

する人などがあつて、ポク／＼と親しみのある靴の音をさせる。

鐵道の方の人達は停車場の周圍に全く別に世界を造つて居る。忍耐力の強い越後人より外に、斯の山の上の鐵道生活に堪へ得るものは無いとも言はれて居る。大手に住む話好きな按摩から、今の驛長のことを聞いたことが有つた。斯の人は新橋から直江津に移り、車掌を五年勤め、それから助役に七年の月日を送つて來たといふ。同じ山の上に住んでも、斯うした懸け離れた生活を送つて居る人もある。

以前ある驛長が残して行つた話だと言つて、按摩はまた次のやうなことを私に語つて聞かせた。『もと、越後の酒造で、倉番した人といふことで御座います。遽かに出世致しまして、この驛長さんと御成んなさいました。ある時、電信掛の技手に向ひ、葡萄酒罎の貼紙を指しまして、どうだ君に斯の英語が讀めるかと左様申しました。讀めるなら一升奢らうといふんで御座います。その驛長さんの無學なことは技手も承知して居りましたから、わざと私には讀めません、貴方一つ御讀みなすつて下さい、それこそ私が酒でも斯の葡萄酒でも奢りますからと

311

申しました、フム左様か、君はよく斯様なものが讀めなくて鐵道が勤まるネ、そんな話でその場は分れて了ひました。技手はもし譴責でもされたら酒にかこつける下心で、すこし紅い顔をして驛長さんの前に出ました。先刻は大きに失禮致しました、憚り乍ら斯様なものは英語のイロハだ皆さんも聞いて下さい。斯の貼紙には斯う云ことが書いてあると言ふて、ペロ／＼と讀んで聞かせました。ウン左様かい、左様いふことが書いてあるのかい、成程君はエライものだ、左様いふ學力があらうとは今迄思はなかつた……』

斯様な口論の末から驛長と技手とはすべて反對に出るやうに成つた。間もなくその驛長は面白くなくて、小諸を去つたとか。

線路の側に立つて居るポイント・メンこそは斯の山の上で寂しい生活を送る移住者の姿であらう。勤めの時間には二晝夜に亘つて、それで一日の休みにありつくといふ。労働の長いのに苦むとか。私は學校の往還に、懷古園の踏切を通るが、あの見張番所のところには、ポイント・メンが獨りでポツンと立つて居るのをよく見かける。

柳田茂十郎

先代柳田茂十郎さんと言へば、佐久地方の商人として、いつでも引合に出される。茂十郎さんの如きは極端に佐久氣質を發揮した人の一人だ。

諸國まで名を知られた斯の商人も、一時は商法の手違ひから豆腐屋にまで身を落したことがある。そこでまで思ひ切つて行つたところが茂十郎さんかも知れない。でも、この人が小諸で豆腐屋を始めた時は、誰も氣の毒に思つて買ふ人が無かつたとのことだ。茂十郎さんの家

では、もと酒屋であつたが、造酒は金を寝かして商法に働きの少いのを見て取り、それから茶商に轉じたといふ。時間の正しい人で、すこしでも掛直すれば、すん／＼歸つて行くといふ風であつたとか。幾人かの子に店を出させ、存命中はキナン／＼と屋賃を取り、死に際にその店々々を分けて呉れて行つた。一度でも茂十郎さんの家へ足踏したものの、ためには、死後に片見が用意してあつたと言つて驚いて、他に話した女があつたといふことも聞いた。私達の學校の校長に逢ふと、よく故人の話が出て、客に呼ばれて行つて一座した時でも無駄には酒を飲まな

かつたと言つて徳利を控へた手付までして聞かせる。

「酒は飲むだけ飲めば、それで可いものです」

萬事に茂十郎さんは斯ういふ調子の人だつたと聞いた。

小作人の家

學校の小使の家を訪ねる約束をした。辰さんは年貢を納める日だから私に来て見ると言つて呉れた。小諸新町の坂を下りると、浅い谷がある。細い流を隔て、水車小屋と對したのが、辰さんの家だ。庭には蓆を

敷きつめ、糶を山のやうに積んで、辰さん兄弟がしきりと働いて居た。

かねて懇意な隠居に伴はれて私は暗い小作人の家へ入つた。猫の入物とかで藁で造つた行火のやうなものが置いてある。私には珍らしかつた。しるしばかりに持つて行つた手土産を隠居は床の間の神棚の前に供へ、鈴を振り鳴らし、それから炬燵にあたり乍ら種々な話を始めた。極く無愛相な無口な五十ばかりの瘡せた女も黙つて炬燵にあたつて居た。その側には辰さんの小娘も餘念なく遊んで居た。斯の無口な女と竈の前に躊躇

つて居る細帯めた娘とは隠居の家に同居する人らしかつた。で私はこれらの人に關はず隠居の話に耳を傾けた。

話好きで面白い隠居は上州と信州の農夫の比較などから種々な農具のことや地主と小作人の關係などを私に語り聞かせた。斯の隠居の話で私は新町邊の小作人の間に小さな同盟罷工ともいふべきが時々持ち上ることを知つた。隠居に言はせると、何故小作人が地主に對して不服があるかといふに、一體に是邊では百坪を一升蒔と稱へ、一ツカを三百坪に算し、一升の糶は二百八十目

に量つて取立てる、一ツカと言つても實際三百坪は無い、三百坪なくて取立てるのは其割で取る地主と半々に分けるところは異数な位だ。そこで小作人の苦情が起る。無智な小作人がまた地主に對する態度は種々なところで人の知らない復讐をする。假令ば俵の中へ石を入れ、て目方を重くし、俵へ霧を吹いて目をつけ、又は稻の穂を顧みないで藁を大事にし、其他種々な悪戯をして地主を苦める。斯様なことをしたところで結局『三月四月は食ひじまひ』だ。尤も、そのうちには麥も取れる。

『しかし私の時には定屋様地主がお出なさると、必と一

升買つて、何がなくとも香の物で一杯上げるといふ風でした。今年はずいに任しときましたから、彼奴はまた奈何な風にするか……私の時には昔から左様でした。』

斯う隠居は私に話して笑つた。

そのうちに家の外では『定屋さんになア、来て御呉んなんしよつて、早く行つて来て呉れや、』といふ辰さんの聲がする。日の光は急に戸口より射し入り、暗い南の明窓も明るくなつた。『あ、日が射して来た、先刻までは雪模様でした、が、こりや好い鹽梅だ』と復た辰さんが言つて居た。

細帯締た娘は茶を入れて私達の方へ持つて来て呉れた。炬燵にあたつて居た無口な女は、ふいと臺所の方へ行つた。

隠居は小聲に成つて、

『私も唯一人ですし、平常は誰も訪ねて来るものが無いんです。年寄ですからねえ……ですから置いて呉れたいふので、彼彼いふものを引受けて同居さしたところが、悴が不服で黙つてあんなものを入れたつて言ひますのや。』

『飯などは炊いて呉れるんですか。』と私が聞いた。

『それですよ、世間の人は左様思ふ。ところが私は炊いて貰はない。どうして其様な事をしやうものなら皆な食はれて了ふ……そこは私もなか／＼狡いや。だけれども世間の人は左様言はない。そこがねえ辛いと言ふもんです。』

古い洋傘の毛縷子の今は炬燵掛と化けたのを叩いて、隠居は掻口説いた。斯の人の老後の樂みは、三世相に基づいて、隣近所の農夫等が吉凶を卜ふことであつた。六三の呪禁と言つて、身體の痛みを癒す祈禱などもする。近所での物識と言はれて居る老農夫である。私は斯の

人から『言海』のことを聞かれて一寸驚かされた。
 『昔の恥を御話し申すんぢやないが私も若い時には車
 夫をしてねえ、日に八兩づゝなんて稼いだことが有りま
 したよ。八兩サ。それがねえ、もうぱつぱと湯水のやう
 に無くなつて了ふ。どうして若い時の勢ですもの。私
 はこれで、奈何なことでも人のすることは大概して見ま
 したが、博奕と牢屋の味ばかりは知らない——え、これ
 ばかりは知らない。』
 斯う隠居が笑つて居るところへ、黄な真綿帽子を冠つ
 た五十恰好の男が地味な羽織を着て入つて來た。

『定屋さんですよ。』と辰さんが呼んだ。
 地主は屋の内に入つて炬燵に身を温め乍ら待つて居
 た。私が屋外の庭の方へ出やうとすると丁度水車小屋
 の方から娘が橋を渡つて來て、そこに積み重ねた糶の上
 へ糶を投げて行つた。辰さんは年貢の仕度を始めた。
 五歳ばかりの小娘が來て、辰さんの袖に取纏つた。辰さ
 んが父親らしい情の籠つた口調で慰めると、娘は頭から
 肩まで顫はせて泣く度に言ふこともよく解らない位だ
 つた。
 『今に母さんが來るから泣くなよ。』

『手が冷たい……………』

『ナニ、手が冷たい？そんなら早く行ってお炬燵へあたれ』
凍つた娘の手を握りながら、辰さんは家の内へ連れて
行つた。

谷に面した狭い庭には枯々な柿の樹もあつた。向ふ
の水車も藁圍ひされる頃で、樋の雫は氷の柱に成り、細谷
川の水も白く凍つて見える。黄ばんだ寒い日光は柿の
枯枝を通して、糶を積み上げた庭の内を照らして見せた。
年老いた地主は白髪頭を真綿帽子で包み乍ら、屋の内か
ら出て来た。南窓の外にある横木に倚凭つて、寒さうに

袖口を掻合せ、我と我身を抱き温めるやうにして、辰さん
兄弟の用意するのを待つた。

『どうで御座んすなア、糶の造へ具合は』

と辰さんに言はれて、地主は白い柔かい手で糶を掬つ
て見て一粒口の中へ入れた。

『空穂が有るねえ。』と地主が言つた。

『雀に食はれやして、空穂でも無いでやす。一俵造へて
掛けて見やせう。』

地主は掌中の糶をわけて、復た袖口を掻き合せた。

辰さんは弟に命じて糶を箕に入れさせ、弟はそれを圓

い一斗糘とちまきに入れた。地主ぢぬしは腰こしを曲かめながら、トボといふもので其糘そのちまきの上うへを丁寧ていねいに撫なで量はかつた。

『貴様きさま入いれる、聲掛こゑかけなくちや御年貢おねんぐのやうで無なくて不可いけ。』と辰たつさんは弟おとうやに言いつた。『さあ、どつしり入いれる。』

『一ひとわたりよ、二ふたわたりよ、』と弟おとうやの呼よぶ聲こゑが起おこつた。

六むつばかりの俵たはらがそこに並ならんだ。一俵べうに六斗三升とじようの糘ちまきが量はかり入いれられた。辰たつさんは棧俵さんだはらを取とつて蓋ふたをしたが、やがて俵たはらの上うへに倚よりかつて地主ぢぬしと押問答おしもんたふを始はじめた。地主ぢぬしは辰たつさんの言いふことを聞きいて、目めを細ほめ、無言むごんで考かんがへて居ゐた。氣きの利きいた弟おとうやは橋はしの向むかふへ走はしつて行いつたかと思おもふ。

ふうちに、酒徳利さけどくりを風呂敷包ふろしきづみにして、頬ほを紅あかくし、すこし微笑ほほみながら戻もどつて來きた。

『御年貢おねんぐですか。御目出度おめでたう。』と言いつて入いつて來きたのは水車小屋すゐしやこゝの亭主ていしゆだ。

私は、藁仕事わらしごとなどの仕掛しかけてある物置小屋もの置きこゝの方に邪魔じゃまにならないやうに居ゐて、棧俵さんだはらなどを尻しりに敷こき乍なら、斯この光くわう景けいを眺ながめた。辰たつさんは俵たはらに足あしを掛かけて藁繩わらなはで三みところばかり縛しばつて居ゐた。弟おとうやも來きてそれを手傳てつたふと、乾かわいた繩なはは時々切きれた。『俵たはらを締しめるに繩なはが切きるやうぢや、まだ免狀めんせうは覺束おぼつかないなア、』と水車小屋すゐしやこゝの亭主ていしゆも笑わらつて見みて居ゐた。

「一俵掛けて見やせう。」

「いくらありやす。出放題あるは。十八貫八百——」

「これは魂消た。」

「十八貫八百あれば、まあ好い粃です。」

「俵にもある。」

「左様です、俵にもありやすが、それは知れたもんです。」

「おらがとこは十八貫あれば可いだ。」

「なにしろ坊主九分混りといふ粃ですからなア。」

人々の間に斯様な話が交換された。水車小屋の亭主

は地主に向つて、米價のことを話し合つて、やがて下駄穿

のまゝ、粃の上を越して別れて行つた。

「どうだいお前の體格ぢや二俵位は大丈夫擔げる。」

と地主に言はれて辰さんの弟は一俵づゝ兩手に抱え、顔

を真紅にして持ち上げて見たりなぞして戯れた。

「まあ、お茶一つお上り。」

と辰さんは地主に言つて、私にもそれを勧めた。真綿帽

子を脱いで屋の内に入る地主の後に隨いて私も凍えた

身體を暖めに行つた。「六俵の二斗五升取りですか。」

斯う辰さんが言つたのを隠居は炬燵にあたり乍ら聞

答めた。地主の前に酒徳利の包を解きながら、

『二斗五升つてことが有るもんか。四斗五升よ。』

『四斗……』と地主は口籠る。

『四斗五升ぢやないや。四斗七升サ。左様だ——』と復た隠居が言つた。

『四斗七升?』と地主は隠居の顔を見た。

『あゝ四斗七升か。』と云ひ捨て、辰さんは庭の方へ出て行つた。

私達は炬燵の周圍に集つた。隠居は古い炬燵板を取出して、それを蒲團の上に載せ、大井に菟蓐と油揚げの煮付を盛つて出した。小皿には唐辛の袋をも添て出した。

古い布で盃を拭いて、酒は湯沸に入れて勸めて呉れた。

『冷ですよ。燗ではありませんよ——定屋様は是方で被入つしやるから。』

斯う隠居も氣輕な調子で言つた。地主は煙管を炬燵板の間に差込み、冷酒を舐め、隠居の顔を眺めて、

『斯ういふ時には婆さんが居ると都合が好いなア。』

地主の顔には始めて微かな笑が上つた。隠居は款待顔に、

『婆さんに別れてからねえ、今年で二十五年に成りますよ。』

『もう好加減に家へ入れるが可いや。』

『まあ聞いて下さい。婆さんには子供が七人も有りま
したが、皆な死んで了つた……今の辰は貰ひ子でサ……
奈何でせう、婆さんが私の留守に、家の物を皆な運んで了
ふ。そりや男と女の間ですから、大抵のことは納まりま
すサ……納まりますが……盗みばかりは駄目です。今
こゝで婆さんを入れる、あの隠居も神信心だなんて言ひ
ながら、婆さんの溜めたのを欲しいからと人が言ふ。そ
れが厭でサ。婆さんが来ても、直に盗みの話に成ると納
まらないや。モメて仕様が無い。ホラ、あの話ねえ——

段々トつて見ると、盗人が出て来ましたせ。可恐しいも
んだねえ。

隠居の話し振には實に氣の面白い、小作人仲間の物識
と立てられるだけのことがあつた。地主と隠居の間に
は、臺所の方に居る同居人母子のことに就いて斯様な話
も出た。

『へえ、あれが娘ですか。』

『子も有るんでさあね。可哀さうだから置いて遣らう
と言ふんですよ。妙に世間では取る……私だつて今年
六十七です……この年になつて、あんな女を入れたなん

て言はれちや、つまらない——そこが口惜しいサ。』

『幾歳に成つたつて氣は同じよ。』

御蔭で私もめつたに來たことのない屋根の下で、百姓らしい話を聞きながら、時を送つた。菟蓐と油揚の馳走に成つて、間もなく私は此の隱居の家を辭した。



二十其

路傍の雑草

学校の往還に——すべての物が白雪に掩はれて居る
 中で——日の映つた石垣の間などに春待顔な雑草を見
 つけることは私の楽しみに成つて來た。長い間の冬籠り
 だ。せめて路傍の草に親しむ。

南向きもしくは西向の桑島の間を通ると、あの葉の縁
 だけ紫色な『かなむぐら』がよく顔を出して居る。『車花』
 ともいふ。あの車の形した草が生えて居るやうな土手
 の雪間には、必と『青はこべ』も蔓ひのたくつて居る。『青

はこべ』は百姓が鶏の雛に呉れるものだ。と学校の小使
 が言つた。石垣の間には、スパウンの形した紫青色の葉
 を垂れた『鬼のはいさ』や、平べつたい肉厚な防寒服を着
 たやうな『さしや草』などもある。蓬の枯れたのや、其他
 種々な雑草の枯れ死んだ中に、細く短い芝草が緑を保つ
 て、半ば黄に、半ば枯々としたのもある。私達が学校のあ
 るあたりから士族屋敷地へかけては水に乏しいので、到
 るところに細い流を導いてある。その水は学校の門前
 をも流れて居る。そこへ行つて見ると、青い芝草が残つ
 て、他の場所で見るとよりは生々として居る。

奈何いふ世界の中に是等の雑草が顔を出して、中には極く小さな蕾の支度をして居るか、それも君に聞いて貰ひたい。一月の二十七日あたりから三十一日を越え、二月の六日頃までは殆んど寒さの絶頂に達した。山の上に住み慣れた私も、ある日は手の指の凍り縮むのを覺え、ある日は風邪のために發熱して、氣候の激烈なるに驚かされる。降つた雪は北向の屋根や庭に凍つて、連日溶くべき氣色も無い……私は根太の下から土と共に持ち上つて來た霜柱の爲に戸の閉らなくなつた古い部屋を見つけたことがある。北向の屋根の軒先から垂下る氷柱は二

尺、三尺に及ぶ。身を包んで屋外を歩いて居ると氣息がかゝつて外套の襟の白くなるのを見る。斯ういふ中で元氣の好いのは屋根の上を飛ぶ雀と雪の中をあさり歩く犬とのみだ。

草木のことを言へば、福壽草を鉢に植ゑて床の間に置いたところが、蕾の黄ばんで來る頃から寒さが強くなつて、暖い日は起き、寒い日は倒れ萎れる有様である。驚くべきは南天だ。花瓶の中の水は凍りつめて居るのに、買つて挿した南天の實は赤々と垂下つて葉も青く水氣を失はず、活々と變るところが無い。

君は牛乳の凍つたのを見たことがあるまい。淡い緑色を帯びて、乳らしい香もなくなる。こゝでは鶏卵も氷る。それを割れば白味も黄味もザクザクに成て居る。臺處の流許に流れる水は皆な凍り着く。葱の根、茶、澤まで凍り着く。明窓へ薄日の射して來た頃、出刃庖丁か何かで流許の氷をかん／＼打割るといふは暖い國では見られない圖だ。夜を越した手桶の水は朝に成つて見ると半分は氷だ。それを日にあて、氷を叩き落し、それから水を汲入れるといふ始末だ。澤庵も、菜漬も皆な凍つて、噛めばザク／＼音がする。時には漬物まで湯ですゝが

ねばならぬ。奉公人の手などを見れば、黒く荒れ、皮膚裂けてところ／＼紅い血が流れ、水を汲むには頭巾を冠つて手袋をはめてやる。板の間へ掛けた雑巾の跡が直に白く凍る朝などはめづらしくない。夜更けて、部屋々々の柱が凍み割れる音を聞きながら讀書でもして居ると、實に寒さが私達の骨まで滲透るかと思はれる……雪の襲つて來る前は反つて暖かだ。夜に入つて雪の降る日などは、雨夜のさびしさとは違つて、また別の沈靜な趣がある。どうかすると、梅も咲くかと疑はれる程、暖かな雪の夜を送ることがある。そのかはり雪の積つた

後と来ては、堪へがたいほどの凍み方だ。雪のある田島へ出て見れば、まるで氷の野だ。斯うなると、千曲川も白く氷りつめる。その氷の下を例の水の勢で流れ下る音がする。

學生の死

私達の學校の生徒で〇といふ青年が亡くなつた。曾て私が仙臺の學校に一年ばかり教師をして居た頃——私はまだ二十五歳の若い教師であつたが——自分の教へた生徒が一人亡くなつて、その葬式に列なつた當時の

ことなどを思出しながら、同僚と共に〇の家をさして出掛けた。若くて亡くなつた種々な人達のこと、が私の胸を往來した。

〇の家は小諸の赤坂といふ町にある。途中で同僚の老理學士と一緒に成つて、水彩畫家M君の以前住んで居た家の前を通つた。その邊は舊士族の屋敷地の一つで、M君が一年ばかり借りて居たのも、矢張古めかしい門のある閑靜な住居だ。M君が小諸に足を停めたころは非常な勉強で、松林の朝、其他の風景畫を澤山作られた。私がよく邪魔に出掛けて、この邊の寫生を見せ、貰つたり、

ミレエの繪の話などをしたりして、時を送つたのもその故家だ。

細い流について、坂の町を下りると、私達は同僚のT君、W君などが誘ひ合せてやつて来るのに逢ふ。Oは暮に兄の仕立屋へ障子張の手傳ひに出掛け、身體の冷えてツク／＼するのにも關はず、入浴したが悪かつたとかで、それから急に床に就き、熱は肺から心臟に及び、三人の醫者が立合で、心臟の水を取つた時は、四合も出たといふ。四十日ほど病んで十八歳で亡くなつた。話好きな理學士を始め、同僚の間には種々とOの話が出た。Oは十歳位の

頃から病身な母親の世話をして、朝は自分で飯を炊き、母の髪まで結つて置いて、それから學校に行つたといふ。病中も、母親の見えるところに自分の床を敷かせてあつた、と語る人もあつた。

葬式はOの自宅で質素に行はれるといふので、一月三十一日の午前十時頃には身内のももの町内の人達、教師、同窓の學生などが弔ひに集つた。Oは耶蘇信者であつたから、寢棺には黒い布を掛け、青い十字架をつけ、その上に牡丹の造花を載せ、棺の前で讚美歌が信徒側の人々によつて歌はれた。祈禱、履歷、聖書の朗讀といふ順序で、哥林

多後書の第五章の一節が讀まれた。私達の學校の校長は弔ひの言葉を述べた。人誰か死なからん、この兄弟のどとく惜まれむことを願へ、といふ意味の話などがあつた時は、年老いた〇の母親は聖書を手にして泣いた。士族地の墓地まで私は生徒達と一緒に見送りに行つた。松の多い静な小山の上に〇の遺骸が埋められた。墓地でも讚美歌が歌はれた。その石塔の側、この松の下には、〇と同級の生徒が腰掛けたり佇立んだりして、この光景を眺めて居た。

暖い雨

二月に入つて暖い雨が來た。灰色の雲も低く、空は曇つた日、午後から雨となつて、遽かに復活るやうな温暖さを感じた。斯ういふ雨が何度もく來た後でなければ、私達は譬へやらの無い烈しい春の饑渴を癒すことが出來ない。空は煙か雨かと思ふほどで、傘さして通る人や濡れて行く馬などの姿が眼につく。單調な軒の玉水の音も樂し。

堅く縮こまつて居た私の身體もいくらか延びくと
して來た。私は言ひ難き快感を覺えた。庭に行つて見
ると、汚れた雪の上に降りそゞ音がする。屋外へ出て
見ると、残つた雪が雨のために溶けて、暗い色の土があら
はれて居る。田島も漸く冬の眠から覺めかけたやうに、
砂まじりの土の顔を見せる。黄ばんだ竹の林、まだ枯々
とした柿、李、其他眼にある木立の幹も、枝も、皆な雨に濡れ
て、黒々と穢い寝惚顔をして居ない物は無い。

流の音、雀の聲も何となく陽氣に聞えて來る。桑島の
桑の根元までも濡らすやうな雨だ。斯の泥濘と雪解と

冬の瓦解の中で、うれしいものは少し延びた柳の枝だ。
その枝を通して、夕方には黄ばんだ灰色の南の空を望ん
だ。

夜に入つて、淋しく暖い雨垂の音を聞いて居ると、何と
なく春の近づくことを思はせる。

北山の狼、其他

生徒と一緒に歩いて居ると、土地の種々な話を聞く。
ある生徒が北山の狼の話が私にした。その足跡は里犬
よりも大きく、糞は毛と骨で——雨晒しになつたのを農

夫が熱の薬に用ゐる。それは兎や鳥などを捕へて食ふためだといふ。お伽話の世界といふものは斯うした一寸した話のはしにも表れて居るやうな氣がする。

野蠻な話を聞くこともある。こゝには鶏を盗むことを商賣にして居る人がある。雄鶏と牝鶏と遊ぶところへ、釣針で餌を呉れ、鳥の咽喉に引掛けて釣取るといふ。犬を盗むものもある。それは黒砂糖で他の家の犬を呼び出し殺して煮て食ひ、皮は張付けて敷物に造るとか。

土地の話の序だ。この邊の神棚には大きな目無し達磨の飾つてあるのをよく見掛ける。上田の八日堂と言

つて、その縁日に達磨を賣る市が立つ。丁度東京の酉の市の賑ひだ。願ひ事が叶へば、その達磨に眼を入れて納める。私は海の口村の怪しげな温泉宿で一夜を送つたことがあつたが、あんな奥にも達磨が置いてあるのを見た。

こゝは養蠶地だから蠶祭といふのをする。その日は繭の形を米の粉で造り、笹の葉に載せて祭るのだ。

二月八日の道祖神の祭は、いかにも子供の祭らしいものだ。土地の人は訛つて『どろろく神』と呼んで居る。あの子供の好きなと言ひ傳へる路傍の神様の小さな祠

のところへ藁の馬に餅を載せて曳いて行くのは、古めかしい無邪氣な風俗だ。幼いものゝ、楽しみとする日だ。

御辭儀

私達の學校の校長が小諸小學校の校堂に演說會のあつたのを機會として、醫者仲間の無能を攻撃したいといふ出來事があつた。先生の演說は直接には聞かなかつだが、それがヤカマしい問題を惹起したことを、後で私は理學士から聞いた。一體先生がこの地方に退いて青年の教育を始める迄には長い經歷を持つて來た人で、随分

町の相談にも預つて種々な方面に意見の立てられる人だし、守山あたりの桃島が開けたのも先生の力だと言はれて居る位だ。兎に角先生はエナアゼチックな勇健な體軀を具へた、何か爲すには居られないやうな人だ。斯ういふ氣象の先生だから、演說でもする場合には、やゝもすると其飛沫が醫者仲間などにまで飛んで行く。細心な理學士は又それを心配して私のところへ相談に來るといふ風だ。

ある晩岡源といふ料理屋からの使で、警察の署長さんの手紙を持つて來た。開けて見ると、私に來て呉れとし

てある。私は斯の署長さんが仲裁の勞を取らうとして居ることを薄々聞いて居た。果して岡源の二階には小諸醫會の面々が集つて居た。其時私は校長に代つて、さきの失言を謝して貰ひたいと言はれた。なにしろ私は先生の演説を知らないのだから、謝して可いものか奈何かの判断もつきかねた。謝すべきものなら先生が來て謝する、一應私は先生の意見を聞いてからのことにしやうとした。斯の形勢を見て取つた署長さんは、いきなり席を離れ、町の平和といふものゝ爲に、皆なの方へ向いて御辭儀をした。急に醫者仲間も坐り直した。何事も知

らない私は讓る氣は無かつたが、署長さんの厚意に對しても頭を下げずには居られなかつた。御辭儀をして斯の二階を引取つた時、つくづく私は田舎教師の勤めもツライものだと思つた。

その翌日私は中棚に校長を訪ねて、先生のために御辭儀をさせられたことを話して笑つた。すると先生は先生で忌々しさに、そんな御辭儀には及ばなかつたといふ返事だ。實に、損な役廻りを勤めたものだ。

春の先驅

一雨ごとに温暖さを増して行く二月の下旬から三月のはじめへかけて櫻梅の蕾も次第にふくらみ、北向の雪も漸く溶け、灰色な地には黄色を増して来た。楽しい春雨の降つた後では、湿つた梅の枝が新しい紅味を帯びて見える。長い間雪の下に成つて居た草屋根の青苔も急に活き返る。心地の好い風が吹いて来る。青空の色も次第に濃くなる。あの羊の群でも見るやうな、さまざまの形した白い黄ばんだ雲が、あだかも春の先驅をするやうに微かな風に送られる。

私は春らしい光を含んだ西南の空に、斯の雲を注意し

て望んだことがあつた。ポツと雲の形があらはれたかと思ふと、それが次第に大きく、長く、明らかに見えて南へ動くに随つて消て行く。すると復た、第二の雲の形が同一の位置にあらはれる。そして同じやうに展開する。柔かな乳青の色の空に、すこし灰色の影を帯びた白い雲が遠く浮んだのは美しい。

星

月の上るは十二時頃であらうといふ暮方、青い光を帯びた星の姿を南の方の空に望んだ。東の空には赤い光

の星が一つ掛つた。天にはこの二つの星があるのみだつた。山の上の星は君に見せたいと思ふものゝ一つだ。

第一の花

『熱い寒いも彼岸まで』とは土地の人のよく言ふことだが、彼岸といふ聲を聞くと、ホツと溜息が出る。五ヶ月の餘に渡る長い長い冬を漸く通り越したといふ氣がする。その頃まで枯葉の落ちずに居る櫛堅い大きな蕾を持つて雪の中で辛棒し通したやうな石楠木、一つとして過ぎ行く季節の記念でないものは無い。

私達が學校の教室の窓から見える櫻の樹は、幹にも枝にも紅い艶を持つて來た。家へ歸つて庭を眺めると、土塀に映る林檎や柿の樹影は何時まで見て居ても飽きないほど面白味がある。暖くなつた氣候のために化生した羽虫が早や軒端に群を成す。私は君に雑草のことを話したが、三月の石垣の間には、いたち草、小豆草、蓬蛇ぐさ、人參草、嫁草、大なづな、小なづな、其他數へ切れないほどの草の種類が頭を持ち上げて居るのを見る。私は又三月の二十六日に石垣の上にある土の中に白い小さな『なづな』の花と、紫の班のある名も知らない草の小さな花

とを見つけた。それが斯の山の上で見つけた第一の花だ。

山上の春

貯へた野菜は盡き、葱馬鈴薯の類まで乏しくなり、左様かと言つて新しい野菜が取れるには間があるといふ頃は、毎朝々々若布の味噌汁でも吸ふより外に仕方の無い時がある。春雨あがりの朝などに、軒づたひに土壁を匍ふ青い煙を眺めると、好い陽氣に成つて來たとは思ふが、食物の乏しいには閉口する。復た油臭い凍豆腐かと思ふと、あの黄色いやつが壁に釣されたのを見てもウンザ

リする。淡雪の後の道をびしょく歩みながら、「草餅はいりませんか」と呼んで來る女の聲を聞きつけるのは嬉しい。

三月の末か四月のはじめあたりには、君の住む都會の方へ出掛けて、それから斯の山の上へ引返して來る時ほど氣候の相違を感じるものは無い。東京では櫻の時分に、汽車で上州邊を通ると梅が咲いて居て、碓氷峠を一つ越せば軽井澤はまだ冬景色だ。私は斯の春の遅い山の上を見つめた眼で、武藏野の名残を汽車の窓から眺めて來ると、「ア、柔かい雨が降るナア」と左様思はない譯には行か

ない。でも軽井澤ほど小諸は寒くないので、汽車でこゝへやつて来るに随つて、枯々な感じの残つた田畠の間に、は勢よく萌え出した麥が見られる。黄に枯れた麥の蒼葉と青々とした新しい葉との混つたのも、離れて見るとナカ／＼好いものだ。

四月の十五日頃から私達は花ざかりの世界を撞に樂むことが出来る。それまで堪へて居たやうな梅が一時に開く。梅に續いて直ぐ櫻、櫻から李、杏、菜萸などの花が白く私達の周圍に咲き亂れる。臺所の戸を開けても庭へ出掛けて行つても花の香氣の満ち溢れて居ないところ……

ろは無ない。懐古園の城址へでも生徒を連れて行つて見ると短みぢかいながらに深ふかい春が私達の心こころを酔よふやうにさせる……

12.17.1932

大正元年十二月十五日初版印刷
大正元年十二月二十日初版發行

實價金六拾錢

千曲川のスケッチの奥附

著作者

島崎春樹

東京市神田區元柳原町三番地

發行者

關宇三郎

東京市京橋區弓町二十四番地

印刷者

金子久太郎

東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所

三協印刷株式會社

發行所 東京市神田區元柳原町三番地 左久良書房



文藝入門

第一篇

新片町より

島崎藤村氏著
長原止水氏裝

金五拾五錢
送費金八錢

(五版發賣)

田山花袋氏著
橋本邦助氏裝

(新版)

小說

髮

金壹圓貳拾錢
送費金拾貳錢

四六判布表紙四百餘頁
三色版口繪美裝箱入

77

田山花袋氏著
齋藤松洲氏裝畫
岡田三郎助氏口繪

田舍教師

金壹圓六拾錢
送費金拾貳錢

(賣發版六)

